
荒波の将軍

夕月日暮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

荒波の將軍

【Nコード】

N7743C

【作者名】

夕月日暮

【あらすじ】

複雑な立場で生まれ育ち、生涯を通して見ても実体がなかなか掴めない男、足利尊氏。彼は何を思い、鎌倉幕府、後醍醐天皇、そして弟直義らと争う道を選んだのか。英雄とも逆賊とも言われた室町幕府初代將軍・足利尊氏を中心に南北朝時代を描く、長編小説。

序章「足利氏」

南北朝時代は、人がよく動いた。

取り分け、足利尊氏あしかがたかうじは激動の人であった。

その生涯だけでなく、死後も動き続けている。逆賊とされることもあれば、英雄とされることもある。これほど不安定な人物というのも珍しい。

足利氏は源氏の一門である。平安の頃、源義国みなものよしくにという人が下野国しもつけのくに 足利荘を開拓し、そこを次男 義康よしやす が継承した。義康は領有した地名から足利義康とも呼ばれる。

その子 義兼よしかね は、源頼朝みなものよりとも に従い鎌倉幕府の創設に貢献した。頼朝の妻である 北条政子ほうじょうまさこ の妹を娶り、将軍の血縁として重用されたという。

その後、頼朝の家系は三代で断絶し、幕府の実権は北条氏が握るようになった。

が、足利氏は北条氏とも深い縁戚関係を持っていたため、変わらず力を持ち続けていた。

足利氏にとって思わぬ事件が起きたのは、尊氏の祖父に当たる足利家時あしたけ のときであった。

当時、鎌倉幕府では 安達泰盛あだちやすもり と 平頼綱たいらのよりつな による対立が起きていた。泰盛は急進的な改革派の代表であり、頼綱はそれに対抗する保守派代表という風だった。

有力者同士の抗争は、他の者たちを巻き込まずにはいられない。足利氏は、どちらかと言えば安達派だったようである。

安達泰盛は、北条氏勢力の御内人という人々を抑えようとした。言わば安達派は、幕府内で権力の集中を図りつつある北条派に「待った」をかけたようなものだ。安達派に属していたということは、足利氏はこの頃から北条氏に対し、何か思うところがあったのだらう。

この抗争は 霜月騒動^{しもつきざうどう} と呼ばれ、結果的に安達泰盛は敗れ、討たれた。足利家の当主となっていた家時も、泰盛より一年早くに亡くなっている。抗争に関わっていたことから自害したのでは、と言われている。

もつとも、この抗争によって足利氏と北条氏の縁が途絶えたわけではない。家時自身の妻、家時の子である 貞氏^{さだうじ} の妻、そして家時の孫の尊氏の妻は全て北条氏である。これらの婚姻がどちらの主導で行われたものかは分からないが、足利氏は相変わらず幕府内の有力武家だった。

ただ、足利氏に対抗出来る武家がなかったわけではない。鎌倉時代初期、結城朝光^{ゆづきともみつ} という武将がいた。初代将軍、頼朝の庶子ではないか、という説が出るほどの有力者である。組織の創建に関わった有力者だけあって、有能な人物だったのだろう。

この人が、足利氏と少々揉めた。
足利氏にとっては、頼朝に従った義兼の子、義氏^{よしうじ} の代のことである。

あるとき、義氏は結城家に書状を送った。
その書状の末尾には、

「結城上野入道殿 足利政所」
と記されていた。

政所と記した方が、格式は高い。

今日でもそうだが、手紙などを送る際は相手を立てるのが一般的な礼儀である。にも関わらず、足利氏は自分たちの方を上だとして結城家に書状を出したことになる。

これに朝光は不服を唱えた。

結城氏と足利氏は幕府内では同格であり、決して主従関係ではない。むしろ幕府創建に対する貢献度は結城氏の方が高い。にも関わらず、足利氏から格下扱いされたのは我慢出来ない、ということである。その思いが、結城氏から足利氏へと送られた書状の末尾に表れている。

「足利左馬頭入道殿、結城政所」

自分が味わった屈辱を、そのまま相手に返したのである。
こうなると、互いに一步も引けなくなってくる。

そこで問題は、幕府の執権となった北条氏の元へと持ち込まれた。
足利氏にも言い分はある。源氏の血筋を引いている、という誇り
だった。

鎌倉幕府は源頼朝を中心に、東国の武士たちが創設した組織である。
だが頼朝直系の源氏は三代で断絶している。他に源氏の血筋を
引く者で、もともと宗家に近かったのは、他ならぬ足利氏だった。
対する結城氏は、本来源氏に仕える家柄である。義氏からすれば、
「源氏の主流たる我ら足利氏が、源氏の元で働いていた結城氏より
も下であるはずがない」

と言いたかったであろう。

日本も戦国時代になると、血統を重視する思想は徐々に薄れてい
くが、この頃はまだ血筋というものが人々にとって重要な要素とな
っていた。現代の感覚で義氏の言い分を捉えてはいけない。

しかし、実力や経歴も当然無視されるものではない。幕府創建に
貢献した結城氏の重みは、誰もが認めるところであった。

そこで北条氏は、この問題を円満に収めることにした。

「両氏は同格である」

と裁定したのである。

北条氏にとっては難しい問題だったであろう。

源氏が途絶えた後、軍事力と言うより政治力で幕府の主導権を握
った北条氏には、こうした状況で迂闊な裁定を下せば即座に背かれ
る、という危険性が常にあった。名分の足利、実績の結城、どちら
も北条氏は味方にしておきたかったに違いない。だから、双方を宥
めるような方法を採った。

足利、結城両氏の言い分を見る限り、互いに納得出来る結末では
なかったであろう。しかし問題をそこで終えたのは、北条氏の立場
を尊重したとも言えるし、互いに本格的な争いになるのを避けよう

とした、とも言える。

どちらにせよ、足利氏は有力な武家ではあったものの、単独で他を圧倒する程ではなかった。

それは、霜月騒動の敗北によって自害したとされる家時の孫、尊氏が生まれた頃と同じだった。

第一章「鎌倉」

尊氏、最初は又太郎という名であった。

太郎とあるが、長男ではない。正室の子ですらなかった。

又太郎の父、貞氏の正室は釈迦堂殿という女性だった。この人もまた、代々の例に倣い、北条家から嫁に来ている。

ただ、貞氏と釈迦堂殿の婚姻は単なる慣習ではなく、政治的な意味合いが強かった。貞氏の父家時は、積極的ではないにせよ、反北条勢力とも取れる安達派に属していた。安達派は政争に敗れ、家時はこれに連座したような形で自害している。これまで親北条氏で通してきた足利氏の態度が、変わった。

釈迦堂殿が貞氏に嫁いだのは、微妙なものに変わった足利氏の態度を元に戻すという目的もあったと思われる。鎌倉の執権として絶大な権威を誇る北条氏だったが、絶対君主と言えるほどの存在ではなかった。大勢力である足利氏との全面対決は出来る限り抑えておきたい、と考えてもおかしくはない。

ただ、釈迦堂殿の母は安達泰盛の娘であった。この辺り、周囲の人間がどのように見ていたのかは想像の域を出ない。

ところで、貞氏と釈迦堂殿の子には、高義^{たかよし}という人がいた。又太郎にとっては異母兄に当たり、左馬頭に任じられていたという。本来はこの人が足利氏を継ぐはずだった。

この人が早世したことから、庶子の又太郎が足利氏の嫡男になった。もっとも高義は子を残しているから、それなりの年になってから亡くなったのだろう。

高義自身の生没年はよく分かっていないが、又太郎が生まれたときはまだ存命していたらしい。又太郎は少年期、次男として扱われていたと考えられる。それも庶子であった。

こうした前提の元に、今一つはつきりしない彼の前半生を想像してみたい。人間を見る上では、若い頃の経験というものが欠かせな

いからである。

およそ、名門の若君とは思えない子どもだった。

書物は真面目に読まず、気分が乗らないときは一日益体もなく過ごしている。かと思えば乗馬や弓矢に、異常なほど熱中することもあった。

家中では、

「今日の若君は何をされるのであろうか」

などと言う人も多かった。

もっとも、決して我侭なわけではない。何かをしたいと言い出し、人にそれを止められればすんなりと引き下がるようなところが又太郎にはあった。

その日は散策を行った。一応、領地の見回りという名目である。無論又太郎一人ではなく、実際に見回りを行う足利配下の武士たちがいる。

足利の地は下野国にある。

足利氏全体の所領は全国各地にあるが、又太郎は苗字の元になったこの地で育った。

ついでに、又太郎（尊氏）の出生地には諸説ある。

父の貞氏が出仕していた鎌倉説、足利氏の本拠である足利荘説もあれば、母方の出身地である丹波国^{たんぱのくに}上杉荘で生まれたという説もある。後年、彼が西の方に意識を向けたことを考えると、個人的には京からも近い上杉荘説を信じたい。

が、そこでずっと育てられたわけではないであろう。生まれてから数年経つ頃には、足利の地に移っていたはずである。

近年、治安は徐々に悪化しつつあった。元寇以来、鎌倉に対抗する勢力が全国的に出現してきている。そうした者たちは『悪党』と呼ばれた。

又太郎は悪党を見たことはないが、鎌倉に何事かが起きつつあるということは薄っすらと感じている。

……皆、覇気がないな。

道端には、横になって喘ぐ者たちが大勢いた。起き上がっている者たちも、皆どこか動きが鈍い。

……十分に食べていないからか。

それぐらいいしか考えられない。こうして歩いていても、肉付きの良い人間はほとんど見かけなかった。

それを口にすると、一緒にいた武士の一人は、
「今はどこも同じような有様でございましょう」と言った。

……どこもこのような有様では、駄目だな。
何が、とは思わない。

ただ漠然と、そんな風に感じただけである。

屋敷に戻った又太郎を待っていたのは、兄の高義だった。

「巡廻に出ていたそうだな」

高義はやや渋い顔をしていた。

嫡子と庶子という立場の違いもあって、又太郎は高義と一緒にいることが少なかった。不仲という程ではないが、顔を見合わせると説教をされた。年が離れていることもあり、まるでもう一人の父親のように思うことがある。

もつとも、又太郎はこの兄のことが嫌いではなかった。生まれつき、他者を嫌ったり憎んだりする情が薄いのである。

「鎌倉はいかがでしたか」

高義は先日まで鎌倉に出仕していた。今は所用で足利に戻っているが、またすぐに鎌倉へ向かわねばならない。

「御家人たちの間でも不満の声が上がっている」

御家人とは、鎌倉幕府の将軍に直接仕えた武士たちのことである。もつとも、この頃の将軍は実質北条氏の傀儡かいらいとなっていたので、幕府に所属する有力武士、と言った方が実像に近いかもしれない。

厳密には北条氏の家臣ではないが、ほとんど家臣同然となってい

る。

足利氏は御家人の筆頭格だった。

「このまま鎌倉を頼っていてもいいものか。わしもそう思うことがしばしばある」

御家人たちはその実力差ゆえ実質的に従ってはいるが、

……北条は我らの主にあらず。

という思いを抱いていた。

御家人の主は本来幕府の代表たる將軍であり、北条氏などはその政治代行者に過ぎない。高義の言葉は、彼個人のものと言うより、この時代の御家人全般のものであった。

「執権殿は政務を省みず、内管領の専横は酷くなるばかり。面白いことではない」

かと言って、高義にはどうすることも出来ない。執権に訴えたところで意味はなく、正面から内管領に挑めるほどの勢力も、足利氏にはない。

「そもそも内管領とは得宗の執事。なぜそれに皆従うのでしょうか」
得宗とは北条氏の本家のことである。二代目執権北条よしとき義時の法名に由来すると言われている。執権職は他の一族に譲り、自らはその裏で力を持ち続けた。鎌倉の実質的な支配者だった、と言っている。

もっとも、又太郎にとっては『北条本家』という印象しかない。

又太郎が生まれた頃には得宗家も力を失い、その家臣だった内管領が鎌倉の実権を掌握するようになっていたからである。

本来同僚だった北条氏が勢力を増していくのも面白いことではなかったが、今度は更にその配下風情が大きな顔をするようになってきたのである。御家人たちからすればたまったものではない。

今の執権である北条高時は得宗家でもある。しかし政務を取り仕切っているのは内管領の長崎たかすけ高資であった。

「内管領には力と勢いがある」

だから従わねばならぬ、と高義は言った。

高時が無能だから高資の専横を招くことになったのか、高資の力が強すぎて高時に実質的な権限がなかったのか。どちらにせよ、内管領の勢いには凄まじいものがあつた。

足利氏は御家人の筆頭格だが、それでも内管領には頭が上がらない。

「もし今我らが北条や長崎に戦いを挑めばどうなりますか」

又太郎の発した問いに高義はぎよつとした。

北条やその御内人、その筆頭たる内管領に対する不満は多くの御家人が抱いている。しかし、反旗を翻そうという者はいなかった。

「まず、負ける。他の御家人たちも味方にはつくまい。一族郎党皆殺しにされ、我らの所領は取られ、鎌倉はますます力をつける」

それほどまでに力の差は大きい。

御家人たちが一致団結すれば可能性はあるが、中心となるべき者がいない。勢力と名門の血筋こそあれど、足利氏も御家人の一角に過ぎない。他の御家人たちが進んで従ってくれるとは思えなかった。「なら、今は鎌倉に従うのが良いですね」

又太郎はけろりと言った。

先程の問いかけにも深い意味はない。単なる興味本位である。

そもそも足利を率いるのは高義なのだ。又太郎はそれを支えようとは思っていない。この頃の又太郎に鎌倉打倒の意志はほとんどなかった。

あるのは、漠然とした不満と、変わりつつある世の流れを見逃すまいとする思いだけだった。

大事業を成し遂げた者は、幼少時よりその兆候が現れていた、とされることが多い。又太郎も、反北条の気分を持つ家で育ったことから、幼少時より鎌倉に反旗を翻す土台が出来ていた、と見る人もいる。

そういう環境ではあつたであろう。

が、何もそれは又太郎の足利氏に限ったことではない。多くの御

家人たちも、気持ちの上では足利氏と似たようなものであった。

鎌倉も後期に入ると、北条得宗家への権力集中が甚だしいものになった。北条高時の祖父に当たる時宗の代に起きた、元寇の役が原因である。

元は当時大陸を支配していた世界最大規模の国家であり、その前身はチンギス・ハーンが築き上げたモンゴル帝国である。これが日本へ侵攻してきたとき、当時の執権時宗は得宗の強化を図り、武士たちへの統率力を高めるなどして対応した。戦力差は圧倒的で、悲痛を通り越して滑稽なほどであったが、幸運にも日本は元を追い返すことに成功した。

問題は戦後処理である。時宗の真意はよく分らないが、戦時中の非常措置であるべきだった得宗への権力集中は、戦後も残ったのである。

また、得宗の家臣である御内人、特にその筆頭格である内管領の発言力も増していった。

それに対して、北条家以外の有力武士である御家人に対しては、さしたる恩賞が出なかった。このことから徐々に御家人と御内人の対立が深まり、それがやがて霜月騒動に発展する。

霜月騒動の主役、幕府の重臣安達泰盛は御家人派、内管領平頼綱は御内人派である。

足利氏が安達派、つまり御家人派に属したことは既に述べた。積極的に泰盛を支持したわけではないにしろ、心情的にはそちらに傾いていたと考えられる。この騒動で安達派は敗れ、ますます御内人派の力は強まった。

当然御家人たちは面白くない。又太郎の感情はその延長線上にある。

……そもそも権力とは何か。

兄との問答を終えた又太郎は、自室にこもってそのことを考えていた。

誰がどうして偉いのか、ということが分からない。

兄は力と勢いだと言っていた。その言葉に、いろいろなものを当てはめてみる。遠い昔は、京の朝廷が国政を取り仕切っていた。そのうち武士と呼ばれる者たちが力をつけ、その中でも勢いのあった平家が朝廷を牛耳った。平家が勢いを失うと、鎌倉で源頼朝が挙兵し、津波の如き勢いで平家を打ち倒し幕府を開いた。しかし源氏も三代で失速し、そこを北条氏が一気に駆け上がって幕府を掌握した。……なるほど、勢いだ。

今は北条氏が勢いを失いかけており、内管領の長崎がそれに代わろうとしている。

確かに兄の言う通り、力と勢いである。

……権力とは波のようなものなのだ。

波はいずれ消え、その後からまた新しい波が来る。その繰り返しだと考えれば納得がいく。

「とすれば、足利の波は小さいものだ」

今の足利という波は、北条波や長崎波にぶつかれば、たちまち呑み込まれてしまうであろう。そのことが少しばかり不甲斐ない。

では、その波はどうすれば大きくなるのか。

又太郎は一日中、そんなことを考えながら過ごした。

第二章「兩統」

文保二年（一三一八年）。

この日、足利の館に来客があつた。

母と呼ばれて出向いてみると、そこにはほっそりとした顔つきの男が座っている。

「おお、そなたが又太郎殿か。なるほど、立派なものだ」

又太郎は十四歳。まだその顔には幼さが残っているが、徐々に身体つきは男らしくなってきた。同年代の男子と比べて特別立派な体格ではなかったが、姿勢が良いのか妙な風格があつた。

「京から参られた御客様です」

母に言われ、又太郎はゆったりと頭を下げた。礼儀作法はさほど熱心に習わなかったので、聞かれたことだけに答えることにした。

「そなたはしっかりと考えて答えておるようだな」

しばらくの問答の後、男は柔らかな笑みを浮かべて満足げに頷いた。

……母上の影響だろうな。

又太郎の母は、貞氏の正室ではない。しかし、身分の低い女性でもなかった。

母は上杉 清子^{きよこ} という。

彼女の祖父は 勧修寺 重房^{しげふさ} といって、朝廷に仕える公家であつた。鎌倉では親王を將軍とする慣習が出来つつあり、重房は親王と共に鎌倉へ下向したと言われている。それ以降上杉姓を名乗るようになり、足利氏と親交を結び、仕えるようになったらしい。

そうした経歴もあってか、清子は京にもいくらかの知人がいる。

この男もその一人に違いなく、であれば間違はなく公家であろう。

……なるほど、公家とはこういうものか。

又太郎は会話の最中、じつと相手を観察していた。

これまで見たことのない種類の人間だった。

又太郎の周囲にいるのは一本気で頑固、怒ると拳を振り上げそうな者たちが多い。しかしこの男は柔軟で掴み所がなく、喧嘩をすれば又太郎にも負けそうなほど華奢である。その代わり、会話をしているとき腹が痛くなった。まるで見えない槍で突付かれているような薄気味悪さである。こういった感覚は、これまで感じたことがない。

母に促されて部屋から出たときは、生き返ったような気がした。

「しかし、最後まで名乗らなかったな」

供の人間がいる様子もない。だとすれば、かなり高い位の人物か、取るに足らない下級公家のどちらかであろう。

下級公家なら道楽で旅をしているのかもしれない。

そうでなかった場合、今の対面には何か特別な意味がありそうだった。

「東国の中でも、ここは京と似たものを感じさせられる」

翌日、男は館の庭を歩きながら言った。側には又太郎の他、誰もいない。

「当家と京には 誼よしみ がありますので」

現在は、又太郎の叔父に当たる 憲房のりふさ がその誼となっている。

憲房は清子の兄弟で、上杉氏の当主である。祖父の代から続く人脈を利用して、足利まで京の風を運んでくるのが役目と言っている。

この上杉氏のおかげで、足利氏は北関東にいても京の情勢を詳しく知ることが出来る。無論、三河や丹波など全国各地に所領があるから、噂話を聞くぐらいなら上杉がいなくても問題は無い。しかし京、それも朝廷の人間と接点を持つことは、より生々しい都を感じることが出来るということである。

「京では先頃、新たな帝が即位されたとか」

又太郎は先日父から聞かされたことを思い出して言った。

この新しい帝とは、後に又太郎と共に歴史上大きな役割を果たす、後醍醐いまだい 天皇のことである。即位したこの年、三十一歳。又太郎

よりも十七程年長であつた。

又太郎が興味を持ったのは、帝その人のことではない。即位してまだ間もないこの頃、後醍醐天皇に関する風聞は足利の地には届いていなかった。ただ、天皇家は内部で揉めているという。又太郎の関心はそこにあつた。

「朝廷は今、どのようなになっているのでしょうか」
「と言うと」

「二つに分かれていると聞いております」

又太郎がそう言うのと、男はにわかに目を細くした。

「気になるかな」

「はい。なぜそうなってしまったのか、興味があります」

又太郎は素直に答えた。

京の情勢を知ってどうにかしよう、という意志などはない。ただ、外の世界が気になる。

男は口元に笑みを浮かべ、

「今より少し昔、後嵯峨 帝の世のことだ」

後嵯峨上皇には 後深草 天皇と亀山天皇という子がいた。上皇は兄の後深草よりも弟の亀山を寵愛し、弟に譲位するよう後深草に促したとされている。これで済めば良かったのだが、上皇はさらに、後深草の子ではなく亀山の子を皇太子とした。

後深草にしてみれば、嫡流でありながら親子二代、皇位から遠ざけられたような形になる。このことで後深草の系統と亀山の系統の対立が始まり、又太郎の時代にあっても尚それが続いていた。

後深草の血筋を引く方は 持明院統、亀山の血筋を引く方は 大覚寺統 という。

鎌倉幕府の判断も合わせて、鎌倉末期の頃は両統が交互に皇位に就いていた。先の帝である花園天皇は持明院統、今の帝である後醍醐天皇は大覚寺統、といった具合である。

「朝廷は帝や公卿たちの感情によって動いているのだ」
その点鎌倉よりも酷い、と男は付け加えた。

又太郎は京へ行ったことがない。直接目にしたことがないために、又太郎にとっての朝廷とは、心の中にだけ存在する神秘的なものであった。その神秘が、急に泥臭いものになってしまったような気がした。

「近々、何事が起こりそうな気がする。私としては、それが気がかりだ」

男は物憂げに呟いた。

確かに、二つの系統の天皇を交互に出し続けていくというのは無理がある。互いに出し抜かれることを警戒し、朝廷は緊張に包まれていることだろう。そんな状態がずっと続くはずもない。

……最悪、朝廷が分裂して大乱が起きるのではないか。

又太郎はそう思ったが、男の方は違うことを考えていたらしい。

「鎌倉殿次第では、丸く収まるかもしれぬが」

朝廷内での政治抗争の主役は、無論両統の皇族たちである。次いでそれぞれの派に組する公卿たちがいた。しかし、その両者の均衡を保っていたのは、鎌倉の北条氏と言っている。

両統が交互に即位するきっかけを作ったのは鎌倉であり、以後も朝廷はこの問題で揉めたとき、度々鎌倉の判断を用いた。鎌倉の本業は武士同士の間で起きる揉め事の裁断役であったから、それと似たような役割を朝廷からも期待されていたのかもしれない。

要するに北条氏の支配を成り立たせていたのは、軍事力や所領の広さ、そしてこうした裁判所としての性格であった。しかし、当代の鎌倉殿である北条相模守高時は、実権を内管領長崎高資に握られている。高時は執権就任からさほど経っていないため評判がよく分らないが、高資に関しては皆快く思っていなかった。

高資や高時から人心が離れ、その裁断を人々が認めなくなれば、皇族同士の抗争を抑えられるものはいない。男はそのことを思い、不安を感じているようだった。

……なるほど、北条は天秤のようなものか。

朝廷や多くの武家たちがぶら下がる天秤、それが北条氏の正体で

あろう。

この国の中心ではあるが、頂点ではない。

そして、その天秤は老朽化して壊れかけている。

……そうなれば、落ちたものはどうなるのだろう。

又太郎は底なしの池に落ちる自分を想像して、大きく身を震わせた。

「もし京で何事かが起これば、関東も無関係ではいられまい。足利氏も難しい立場になるかもしれぬ」

「当家は鎌倉に従うだけでございます」

「京では、そう単純に見てはおらん。血筋で言えば北条よりも足利が上。にも関わらず北条に幕府の実権を握られて、足利は快く思っていない。そのように見る者もいる」

又太郎は段々、この男と話しているのが恐くなってきた。何かとてつもない秘事を打ち明けられそうな気がしたのである。

しかし、緊張した又太郎を見て、男は頭を振った。

「別に又太郎殿によからぬことを吹き込もうとしているわけではない。ただ今後、そのような者がおぬしの前に現れることもあるであろう、と忠告しただけだ」

「私は兄を支えるだけの男です」

だから、自分はそのような厄介ごとに巻き込まれたくはない。又太郎はそう思ったのだが、

「いかん。自分がどのような状況にしようと、進退を見誤らぬよう気をつけなければならぬ。おぬしに限らず、今の世は皆そうでなければ生き延びれぬ」

男は厳しく諭すように言う。

「公卿と武士が分かれて長い年月が経ち、今度はそれぞれがまとまりを失くしつつある。国は荒れよう。それを収められる者が私には思い浮かばぬ。そのことがなにより恐ろしい」

第三章「高氏」

客人の公家が去ってから、又太郎は焦燥感に駆られていた。急に時代の流れが見えてきて、それが想像以上に大きいものであるように思えたのである。

それに追い討ちをかけるような凶事が足利の荘に飛び込んできた。兄、高義が死去したのである。

……なんということだ。

高義の母、釈迦堂殿に他の子はない。ということは、これまで次男坊に過ぎなかった又太郎が足利家を継がなければならない。

まず、以前のように自由に歩くことが出来なかった。さらに元服後、すぐにでも鎌倉へ出仕せよとの命令が下った。他にも礼儀作法を改めて叩き込まれたり、要人たちへの挨拶を行ったりと、やるべきことが急に増えた。

「当主というものはきついものだな、次郎」

鎌倉への出立を前に、又太郎は弟に愚痴をこぼしていた。

年は又太郎より一つ下で、同母弟である。後に ただよし 直義 と名乗ることになる次郎は、切れ長の双眸で真っ直ぐに又太郎を見据え、

「兄上、そのようなことでは困ります」

と、まるで高義のように言った。

「足利は源氏の名門であり、鎌倉では北条に次ぐ名門。その当主は、もっと凛然としていなければなりません」

「だからこそ、気が重いのだ」

北条に次ぐということは、それだけ相手に警戒されているということでもある。

鎌倉の心は必ずしも一つになっているわけではない。同じ幕府の人間でも、味方とは言い難いのが現状である。北条からは警戒され、北条に反感を抱く者からは注目される。それだけに足利氏の立場は難しい。

又太郎はにわかになんかそれを背負うはめになった。

「元服の儀では、足利にその人あり、と思われるよう振舞ってくださいませ」

頼りない兄を励まそうとしているのか、次郎は何度もそのように言った。

鎌倉では、まず要人たちへの挨拶を済ませた。

その後、北条高時を えぼしおや 烏帽子親 とし、元服の儀を行うことになった。

他にも鎌倉の有力者たちが何人か立ち会うことになっている。その中には、内管領長崎高資や父の貞氏もいた。

「わしの名から一字与えよう。これからは高氏と名乗るがよい」
儀式の最中、高時は湿った声でそう言った。

高時の高と貞氏の氏を合わせた名であり、武家の男児がこのように名を与えられることは珍しいことではない。大抵は親類縁者や縁のある有力者から一字を頂戴する。

……俺は高氏か。

名を与えられた又太郎は、無味乾燥なものとしてそれを記憶した。こうした実名は忌み名と言って、生前これで呼ばれることはほとんどないからである。それに、高時から一字を拝領するというのは、足利に生まれた者としてはさほど嬉しいことでもない。

また、合わせて従五位下の じぶのだゆう 治部大輔 に任じられたが、これも驚くことではない。足利の家格を考えれば妥当なところであろう。父の貞氏も、従五位下の さぬきのかみ 讃岐守 に任じられている。公式の場では官職で呼ばれることが多いので、治部大輔という響きは意識して覚えた。

ともあれ、これで足利又太郎だった男が、足利治部大輔高氏となった。

以後は彼のことを高氏と表記していきたいと思う。

元服の儀を終えてからは、鎌倉で政務を行うのが高氏の役目とな

った。幸い高氏には貞氏という後見人がいたので、諸事上手くいつていたと思われる。

「人を見よ」

と貞氏はよく言った。

彼は既に出家して浄妙寺殿と呼ばれていたが、その後も長く鎌倉の政局に触れてきている。

「政治というものは、人を見、人を知り、人を動かすことじゃ」

武士の政治はそういうものであった。

自身の所領内の人々を使って農業を行い年貢を取り立てる。配下の者たちを率いて、自領を脅かす外敵を討つ。あるいは鎌倉で自家の地位を安定させるため、派閥を組んだり対立相手を蹴落としたりする。

いずれにしても、人を見なければどうしようもない。

鎌倉に出仕して一月ほど経つ頃には、面白い人物というものも見えてきた。

ある日、高氏が鎌倉の自邸に戻ろうとしたときのことである。

前方から丁度入れ違いになる形で、何十人もの供を連れた武士が向かってくる。高氏とその武士、互いに馬上であった。

「おお、これは」

先に声をかけてきたのは相手の方だった。

多少痩せてはいるが、全身から底知れぬ何かを感じさせる男だった。それを決して表に出すまいともしているようで、そこが不気味でもある。

「ただいまお戻りか、足利殿」

「はい。佐々木殿はこれから御用ですか？」

「そうですな……いや、これから貴殿の屋敷に向かおうかと思っております」

その言葉に、男の供の者たちが顔を見合わせた。どうも困っているように見えたので、高氏は頭を振る。

「佐々木殿。執権殿に呼ばれておるのでしょうか。行かねば叱責を受

けるのでは」

「いやはや、分かりますか。では貴殿の屋敷には後日改めて行かせていただきますかな」

含みのある笑みを残して、男は去って行った。残された自分と郎党を見てみるが、あの男と比べると随分控え目なものであった。

「帰る途中、佐々木の京極殿と会った」

自邸で出迎えた次郎に、高氏は男のことを話した。

「ああ、左衛門尉殿ですか」

次郎も男のことは聞き及んでいるようだった。

この当時の名は佐々木左衛門尉高氏。

その名は、鎌倉で過ごす御家人たちの間で知られている。

京に程近い近江の地を領する佐々木氏の一族、京極の家に生まれた有力な御家人である。現在は執権である北条高時の側近として、鎌倉の政治でそれなりの力を発揮していた。ただ、人々は佐々木の力量はさほどに見ておらず、あくまで高時の側近として記憶しているようだった。

「あの男、気をつけねばなるまい」

他の御家人たちとは目が違う。見るべきものを見逃すまいと、時折相手の隙を突いてぎらぎらとした視線を送っている。先ほども、表面上はあっけらかんとしていたが、一瞬だけ目つきが鋭くなった。油断出来ない男である。

「私は、それほどの人物とは思いませんが」

「巧みに自分の力量を隠しているのではないか、とわしは思っている。本当のところは、まだよく分からぬな」

ただ、面白そうな人物ではある。

高時の側近ということもあり、親しくして損はなさそうだった。

それから六日ほど過ぎた後、佐々木高氏が屋敷を訪ねてきた。佐々木の供回りはいつものように豪勢なもので、屋敷の者たちは戸惑いを隠せずにいる。

ただ、高氏はさしてそれを気にしなかった。

「このような形で申し訳ない、足利殿」

悪びれた様子もなく、佐々木はそう言っただけで済んだ。

この男は高時の側近になる前からこうだった、と貞氏から聞かされている。つまり、権勢家というわけではないらしい。生来の派手好みなのか、それとも別に思惑があるのかはわからない。

二人は屋敷の一室で向き合った。所領の上では足利の方が遥かに上だが、鎌倉においては佐々木の方が中央に近い。しかし両者は御家人という意味ではあくまで同僚である。

上下関係は互いに意識していなかった。

最初は他愛ない世間話から始まった。鎌倉には慣れたか、ご領地での生活はいかがであったか、などというものである。しかしその中でも、時折佐々木の双眸が鋭く光るのを、高氏は見逃さなかった。佐々木の方もそれに気づいたのだろう。

「足利殿はよく人を見ておいでだ」

「なんの。まだ田舎から出てきたばかりの若輩者に過ぎませぬ。佐々木殿には敵いませぬよ」

「まあ、今はそうでしょうな」

佐々木は意味ありげに頷き、視線を庭の方へと向けた。

「ここの庭園は京の香りがする。足利殿は京に行かれたことは？」

「京に入ったことはありません。佐々木殿は？」

「何度か。あそこは美しく華やかでした。人がいなければ、より映える」

佐々木の言う人とは、おそらく公家たちのことだろう。

高氏もそうだが、関東近辺の武士は、京の公家に対してあまり良い印象を持っていない。そもそも鎌倉幕府の誕生は、公家の統治に不満を抱いた武士たちの抵抗運動がきっかけとも言える。過去、実際に争ったこともある。反目しあって当然の仲と言えるだろう。もっとも、敵愾心だけでなく苦手意識もあるためか、これまで武士は公家を完全に潰そうとはしていない。

「執権殿も、その人どものことは疎ましく思っておられる様子」

「左様ですか」

「されど、どうする力もあの御方にはない」

かすかに苦笑を浮かべ、佐々木は頭を振った。

「側で仕えているとよく分かる。今、鎌倉を支配しているのは内管領だ。執権や得宗は飾りに過ぎぬよ」

「際どいことを言う、と高氏は内心冷や汗をかく思いだった。その執権、得宗の側近をやっているのは佐々木ではないか。」

「足利殿は気づかれなかったのかな」

「何にでしょうか」

「貴殿は元服の際に執権殿から一字を拝領された。そのときわしも同席していたが、あの御方はさすがのような顔をしておったぞ」

「言われてみれば、そのような気もした。あのときは、情けない声だ、という程度にしか思わなかったのである。」

「わしも頂戴した。父からは氏の一字を、殿からは高の一字を。貴殿と同じ、ということになる」

「ははあ」

己の名をそれほど意識していなかったからか、高氏はそんな声をあげてしまった。

「わしは、わし個人が気に入られたから頂戴されただけで、気楽なものよ。だが足利殿の場合はちと違う、とわしは見ている」

「と、申されますと？」

「殿は、次郎殿にも高の一字をお与えになる、と」

「それはめでたきこと」

口ではそう言いながら、高氏にはかすかに引っかかるものがあった。

貴人の名から一字拝領するのはそう珍しいことではない。しかし、兄弟揃って同じ人物から名を貰い受けるのは、やや珍しいような気がする。

「そうやって縁を作っておきたいのだ、あの御方は。それぐらいし

か、やれることがない」

「はて。しかし、それは」

「名だけでは不足、ということは承知しておられるであろう。他にも何かなされるかもしれぬ」

つまり、高時は足利一族を味方に引き入れようとしている、ということらしい。

これまでも北条氏は足利氏の離反を防ぐため、婚姻を重ねてきた。それは双方にとって利になることだったと言える。

だが、今回のものは少し違うように思われた。

「内管領の権威が増したことで北条氏の中でも問題が増えてきている。ゆえにあの御方は、足利殿を北条氏や鎌倉の御味方ではなく、自身の御味方にしたいと考えておられるのだ」

「……それは」

佐々木は世間話のように話しているが、これは取りようによっては大変なことだった。

ただでさえ幕府は北条一派と御家人とで対立の風が出来つつある。その中で、さらに北条内部でも対立が起きつつあると言う。

ここまで分裂してしまつては、もはや鎌倉は組織とは言えないのではないか。

「何のために、そのようなことを私に？」

高氏は警戒するような面持ちで訪ねた。

しかし、佐々木はそこで面白がるような笑みを浮かべる。

「鎌倉において、わしと同程度に人を見ている人物を初めて見た。ゆえに足利殿に興味がわいた。今回はそれだけ、それだけ」

それから程なく、佐々木は帰って行った。

……狸め。

苛立ちと好意を織り交ぜながら、高氏はその後姿を見送った。

本心がまるで見えない、そのくせ時折共感出来るという妙な男であつた。

長い付き合いになるかもしれない、という予感がした。

佐々木左衛門尉高氏。

これより七年後、北条高時の出家に合わせて自らも出家し、
道と号する。

第四章「正中」

高氏が鎌倉に出仕するようになってから三年経ち、げんこう元亨二年（一三三二年）になった。

日々は緩やかに流れている。

しかし、遠くから大きな波が押し寄せてきそうな予感、高氏の中から消えなかった。

この頃になると、西の方にいる後醍醐天皇の存在を高氏も意識するようになっていた。高氏だけではなく、鎌倉の者たちは皆注目している。

本来、後醍醐の天皇就任は一時的なものであったという。

後醍醐は大覚寺統だが、嫡流ではなかった。嫡流は後醍醐の兄の子であり、その子が幼かったために後醍醐が即位した。そうした事情ゆえに、兄の子が相応の年齢に達したときは譲位しなければならなかった。さらには父の後宇多上皇が院政を敷いており、後醍醐はほぼ飾り物になるはずだった。

それが、即位して間もない頃から動き出し、昨年ついに上皇の院政を取りやめ、自ら親政を行うようになった。記録所と呼ばれる昔の行政機関を再興し、位階の高低を問わず有能な人材を集め、積極的な政治を始めたという。

飾り物どころか、帝自身が前面に飛び出して各方面に指示を出すようになったのである。

「今の帝は、なかなか我が強い御方らしい」

貞氏は複雑そうに言った。これ以上混乱を大きくしないで欲しい、という思いがあるのだろう。事実、朝廷内でも後醍醐の姿勢に戸惑う公家は多く、持明院統だけでなく、後醍醐自身が属する大覚寺統までもがその動向を警戒し始めているという。

双方の不安は、後醍醐がこのまま天皇家の嫡流の座を得ようとするのではないか、ということだった。

持明院統に皇位を譲らない可能性は高く、大覚寺統の嫡流である兄の子に譲位をしない可能性も十分にあった。

そういう匂いが、後醍醐天皇にはある。鎌倉にまでその匂いは漂ってきっていた。

「北の方も問題は深刻化してきている」

「先日、安藤又太郎殿が参られたようです」

貞氏と向かい合いながら、高氏は『北の問題』のことを思い浮かべていた。

問題とは、津軽地域を治めている安藤氏のことである。

津軽は北条氏の領地であり、安藤氏はその代官だったらしい。つまり、鎌倉の将軍に仕えた御家人ではなく、北条氏に仕えた御内人ということになる。

この安藤氏が、代官職を巡り一族で揉めていた。

争っているのは、現代官の安藤又太郎 季長すえなが と、その従兄弟にあたる安藤五郎三郎 季久すえひさ である。

詳しい経緯は分からないが、人づてに聞いた限りでは、剛直でやや強引な又太郎季長の政治に一族内から不満が高まり、五郎三郎季久が担ぎ出された、ということらしい。

両者の争いはここ何年か続いており、解決する気配もない。放置しておけば大事になる、と誰もが思い始めていた。

当時、日本から見れば未開の地である蝦夷の人々は、朝廷や幕府になびくこと薄く、両者の間には問題がよく起きた。津軽はその蝦夷と接しており、国境付近の要地の一つでもあった。加えて北条氏の領地である。北条氏にとっては、早急に解決すべき問題であった。安藤又太郎季長が鎌倉にやって来たのは、執権である高時に呼び出されたからであろう。

もともと季長は高時に対して簡単な挨拶を済ませたのみで、その後すぐに内管領長崎高資の元に向かい、長時間話し込んだという。

「長崎殿はどのように事を裁かれるのでしょうか」

「筋を通すならば、安藤又太郎殿を代官に留めおくべきであろう」

又太郎季長は不正を働いたわけではない。与えられた職務は忠実にこなしているのだ。罷免する理由はない。

不満を訴えている五郎三郎季久一派をどのように静めるか。それによって長崎高資の手腕が見極められる、と貞氏は考えているようだった。

「私には、なにやら嫌な予感がいたします」

高氏は長崎高資の顔を何度か見ている。

いつも眉をひそめて相手の懐に視線を向けてくる、という印象があった。はたしてあの目で、物事を公平に見ることが出来るのだろうか。

この一件に失敗すれば、蝦夷への防衛線は崩れ、北条氏に権威は一気に失墜するであろう。

もしそうなれば、足利氏はどう動くべきなのか。

正^{しょう}中^{うちゅう} 元年（一三二四年）。

その日、高氏の屋敷に奇妙な男が訪ねてきた。

山伏の格好をしているが、身体つきは華奢である。本物の山伏ではなさそうだった。

正規の客でもない。どこからか忍び込んできたのだろう。

門番たちは男には気づいていないようだった。

「足利の御当主とお見受けしたが」

そう声をかけられたのは、厠から出てきたときのことだった。

庭の片隅に、その男が立っている。

「何者か」

言いながら、周囲を見渡した。

どうやら男は一人らしい。

「名は言えぬ。さる御方の命により、そなたにこれを届けに来た」
言葉の中に訛りがある。

……こいつ、公家か。

腹が痛む。

あの公家と対面したときと似た感覚だった。

男が懷から出した書簡を受け取り、その中身を見て、高氏は息を呑んだ。

「これは、まことのものか」

高氏は何度も読み直した。しかし内容が変わるはずもない。

その書簡に書かれていたのは、後醍醐天皇から高氏に宛てられた、討幕への誘いであった。

事が大きすぎる。

高氏は厄介者を見るかのような視線を男に向けた。

「足利殿は、朝廷の内実は御存知か」

山伏は不躰にこちらを見上げてきた。態度の端々に尊大さが見え隠れしている。公家ゆえにそうなのか、それともそれほどまでに高い身分の者なのか。

「知っている」

近頃、後醍醐天皇は己の野心を前面に出すようになってきた。大覚寺統の傍流という立場に満足せず、自らの血筋を天皇家の本流に据えようと動き始めたのである。

朝廷では、後醍醐が己の子を皇太子にしようとしている、という評判が出始めた。持明院、大覚寺の両統はこれを警戒し、鎌倉の力を借りて別の皇太子を立てることに成功した。

こうした一連の動きに、後醍醐は強く反発した。

彼の野心の一つは、天皇という存在を古の頃のものに戻そうというものであった。即ち、絶対君主としての天皇である。

それを理想とする彼にとっては、両統が交互に即位していくという現状は 憤懣 ふんまん やる方がないものであっただろう。しかも、自らの手でそれを一つにまとめようとした矢先、鎌倉の介入によって動きを封じられた。

鎌倉憎し、である。

「帝はこの国をあるべき形に戻そうとされておられる。だが、鎌倉殿がいる限りそれは出来ぬと考えたのだ」

後醍醐の野心を妨げているのは、確かに鎌倉の存在だと言える。

鎌倉は天皇家が二つに分かれたことの一因である。また、現在も鎌倉は朝廷のことに關しては現状維持で良い、という考えを持っていた。後醍醐には鎌倉が、大覺寺と持明院の背後にいる総大将のように見えているのかもしれない。逆に言えば、鎌倉さえなくなれば両統が後醍醐に抗する術はない、ということになる。もしも後醍醐が鎌倉を倒せば、天皇家は一つにまとまるであろう。

……しかし、無謀だ。

後醍醐は皇位に就いているとは言え、朝廷すべてを掌握しているわけではない。仮に掌握出来たとしても、朝廷と鎌倉の力の差は歴然であろう。現に鎌倉時代前期、朝廷は一度鎌倉に敗北している。さらに、そのときから鎌倉は、朝廷を監視するための『六波羅探題^{だい}』を設置している。いわば朝廷は既に丸裸にされているようなものであり、後醍醐が動かせるのはその頭部ぐらいしかない、という有様だった。

天皇直々の誘いであっても、このように無謀な計画に加担する気にはなれない。

「せっかくですが、私に出来ることはありませんぬ」

高氏は恭しく頭を下げ、男に書簡を返した。男はぎらりと高氏を睨みつけてくる。

「帝の御意志に従えぬと？」

「これに従うのは帝の御為にもなりますまい。この度は辛抱されることこそ肝要かと」

今帝が立っても、鎌倉にはまず勝てないだろう。鎌倉に不満を持つ土豪が多少は味方するかもしれないが、多くの武士は自分と同じように動かないはずだ、と高氏は思っている。

「今は蝦夷のことで鎌倉も揺れている。この機を逃すのはいかなものか」

「失礼ながら、あまり長居せぬ方がよろしいかと」

これ以上この男と話すつもりはなかった。

あまり長々と接しては、なし崩し的に帝の味方につくことになりかねない。今はまだそのときではなかった。

男は不満そうに眉を寄せたが、高氏は意に介さずに立ち上がって背を向けた。

……とうとう来たか。

以前、あの公家が言っていたことが事実になった。

朝廷は、少なくとも今の帝は足利を味方に引き入れようとしている。またあの男が現れる可能性もあるし、他にも様々な工作を用いてくるかもしれない。それによって鎌倉から目をつけられることも、覚悟する必要がある。

……とにかく、家を守ることだ。

足利氏は、今の時点でも大勢力である。あれこれと考えて下手に動くよりは、じっとしている方が良い。

今の勢力を維持することさえ出来れば、道はいくらでも開けるであらう。

高氏の予想通りの結果となった。

山伏風の男が現れてから一月程経った頃、足利の屋敷に『帝御謀反』の知らせが届き、それから程なく、事件の顛末も知れた。

後醍醐天皇は六波羅探題の監視を逃れるため、無礼講の宴会をし、その中において同志たちと討幕計画を練っていたという。計画に加担していたのは後醍醐や彼の一派に属する公家たちだけではなく、美濃を本拠とする多治見たしみや土岐とぎといった武士層も関わっていた。

太平記では、この土岐氏の元に嫁いだ女性が夫から計画のことを聞き、これが無謀と思ったのか六波羅探題に属する父に密告、それによって事が露見したとある。

事態を把握した六波羅探題の動きは速かった。多治見、土岐といった武士は屋敷を囲まれて討ち死に、あるいは自害に追い込まれた。公家の中では、日野資朝すけともや日野俊基としもとといった後醍醐の側近

が『首魁』とされ、六波羅探題の手で捕縛されたという。

その後、天皇側は鎌倉に対する釈明を行い、結果的に後醍醐は赦されることになった。

「馬鹿馬鹿しいものだ」

高氏の前でそう呟いているのは、北条高時であった。

こうして高時に呼び出されることは、そう珍しいことではなくなっていた。特に高時は、高氏に対して度々縁談を持ちかけてくる。佐々木高氏の言うように、足利氏を味方につけておきたいと考えているようだった。

「帝御自身が首謀者であることは間違いない。誰もがそれを分かっている。しかし誰もそのことを言わぬ。帝というのは、あってないようなもの、ということかな」

高時は他人事のように話す。

今回の事件の沙汰も、実際は内管領の長崎高資が行ったのである。高時の意見は空気のようなものであり、用いられるのはその名ばかりであった。

「日野もあわれなものよ」

日野資朝、俊基の両名はともに後醍醐によって拔擢され、その期待に十分応える働きをしてきた。討幕計画の一件ばかりが目立ってしまうが、平時の政治手腕も高く、有能な公家であったと考えられる。それが、あっさりと切り捨てられたような形になった。

俊基は赦されて京へと戻ったが、資朝は佐渡島へ流された。これからは、常に鎌倉の監視下に置かれることになるであろう。

「わしは、面白くない」

危機を未然に防いでおきながら、高時の顔色は一向に冴えなかった。

「特に何が出来るわけでもなく、ただ執権という座に置かれておる。そこからは見たくないものまでいろいろと見えてくる。見えるだけで、それをどうすることもわしには出来ぬ」

高氏はその愚痴を聞きながら、ふと帝のことを思った。

後醍醐と高時には共通項がある。高い身分にありながら、その権力に大きな制限をかけられている、という点だ。

違うのは、行動力であろう。高時は何もせず、こうして愚痴をこぼしている。後醍醐はその現状に満足せず自ら動いた。今回は失敗したが、帝はまた動くであろう。そう思わせるものが、後醍醐にはある。

「おそれながら、なにゆえ帝を御赦しになられたのでしょうか」

「また物でも貰ったのではないか」

長崎高資のことである。

また、というのは安藤氏の一件のことで、これも高時を憂鬱にさせる一因となっているらしい。

安藤氏の問題は安藤又太郎季長と五郎三郎季久の代官職争いであったが、長崎高資はこのとき双方から賄賂を受け取り曖昧な対応をしたため、かえって紛争が激化し、未だに解決する気配がない。

問題の火種は何一つ消えていない。もしかすると、高資や高時にはそれがまったく見えていないのではないか。

正中二年（一三二五年）。

高氏は暇を見つけては遠乗りに出るようになっていた。

鎌倉の御所にはあまり近寄らないようにしている。何かと息詰まることが多くなってきたからである。

「殿は近頃、馬の扱いが上手くなりましたな」

隣で馬を走らせながら、こうのたろうもろなお高太郎師直が闊達な声をあげた。足

利の家で代々執事をしている家柄の若者で、年は高氏よりも二つ上であった。馬の扱いが巧みであるため、よくこうして遠乗りに連れ出している。

「次郎はどうだ、太郎？」

「御舎弟はまだまだにございますな」

主家の者に対しても、師直は遠慮がない。

高氏も彼のことは、家臣ではなく『仲間』として見ていた。変に

気兼ねする必要もなく、話しやすい。遠乗りによく連れ出している
もう一つの理由がそれだった。

「だからか。昨日は大分疲れているようだったが」

「細かいところに気を遣いすぎなのです。だからいらぬ疲れを抱え
込むのでしょうか」

「わしはないな、そういうことは」

「その通りでございますな」

互いに軽口を叩き合いながら、原野を駆け抜ける。

こうしているときが一番気持ちいい。

「殿は足元を見られませぬなあ」

「うん？」

「今、空を見上げておられたようですが」

「ああ」

確かに見ていた。

関東の原野と、そこから見える青空の風景。どこまでも広がって
いくような有り様が、高氏は好きだった。

「次郎がいたら、足元を見ると小言を申すであろうなあ」

それを想像して高氏は笑い声をあげた。師直も一緒になって笑う。
しかし、それからさほど経たないうちに、高氏は馬を止めた。遠
目に村落が見えたのである。

この辺りは北条氏の所領だった。

「見ろ、太郎。民も田も飢えておる」

村落の周囲にある田地は、まだ夏であるにも関わらず、半ば荒地
のような有様であった。僅かな作物を育てている人々も、皆痩せこ
けている。

近頃、東国の農民たちは飢えること甚だしい。下級武士たちの間
でも食糧不足が問題となっている。

そのくせ、鎌倉の有力武士層、特に北条一派の御内人たちは豊か
な暮らしをしていた。

「取り立ての厳しさは増す一方のようだな」

「戦がありますからな。民に残る兵糧はほとんどありますまい」

戦とは、安藤氏の件である。

この年、とうとう鎌倉は代官職を又太郎季長から五郎三郎季久に移した。しかし今更と言えば今更なこの沙汰に、季長が納得するはずもない。彼は一族郎党を率いて、先頃得宗家に対して反旗を翻した。安藤氏の内紛が、鎌倉に対する反乱にまで悪化してしまったのである。

鎌倉の威信は大きく落ちることとなった。当然この段階になっては鎌倉も本腰を入れざるを得ない。

又太郎季長討伐のための軍が編成され、奥州へ向かったのがつい先日のことだった。幸い高氏ら足利氏は少数の兵と食糧の提供を命じられただけだったが、北条氏の所領では軍備のために、いつも以上の兵糧徴発が行われ、民の中には餓死する者が少なくなかった。「戦を作ったのは内管領であろう。それでなぜ民が苦しまねばならん」

「さて、それは」

「誰のための鎌倉だ。内管領のためのものか、北条のためのものか。おかげでこうして苦しむ者が出てくる。おかしい話だとは思わぬか、太郎」

高氏は珍しく饒舌になっていた。

目の前に広がる貧しい風景。これを知っている人間が、鎌倉の中にどれほどいると言うのだろうか。

「殿、それは寿康丸様の……」

「言うな」

寿康丸は、昨年生まれたばかりの高氏の子であった。

母親は北条氏の領内に住んでいた女性だった。農家の一人娘だったらしいが、飢饉のせいで両親は既になく、女一人で田を守っていた。

特別な美しさはなかったが、力強さを感じさせる女性だった。そこに惹かれ、高氏は彼女の元に通うようになった。

それから間もなく子が宿った。

高氏はいいきっかけになると考え、彼女を屋敷の近くに呼ぼうとした。

彼女の土地は既に死にかけており、とてもではないが生活が続けられるものではなかった。しかし彼女は高氏の誘いを再三固辞した。両親が守ってきた土地を捨てることは出来ないのだと言っていた。

それからしばらくして、寿康丸が生まれた。

彼女は亡くなった。

そのときはじめて、北条が憎いと思った。

「雲行きが怪しい。雨が降るかもしれん。戻るぞ、太郎」

高氏は馬を返した。

師直はその後に黙って従う。

草の香りが風に運ばれてくる。

清々しくて気持ちいいはずなのに、少しだけ悲しくなった。

第五章「婚儀」

安藤氏の乱は 嘉暦^{かりやく} 三年（一三二八年）になって、ようやく終結を迎えた。

なんと長い騒乱であっただろう。鎌倉が本腰を入れてから、三年もかかっているのである。

この騒乱がなかなか解決しなかったのは、鎌倉が無能であったことだけでなく、鎌倉への反対派が勢いづいてきたことも原因と言える。

鎌倉に反旗を翻した安藤季長は早くに捕えられたが、季長派の一族が頑強に抵抗を続けた。それに呼応するかのように、鎌倉への不満分子も動き始めた。

武士ではないが、農民とも言えない。そうした新興勢力は『悪党』と呼ばれた。この場合の悪と言うのは、鎌倉という既存の秩序への敵対者、という意味であろうか。

津軽でもそうだが、それ以外の地でも悪党の蜂起がよく起こるようになった。

ただし、それらはいずれも小規模なもので、鎌倉に致命傷を与えるものではなかった。

それでも鎌倉の威信は、確実に落ちてきている。

「悪党の戦はどのようなものであった、太郎」

高氏は鎌倉の自邸で、高師直と向き合っていた。

師直は季長の郎党が奥州で蜂起した際に従軍し、その後も何度か悪党の鎮圧に出向いている。悪党の存在を無視出来なくなってきたと考えた高氏がそうさせたのである。

「やはり、我ら武士とは異なりますな。地形を良く活かします」

鎌倉の武士は騎馬と徒で編成され、原野戦を得意とする。大軍勢を用いて一斉に相手を押し込むような戦が多い。

それに対し、悪党は少人数ゆえに奇襲をしかけてくるが多く、

不利と見るや即座に引き上げる。攻めるときも守るときも行動は迅速で、森林や山岳などといった地形をよく活かす。森や山に逃げ込まれると、鎌倉の騎馬軍団はかえって動きにくくなるため、後を追うことが難しい。特に奥州は関東と比べて原野が少なく山岳の多い地域であるため、季長の郎党の鎮圧には手を焼いたという。

さらに厄介なのは食糧を狙う悪党たちだった。大軍勢の前には姿を見せず、ただ物資だけを奪っていく。そういう手合いには対処が難しく、長崎高資も苛立っているようだった。

……鎌倉の愚かさよ。

鎌倉を動かしている人間には、事の本質が見えていない。悪党をどう討伐するか、ということばかりを気にかけており、なぜそうした輩が現れ始めたのかということをもるで考えようとはしていない。……これでは帝に動けと言っているようなものだな。

会ったこともないが、高氏には後醍醐が笑みを浮かべている様がありありと想像出来た。

ある日、高氏は北条高時に呼び出された。おそらく此度も縁談のことであろう。

これまでは固辞してきたが、それもそろそろ限界かもしれない。ところで、少し前のことになるが、北条高時は執権職を辞して出家している。出家したのは嘉暦元年のことであり、安藤氏の問題はまだ解決していなかった。執権職を辞した理由は病弱ゆえにとされているが、はたしてそれだけなのかどうか。

「赤橋の娘がおぬしのことを好いているそうな」

高時の顔色は幾分ましなものになっていた。やはり執権職というものが重荷になっていたのだろう。高氏も足利の当主という立場上、高時の辛さというものが多少は分かる気がした。

「赤橋殿と申されますと、御妹君でございますか」

赤橋は北条氏の支流の家柄であり、鎌倉内では比較的穏健派と言える。先代の久時ひさときは六波羅探題や評定衆などを歴任した重鎮で

あり、現当主の 守時^{もりとき} は今の執権である。

以下は余談だが、高時が出家した後、彼が後継者を指名しなかったことから、執権職を巡って鎌倉内で騒動が起きた。

高時の一子を推したのは長崎高資とその父である 円喜^{えんき}。それに対抗したのは高時の弟である北条 泰家^{やすいえ} と安達氏であるという。長崎親子は霜月騒動の平頼綱と同族であり、内管領であることも共通しており、対する安達氏は安達泰盛の同族であるから、この対立はなにやら因縁めいていて面白い。

高時の子はまだ幼いことから、当人の意志はさほど重視されていなかったように思われる。それを執権に据えようとしたのだから、長崎親子は本格的に鎌倉の主導権を握ろうとしたのではないか。

泰家一派はそれに対抗する形で名乗りを上げた得宗家代表であり、この騒動は北条得宗家と長崎家の対立という見方も出来そうではある。

さすがに高時の子は幼すぎて無理があったのか、長崎親子は高時の子が成人するまでの代理のような形で、北条の支流である金沢貞顕^{さだあき} を執権とした。

だが泰家一派がこれに不満を唱えて圧力をかけたらしく、金沢貞顕はわずか十日ほどで辞任してしまったという。その後に出てきたのが赤橋守時（北条守時とも呼ばれる）だった。

詳しい経緯は分からないが、彼が執権に就任したことでこの騒動はとりあえず落ち着いている。赤橋の家は長崎派にも泰家派にも属さず、なおかつさほど強力な力を持っていなかったのだと思われる。そうでなければ、この騒動は落ち着かないだろう。

長崎親子か泰家がこの前後に没落しているならともかく、両者はこの後も鎌倉滅亡まで健在だったようなのである。ならば、赤橋守時という程よい飾りを置くことで、両者が和解したのではないか。

閑話休題。

ともあれ、赤橋守時の妹と婚儀を結ぶことは、決して悪い話ではない、と高氏は思った。執権と言っても得宗ではないし、内管領の

存在もあるから、守時は鎌倉の実権などほとんど握ってはいなかったであろう。

逆に言えば得宗や内管領の派閥に属したと見られることもさほどなく、余計な面倒事を抱え込まずに済みそうだ、とも考えられる。

鎌倉は発足初期からその傾向があったが、とにかく内部抗争が多い組織であり、それによって没落した家は数多い。下手に鎌倉内で権力を望もうとすれば、それだけ没落する危険性も高くなるのである。足利の家を守るという意識を持つ高氏は、あまり鎌倉の中枢に近づきたいとは思わなかった。

それに、個人的にも赤橋守時の妹、登子とっこのことは好いていた。北条一族の出身という点がやや惜しいが、芯が強く、あまり贅沢をしないという点が良い。

赤橋家は北条氏と言っても支流であり、しかも先代の久時は割合早くに亡くなっていたことから、守時、登子の兄妹は他の一族よりも苦労というものを知っていた。長崎親子や北条得宗家といった鎌倉の権力者に苦々しい感情を持っていただけに、高氏は赤橋の兄妹には、それなりに親しみを持っている。

それに、そういった諸々の事情を抜きにしても、登子から好かれているというのは純粹に嬉しかった。

人に好かれるということがどうにも嬉しい性質らしい。それが顔にも出ていたのか、高時はおかしそうに笑い声をあげた。

「此度の縁談、喜んでお受け致したく思います」

「私は反対です」

登子との一件を聞き、まず次郎が声を上げた。貞氏や清子は黙っている。

「駄目か」

高氏はのんきに首を捻ってみせたが、内心では困っていた。次郎は一度こうだと言ったらかなかなか引かない性格であり、加えて根っからの北条嫌いでもある。

北条を疎ましく思っているのは高氏も同じだったが、その全ての人間が駄目だとは考えていない。高氏は有能ではないが悪人ではないだろうし、登子と守時は篤実な人柄である。

次郎には、そういった柔軟な考え方がないらしい。良くも悪くも頭が固く、北条の一族であれば皆嫌いなようだった。

「ならばお前も一度会ってみろ。あれは良き娘だぞ」

「又太郎、お前は本当にそれで良いのですか？」

清子も心配そうな顔をしている。現執権の妹、という点が不安を駆り立てるらしい。

「私は良き話だと思っています。父上、いかがでしょう」

「今の当主はお前だ。差し出がましいことを言うつもりはない」

好きにしろ、と暗に貞氏は言っているようだった。もともと、足利の家にとって良くないと思ったのであれば、貞氏は反対を表明するはずである。ということは、貞氏もこの縁談は悪いものではないと考えているのかもしれない。

「しかし、あの子どもたちはいかがいたしましょう」

清子が言っているのは、高氏の子どものたちのことであつた。

この時点で二人いる。

そのうちの片方、竹若丸は足利氏の支流である加古（加子？）六郎の娘が母であるため、庶子として育てれば問題はないであろう。

問題はもう一人、寿康丸であつた。

こちらは農家の娘に産ませた子であり、しかも母親は既にない。今は家臣に事情を隠して預けており、そのことを知っているのは極一部の者だけだった。

この時代は江戸期ほど身分制度がはっきりしていたわけではない。しかし足利ともなれば相当の名門である。卑賤の身の娘に産ませた子を置けば、家中の者が反発する可能性もあつた。

「竹若は庶子として扱います。寿康丸は、今は、まだ」

寿康丸のことに關して、高氏は弱気だった。

なぜかは分からない。ただ、今でも寿康丸の母のことは夢に見る。

そして、その夢から覚める度に、どうしようもなく気分が沈む。

「それで次郎、どうだ？」

「父上や母上が反対なさらぬのであれば、是非もありますまい」

次郎は渋々といった様子で頷いた。これから先、登子と次郎が揉め事を起こさねば良いが、と高氏はため息をついた。

高氏と登子の婚儀は、当時にしてみれば盛大な形で執り行われた。実権はほとんど持たないとは言え、登子の兄は鎌倉の執権であり、対する高氏は御家人の大勢力の当主である。加えて、この縁談を持ちかけたのが得宗の主である高時だった。鎌倉の要人たちも多くが参加した。

「なにやら恥ずかしい気がいたします」

大勢の人々の中で、登子をはにかんで言った。

高氏よりも少し年下で、このときは二十代前半だった。当時としては遅めの結婚だったが、登子はまだどこか子供っぽさが残っている。

「しかし、わしに嫁ぐということは、何かと苦勞するかもしれない」「このような場で何を仰せられます。その覚悟なくして、貴方様に嫁ぐはずもないでしょう」

朗らかに語る登子に動揺は見られない。これで意外と肝が据わっているのだろう。彼女のそういうところも、高氏は好きだった。

次郎は盃を傾けながら、時折こちらに視線を向けてきた。北条一族も多く参席しているからか、どこことなく居心地が悪そうだった。高氏と目が合うと、何か問いただしたそうな表情を浮かべる。それを、高氏は笑って流した。こういう目出度い場で臭い顔をしてもらなくなるだけではないか。

途中、ふと厠へ行きたくなり、用を足して外に出ると、佐々木高氏が待ち構えていた。

ちなみにこの男は高時の側近ということで、彼と共に出家し、今では道誉と号している。佐々木道誉としての名が有名なので、以後

はこの男を道誉と記したい。

「これは佐々木殿。このような場でいかなされた？」

「道誉で構いませぬぞ。自分でも気に入っておりますでな」

二人は並んで歩きだした。

道誉は高時の側近ということで、今回の婚礼の儀に関してよく動いてくれたらしい。そのことで高氏が礼を言うと、道誉は闊達な笑い声をあげた。

「何、当然のことをしたまで。なにせ、足利殿の嫁御にと、赤橋殿の妹君を推したのはわしでござるからのう」

それは初耳だった。

確かに、これまで高時が勧めてきた女性と登子とでは、何か違っていったように思える。だからこそ高氏もこの縁談を受けたのだが、それが道誉の意見によるものだとすると、なにやら自分という人間が見透かされたようで恥ずかしい気がした。

道誉は高時と守時の間に立つことが何度かあり、それが縁となつて登子とも知り合ったのだという。登子の話を何度か聞くうちに、道誉は彼女の思い人が高氏であると気づいた。それで高時に推してみたのだ、という。

「これは、また改めて礼を言わねばなりませんかな」

「いや結構。これはただのお節介というもの。お気になさるな」

道誉はそう言って、うっすらとした顎鬚を撫でた。

その真意は、やはりよく分からない。ただ、嫌な感じがしなかったのは、道誉の人柄によるものか、高氏の性格ゆえのものか。

第六章「元弘」

世の動きは確実に激しさを増していった。しかし、高氏の周囲は緩やかなものであった。

元徳^{げんとく}二年（一三三〇年）、高氏と登子の間に一子が生まれている。二人が夫婦となってから二年が経っていた。

登子は足利の家にも少しずつ馴染んでいるようだったが、それでも北条氏の出身ということで、家中の中には複雑な思いを抱く者も少なくはないようだった。

皆公言することはないが、足利と北条の間が微妙なものであることは周知の事実である。登子からすれば、半ば人質に送られるような心地だったかもしれない。無論、それを口にするのではなく、普段は良き妻として振る舞っている。

二人の間に生まれた子は千寿王^{せんじゅおう}と名付けられた。登子が高氏の正室であるため、その子である千寿王が足利の嫡男という扱いになる。

千寿王より先に生まれているが、竹若丸は庶子とされた。例の寿康丸に至っては、高氏の子として扱われていない。

ただ、まだこの時代は江戸時代ほど家督相続法というものが確立されていない。嫡子と庶子の区別はあったが、それは厳密なものではなく、親の意向次第では立場がどう変わるかも分からなかった。

兄の死という明確な事情はあったものの、現当主である高氏も本来は庶子であった。にも関わらず、高氏の幼名は又太郎とある。もしこの名に清子や上杉氏の意向が関与していたなら、どこかでこの子を足利の跡継ぎに、という思いがあったのかもしれない。ただ、その辺りは推測の域を出ないのだが。

「これで安心した」

と言ったのは貞氏であった。

このとき五十八歳で、当時の感覚としてみればかなりの高齢であ

った。足利の家を継いだ高氏も当主として板についてきており、さらにその後を継ぐ孫の顔も見れたということで、生涯の重荷がふつと落ちたような気がしたのであろう。

元々足利の家自体が難しい立場にあり、ようやく引退して高義が当主になったかと思えば、その高義が急死するという不幸が起きた。己の家を守ることが武士にとってもっとも大事なことであるから、貞氏の生涯は気の休まる暇もなかったであろう。

「なんの、まだまだ父上がいなければ足利の家は上手くいきませぬ」「それはお前がどうにかせい。一人で辛いと思うのであれば次郎と共に家を盛り立てよ」

高氏と次郎がいれば足利の家は大丈夫、と貞氏は考えているようだった。

このところ高氏は鎌倉の中でも交友関係を広げ、特に御家人たちからの信頼を集めつつあった。また、高時の元にも時折通い、北条の不興を買わないようにしている。登子と通じて執権の守時とも話す機会が増えた。

交友関係が広がれば、それだけいろいろな情報が入ってくる。それが高氏の狙いでもあった。

一方、次郎は足利氏内部のことに気を配っていた。

足利氏と言っても、現在は多くの支族を出しており、完全に一つにまとまっているわけではない。全国各地に領地がある大勢力のためか、一族をまとめるのも相応の苦勞が伴う。

足利の支族で有名なのは、しば斯波氏、はたけやま畠山氏、細川氏、今川氏、きち吉良氏などであろうか。

高氏はこうした一族を取りまとめる、いわば足利宗家の当主という立場にある。それを支える形で、次郎が奮闘している。

次郎は仕事熱心かつ何事にも公平で、常に真摯な態度を崩さないことから評判は非常によかった。

外を見据える高氏と、中を守る次郎という構図は、今のところ上手く働いている。

高氏は細々としたことを面倒臭がる悪癖があり、逆に次郎はやや視野が狭く、考え方が固い。そうした互いの欠点を補い合っているのが、今の形なのである。

「父上は最近、よう笑われるようになりましたな」

「当主としてするべきことはした。そう思えば、心も自然と晴れやかになる。見果てぬ夢がついに実現しなかったことだけが心残りではあるがな」

「夢、でございますか。それはどのような」

「気にするな。これはあくまでわしの夢。わしだけが抱いた夢だ。お前にはお前だけの夢があるであろう。お前はそれだけを追えば良い」

と言われたが、実のところ高氏に明確な夢や目標と言ったものはない。

世の中をもっと良いものにしたいとは考えているが、それは今の鎌倉の在り方に対する不満から出たものに過ぎず、また世の中を変えるだけの力も資格も自分にはなかった。

「私には、夢というものが分かりませぬ」

「それもまた、気にすることではない。夢というのは覚めてみなければ、それが夢だと気づかぬものよ」

ということは、貞氏はもう夢から覚めてしまったということなのか。

元弘^{げんこう} 元年（一三三一年）、京の六波羅探題の元に 吉田定房^{よしただふさ}
という公家がやって来た。

この人は後醍醐天皇の乳父であり、彼の親政で力を発揮した側近でもあった。

定房は六波羅探題にある情報を打ち明けた。後醍醐天皇がなおも幕府討伐をあきらめず、側近の日野俊基や僧の 文観^{もんかん}らと共に討幕計画を練っているというのである。

またもや後醍醐天皇の計画は事前に漏れたわけで、それだけ周囲

の人には無謀な計画に見えたのであろう。

一度目のときは、計画に参加した夫を案じた妻が密告したわけだが、二度目の吉田定房も似たようなものだったらしく、後にこの人は後醍醐によって再び重用されるようになる。定房にとってこの密告は、後醍醐への裏切りではなく、彼の身を案じてのことだったのであろう。

ともあれ、朝廷を監視するという役割を持つ六波羅探題はこのときも素早く動いた。

文観と 円観^{えんかん} は逮捕された後、配流の刑に処された。この二人は太平記で強烈な存在感を放ち、幕府討伐の祈禱を行う怪僧として描かれており、後醍醐からの信頼は厚かったという。

また、これで二度目の捕縛となる”首謀者” 日野俊基は鎌倉へ送られてきた。今度こそ処刑されるであろう、との声が高氏の周りでも上がっている。

「日野というのは、悲しいものだな」

いつか高時が言っていたようなことを、今は高氏が次郎に語っていた。

言いつつ、高氏の脳裏には、いつかこの屋敷を訪れた山伏の姿が浮かんでいた。あれが俊基だったのでは、という埒もない思いがある。

高氏は俊基の顔を知る機会がなかった。尋問などは長崎親子や北条一族の者が行ったためである。俊基は正中のときに流された資朝と共に討幕計画にかかわり、各地の反北条と見られる武士を説いて回っていた、という噂がある。そのため北条一族は、あまり他の武士たちに俊基を会わせなくなかったのかもしれない。

日野氏は公家としての家格はそう高い方ではなく、後醍醐天皇による重用は異例の人事であったと言っている。それだけ俊基たちが優秀だったのか、単に後醍醐に気に入られただけなのかはよく分からないが、少なくとも無能ではなかったはずである。おそらくは有能だったのだろう。

自分の価値を認めてくれた後醍醐の悲願を果たすために、両名は懸命に動いた。

これも一つの忠節の形なのか。

「時に兄上。近頃は得宗殿の元には行かれませぬのか？」

「用があれば行く。しかし、なぜそのようなことを聞く」

次郎が北条家のことを持ち出すのは珍しかった。高氏が訝しげに問うと、次郎は戸惑いを浮かべながら、

「近頃、得宗殿と内管領の間が険悪なものになり、殿中ただならぬ様子だと聞きましたので」

「ああ、それか」

そのことならば高氏も知っている。と言うよりも、執権と内管領の間に確執があることは前々から承知していた。高時に呼ばれることが多かったので、その辺りの雰囲気は嫌でも伝わるというものである。

ただ、最近になってそれが表面化してきたのには訳がある。

「長崎の親子は朝廷に対して断固たる措置を取るべきと主張し、得宗殿はそれに反対なされたのだ」

長崎円喜、高資親子の主張は非常に明快である。

後醍醐天皇の気質を考えれば、ここで生温い措置をすることは下策。少なくとも後醍醐を天皇の座から引きずり落とさねば、三度討幕計画を企てるであろう、という。

確かにその通りだ、と高氏も思う。

一方、高時は穏便に済ませようと考えている。

二度も計画を事前に防げたのだから、それで良いではないか、というのがその根拠であった。

ただ、口にはしないものの、高時の心には別の理由が潜んでいる。それは、天皇家に対する畏怖の念だった。

以下、少し余談。

鎌倉時代に入り、武家政権が力を増して武士の存在が大きくなった。しかし武士の世と言い切れるほど、武士が絶対だったわけでは

なく、また朝廷が無力だったわけでもない。

高氏のこの時期より百年ほど前、鎌倉前期に起きた 承久^{じょうきゅう}の乱で、幕府は朝廷に勝利した。

以降鎌倉の発言力は大きくなり、六波羅探題を設置するなどして朝廷の力を封じ込めたため、武士の世が来たと見てしまいがちになる。しかし鎌倉は、主導権こそ握ったものの朝廷への関与は消極的なままであったし、相変わらず京から親王を迎えて将軍とするなど、勝者にしては低姿勢であった。また、全国の土地も武士が完全に掌握していたわけではなく、朝廷の所領も多く残っていた。

つまり、鎌倉時代というのは、武士の勃興と朝廷の衰退という様相こそあるものの、両者が比較的对等な立場で共存していた時代だった、と言える。

この辺り、鎌倉と朝廷の関係がどのようなものだったかはいくつか見方があるが、決してどちらかがどちらかを完全に掌握していたわけではない。

そうしたことあって、鎌倉を支配してきた得宗家の当主であっても、天皇家に対する畏怖の念は持ち合わせていた。

当時はまだ古くからの宗教観が人々の中に残っていたから、天皇という神秘的な存在に厳しい措置を取るということは、非常に勇気が必要としたのかもしれない。

ともかく、再度発覚した討幕計画への措置を巡り、高時と長崎親子は意見を違えた。

そうなれば、専横著しい長崎に対して前々から抱いていた高時の感情が爆発したとしても無理はない。

数日後、高氏の屋敷に道誉が飛び込んできた。珍しく顔色が悪く、肩を落としている。

「得宗殿が無茶をされた。おかげでわしも危ないところであつたわ」

「その無茶とは？」

「内管領の暗殺を企てたのよ」

道誉の言葉に、高氏は目を丸くした。

得宗と内管領は北条を支える二柱である。その間に、とうとう亀裂が走ったということなのか。

「それで、得宗殿は？」

「内管領に弁解して事なきを得た。わしも必死に弁解してようやく疑いを晴らせたという有様よ」

しかし、弁解をしなかった側近たちは何人か処断されたという。

「得宗殿も存外頼りにならぬ。保身のためなら側近であっても切り捨てなさる」

「そもそも、妙な話ではありませんな。主君が臣を暗殺しようとし、それを弁解するとは」

全く、主従関係が乱れ切っていると言わざるを得ない。

「しかし得宗殿はこれで折れるしかなかった。鎌倉は朝廷に対し強硬な態度で挑むことになる」

「道誉殿は、どう思われますか？」

「まず鎌倉が勝つであろう」

道誉の観測は正しいだろう。

帝の戦力は、正中のときと変わらない。むしろ日野資朝、俊基といった討幕における側近を失った分、心許ないものになったと言える。

「今、帝の元に集う武士はさほどおらぬ、とわしは思う。集うとすれば、もっと別の者たちであろう」

「悪党、ですか」

高氏の言葉に、道誉は無表情で頷いた。危機的状況を脱してきたばかりだからか、いつものような余裕が見えない。

「悪党をどう見る、足利殿？」

「一つ一つはさして恐ろしくはありません。ただ、彼らは草木のように、どこにでもいる。倒しても倒しても尽きることがありません」
世を治めるために誰かが動かねば、悪党はいくらでも出てくるであろう。今のようによりで押さえつけているだけでは、どうにも出来ない相手だった。

悪党は領主から自分たちの利益を守るのが目的だから、鎌倉も朝廷も同じようなもの、と考えているかもしれない。しかし、後醍醐天皇がその辺りを理解して、悪党に対する手を打てばどうなるか。「鎌倉は悪党には勝てましょう。されど、いつまで勝ち続けられいいのか、という気もいたします」

第七章「長崎」

高氏は得宗家の館で待っていた。

いつものように高時から呼び出された、というわけではない。呼び出してきたのは、長崎高資である。

……はて、一体どのような用件か。

高氏と高資の間に、私的な繋がりはない。とすれば公的な要求であり、この情勢下であれば出兵の要請かもしれない。

ところが、やって来た高資が告げたのは別のことであった。

「足利殿。そなた、得宗殿に何を言うた」

ぶしつけな質問だった。いくら高資が権勢家であるとは言え、足利の当主に対して随分な態度である。

これには高氏も機嫌を損ねた。

「何を、とは？」

「とぼけられるか」

「とぼけるも何も、何かの説明もなければ、お答えしようがございませぬ」

言われて、高資は言葉を詰まらせた。よく見ると顔が紅潮しており、肩肘が張っている。

「得宗殿がわしと父の暗殺を企てたことは、そなたも知っているであらう」

なんだそのことか、と高氏は内心鼻を鳴らしたい思いだった。

「おそれながら、長崎殿は、私が得宗殿に何かを吹き込んだと仰せられるのですか」

高氏は人を憎む心は薄いが、不意に感情的になるときがあった。このときも話し方にそれが出ている。

当然高資はしかめっ面になったが、拳を震わせるだけで物を言わない。

「まさか、内管領殿の御言葉とも思えませぬな。我ら足利一門、望

むのはただ土地の安堵だけでございます。つまりぬことに口を出して滅びるつもりはございませんぬ」

「控えよっ」

さすがに怒りが抑えられなくなったのか、高資は短く叫んだ。

高氏もはっと驚いた素振りをして頭を下げたが、内心はさして反省していない。

「面を上げられよ、足利殿」

しばらくして、感情が落ち着いたのだろう。高資は気弱な声を上げた。

……これは意外な。

顔を上げた高氏が見たのは、権勢家とは思えないほど弱々しい表情をした高資の姿である。

奢り高ぶる相手には怒りを見せる高氏だが、人の弱いところを見ると急に心がしぼんでしまうらしい。もう一度頭を下げた。今度は反省の念もある。

「すまないな、足利殿。少し、疲れているようだ」

「存じております」

「いや、そなたには分かるまい。わしは、主に憎まれておるのだ」さぞ無念そうに、高資は呟いた。

確かに、主に恨まれた者の心境というのは、高氏に理解出来るものではない。

「おそれながら、得宗殿は悔しいだけなのでは」

「悔しい、とは？」

「御自身の手で政務を取り仕切りたい。その思いが強いのだと思います」

つまり、高資が一步引いて、高時をきちんと立ててやれば良い。そうすれば、少なくとも高時と高資の間にある問題は解決するであろう。

「それは出来ぬ」

しかし、高資は頭を振った。そこだけは譲れない、と言いたげで

ある。

「得宗殿は腰が弱い。我ら親子の言うことに正面から逆らうことも出来ぬ。それで、どうして御家人たちと渡り合っていけようか」

御家人たちは北条一門を快く思っていない。それは成功者への妬みであるとも言えるし、主君の席に居座ったような格好でいる北条への憤りもある。

しかしそれ以上に深刻なのは、元寇以降の問題であった。

北条の力が強化されたばかりで、御家人には恩賞が少なかったことがそれである。これは、攻めてきたのが海の向こうの大軍である以上、どうしようもない。

武士の恩賞とは土地である。防衛戦では土地を獲得出来ないので、恩賞として与えられるものがなかった。

元との戦いは半ば運で勝ったようなものだから、誰もが向こう側まで攻めようとは思わなかったであろう。

唯一恩賞を与える方法があるとすれば、北条一門の所領を分け与えることだったが、それは難しい。なぜなら、いつまた海の向こうから敵が攻めてくるか分からず、そのとき武士たちを率いるために、北条は統率者として力を保持しておく必要があったからである。

ただ、その後の侵攻は今のところない。

人々の心の中には、いつかまた攻められるかもしれない、という意識と同時に、もう来ないのではないか、という意識があった。そんな中、海の向こうに対する備えは続いており、そのことは御家人たちへの負担となっていた。得をしているのは北条ばかりではないか、と思う者も少なくない。

ついにながら、鎌倉幕府の軍事行動は、各武士の自己負担という形式だった。総大将である鎌倉が面倒を見てくれるわけではないのである。

そうした事情もあって、鎌倉への風当たりはかなり強くなっていた。

特に近年は安藤氏の乱もあり、鎌倉から人心が離れつつある。

そのようなときに、高時のような弱腰の君主ではどうにもならない、というのが高資の考えであるらしい。

「北条は強くあらねばならぬのだ。そうでなければ、鎌倉そのものが崩れてしまう。そうなれば、武士はまた公家どもの郎党に戻らねばならぬ」

確かに、高資の理屈は分からなくもない。ただ、その理屈が通る時代は終わったのだ、という気もする。

「だから安藤の両氏から賄賂を受け取ったのですか」

とは言わない。それを口にすれば、高資がどのような反応を見せるか分からない。

……人がいないのだ。

少なくとも、鎌倉の支配者である北条一門に、この時代を乗り切れるだけの傑物がいない。

高資に反発した北条泰家などは、気骨はあるが、それだけだった。高時は指導者として弱すぎるし、長崎高資も周囲の心をくみ取るだけの器がない。義兄として高氏と親しい関係にある守時は、そもそも立場が弱すぎる。

しかし、それ以外でならばいる。

例えば高時の側近である佐々木道誉。あるいは、鎌倉設立期より続く結城一門の一人、宗広^{むねひろ}。

足利の中でも、次郎や師直は優れた人物であると言えよう。

鎌倉初期ならば、こうした人々が中心となり、一丸となって鎌倉維持に努めたのかもしれない。それが出来なくなったのは、鎌倉が北条一門によって牛耳られたからではないか。

同年八月。

ついに、「帝の御謀反」と呼ばれる事態が起きた。今度は計画だけのものではなく、実際の挙兵である。

日野俊基らの捕縛によって身の危険を感じた後醍醐天皇は、鎌倉方の隙をついて笠置山^{かすねやま}に脱出、そこで挙兵したという。

二度目の計画発覚ということもあり、正中の変の頃と比べても、後醍醐天皇の動向に余裕が見えない。

その戦力は鎌倉と比べるほどのものでもなく、数だけで見るなら後醍醐の悪あがきとしか言えなかった。

しかし、天皇という存在は日本において重要な意味を持つ。

高氏の時代より後、戦国時代や江戸時代であっても、支配者の正当性は天皇が授ける、という形式が残続けた。その正当性を持つ者が、鎌倉に対して挙兵した。それは、鎌倉という組織が逆賊という扱いを受けたということに他ならない。

実力では鎌倉が圧倒的だが、正当性は天皇が勝る。対応を誤れば、一気に鎌倉が瓦解する可能性もあった。

「そなたにも軍勢を出してもらいたい」

そう言ったのは高時である。他にも、この場には北条一門や御家人たちなど、鎌倉の要人が揃っていた。

皆表情は険しい。天皇と戦うということに重圧を感じているのだろう。

高氏は高時に頷いて見せたが、本当は気乗りがしなかった。それどころか、理由をつけて断りたい、とすら考えていた。

……わしは何を頷いておるのだ。

と、頷いてから後悔して眉間を押さえる始末である。

「浮かぬ顔をしておるな」

軍勢を送る取り決めが終わった後、退去しようとした高氏に声をかけてきたのは結城宗広だった。

以前、足利氏と「どちらが格上か」ということで揉めた、あの結城氏の一族である。

結城氏の本家は下総にあるが、宗広は分家筋の方であった。彼の所領は陸奥白河にある。

「帝に矢を向けるのは気が進みませぬ」

高氏は正直な気持ちを打ち明けた。後醍醐天皇その人を知っているわけではないが、天皇という高貴な存在に対する畏怖心はある。

鎌倉は以前にも天皇方と争ったことがあるが、高氏個人としては、当時の鎌倉方の人々の胆力に恐れ入る思いであった。

「さして気にする必要はなからう」

宗広は落ち着いている。

「帝の手勢は僅か。大軍で押し囲めばそれで終わりであろう。我らが弓矢を持つことには、おそくならぬ」

「だと良いのだが」

高氏の声は沈む一方だった。

「他にも何かあるのではないか、足利殿？」

「父上の容体が悪化しておるのだ」

貞氏は昨年から、家のことを高氏や次郎に任せて隠居生活を楽しんでいた。ところが今年に入ってから容体優れぬ日が続き、五月頃にはとうとう倒れた。

その後何度か持ち直したりしてはいるが、もう長くはなさそうだった。

そのせいか、このところ高氏は気分の浮き沈みが激しくなっている。

次郎は毅然としていて立派なものだったが、高氏はその点、あまりしっかりしていない。

「ゆえに此度の出兵、本当ならば断わりたかったのだ」

「それは」

宗広は周囲を見渡した。

誰かが聞いている様子はない。

「足利殿、それは口にせぬ方が良い。どう取られるか分からぬぞ」
注意を受けて、高氏は曖昧に頷いた。

ともかく、頷いた以上出兵はする必要がある。ここで前言を翻せば、足利殿謀反の心あり、と取られかねない。

鎌倉はいつになく神経質になっているのである。こういうときこそ、進退を誤らぬよう気をつけねばならない。

第八章「赤坂城」

ここで少し視点を高氏から外したい。

笠置山で帝が挙兵した際、高氏は一応軍を率いて出向いてはいるが、目立った行動はしていない。それに、ここで登場してくる人物は、南北朝時代において高氏や後醍醐天皇たちと並ぶ知名度を誇っており、それだけ話に絡んでくることになる。

なので、ここでその人物について触れておきたい。

その名は くすのきまさしげ 楠木正成 という。

楠木正成は河内の悪党である。

江戸時代、水戸史学が興ってからは天皇の忠臣として知られるようになり、まさに南北朝時代の大英雄といった扱いを受けた。

後世での人気もさることながら、生前からも正成は相当の評価を受けていたようである。古典太平記での存在感は非常に強く、正成と敵対した足利氏寄りの史料『梅松論』でも悪いようには書かれていない。出自意識がまだ色濃く残っていた時代で、正成は一際異彩を放つ実力者であるように思える。

現在は悪党としての見方も強まり、単純な忠臣像は崩れつつあるが、正成の人気は相変わらずのようである。

そんな正成が、ここでようやく歴史の表舞台に飛び出してくる。

時期としては、尊氏と近い。

南北朝の動乱が、ここから本格的に始まったとも言えそうである。

正成がどのような経緯で後醍醐天皇と接触したかは分からない。ただ、後醍醐が笠置山で挙兵したとき正成も応じて挙兵していることから、これ以前には連絡を取り合っていた可能性が高い。

楠木正成という名は、まだこのときはさほど知られていなかった。京に近い河内の国で悪党として活動をしており、それが朝廷の耳に

入り、そこから何らかの手段で接触したのだろう。

ただし、正成は後醍醐とは別の場所で挙兵した。挙兵の地は生国河内にある赤坂である。

なぜ別の場所で挙兵したのかは考えるまでもない。正成は悪党に過ぎなかったので、兵力という点では鎌倉にとっても及ばなかった。後醍醐も兵力の点では同様であり、そうした弱小勢力が一つにまとまったところで一度に潰されるだけである。

正成が狙ったのは、鎌倉の威信を落とすことだった。今の鎌倉は北条が武力で他を従えているようなものであり、内心不満を持つ武士たちは少なくない。属していても自分たちの利になることがないからである。そこに揺さぶりをかければ、自然と自壊するであろう。そのためには鎌倉を破るのが理想だったが、これは兵力の差が歴然であるため無視した。現実的ではない。

そこで正成は、築城技術を活かして堅固な城を作り上げた。籠城作戦で挑むことにしたのである。

以下、余談。

当時の『城』というのは江戸期のものと比べると規模も小さく、館とでも称した方が良さそうなものだった。軍事拠点としての性格はあったが、そこに籠って敵を迎え撃とうと考えたのは、日本史上では楠木正成が最初の人ではないか。

鎌倉武士たちにそうした思想はほとんどなく、あったとしても非常に薄かったように思える。彼らが得意とするのは城攻めなどではなく野戦での決着だった。

また、鎌倉武士の有力者だった足利氏が將軍となった室町時代も、城の在り方はさほど変わっていない。城が防衛拠点として本格的なものになっていくのは戦国時代になってからであり、そうしたものは戦国大名と呼ばれる者たちである。戦国大名は各地の土豪が力をつけてなった者が多く、ある意味では悪党の後継者とも言える人々である。

ともあれ、正成は赤坂城で挙兵した。

彼が作り上げた赤坂城は山城で、二ヶ所に作られたことから上赤坂城と下赤坂城と呼ばれる。

山城ということで攻める側にはやりにくかった。さらに地形の問題もあって、鎌倉は大軍であることの利点を失うはめになった。一度に攻城に参加出来る人数が限られてくるからである。

ただし、この赤坂城はそう長くは持たなかった。少数で大軍に挑むに適した城であっても、さすがに兵力の差をひっくり返すことは出来なかったのである。

また、正成にとっては良くない事態が起きていた。

笠置山が落とされ、後醍醐天皇が隠岐に配流されたのである。

これらの出来事を高氏はどのように受け止めていたのか。

歴史が本格的に動き出したこの時期、高氏はまだくすぶっていた感がある。

とは言え、彼の心境を考えれば無理もなかった。父貞氏が、出陣の十五日前に亡くなった。鎌倉に要請されていた出兵の準備を行っていた最中のことである。ろくにその死を悼む暇もなかったであろう。

父の死後間もないときに出陣を命じられたことで、高氏は鎌倉に強い不満を抱き、それが後の離反に繋がったとも言われている。それも原因の一つだが、それだけではないだろう、というのが定説だろう。

ただ一つ気になることがある。このとき高氏は、梅松論によると笠置山攻めの一方の大將としての出陣を命じられていた。太平記では二十万もの軍勢を率いて出たとあり、さすがにこれは信用出来ないが、足利氏の規模を考えれば相当の大軍を率いての出陣であったことは間違いない。準備にも相当の時間がかかったであろうから、出陣要請自体は貞氏の死の前に出ていたのではないか。

「出来るなら辞退したかった」

という思いはあった。出陣要請前もそうであったし、父の死後はよりその思いが強くなった。

高氏は心のどこかで、北条が自分の代理を見つけてくれるものと思っていた。先代の死は足利氏にとって小さなことではない。しっかりと供養する期間を与えるべきであろう。笠置山などには、別の誰かを向かわせれば良い。

そうした期待は、しかし叶うものではなかった。

こうなると高氏の気分は極端に沈む。物事を悪く考えてしまいがちになるのである。

そもそも、今回の戦は誰のためのものなのか。鎌倉政権を守るという名目は承久の乱と同じだが、その頃と今では『鎌倉』という組織自体が変わってしまっている。

承久の頃の鎌倉は、北条を中心としてはいたが、武士同士の連合政権だった。しかし今は北条の独裁状態であり、そんなものを足利氏が守ったところで得にはならない。他の者も同様で、要するに損をしたくないから鎌倉に従っているだけなのである。

しかも軍勢を率いることの負担は自分たちでどうにかしなければならぬ。それが当時の武士というものであった。それだけに、この戦そのものが高氏にとっては馬鹿らしい。

ただ、後醍醐が捕えられて隠岐に流されたことは残念に思った。こうなってしまうては、もう後醍醐天皇も動くことは出来ないであろう。

河内の楠木正成は予想以上に健闘していたが、それは高氏の感情を揺さぶるものではなかった。ただ、興味は持った。その正成も、赤坂の落城と共に行方不明になった。

「あつという間だったな」

高氏はぼんやりと次郎に言った。既に鎌倉へ戻る道である。

後醍醐天皇の笠置山での挙兵、楠木正成の赤坂城での挙兵、笠置

山の陥落、赤坂城の陥落。

終わってみれば当たり前の結末だった。軍事力で鎌倉に挑むこと自体、無謀だったと言える。

出陣前に結城宗広が言っていた通り、高氏は何もしなかった。する必要がなかったからである。それに、する気力もなかった。

「呆けている場合でもありますまい。まだ河内が不穏な気配に包まれています」

「楠木何か。その者は討ち死にしたと聞いたが」

「それは見せかけで、本当は生きているとの話も聞きました」

「帝は捕えられ、持明院統から新たな帝が出た。無駄な足掻きよ」

京では新たに光厳天皇が即位していた。鎌倉が後醍醐の代わりに立てた持明院統の人である。さすがに鎌倉も、敵対心むき出しの後醍醐を放置する気にはなれなかったのだろう。自らの意向に応えてくれるであろう天皇が必要だった。

なお、後醍醐はこのときから一貫して退位を拒否していた。そのため、既にこのとき天皇は二人いたことになる。ここから南北朝が始まったと見ることも出来るのだった。

「楠木がどれほど奮闘しようと、背後に帝がおらぬならただの反乱に過ぎぬであろうよ」

「そうでしょうか。いつもの兄上なら、別のことを仰られると思っていたのですが」

「と言うと？」

「帝、それに楠木。もう一つ、大きな力がありませんよう」

「だから、それは何だ」

妙に気持ちが苛立ち、高氏はつい声を荒げてしまった。しかし次郎は落ち着いている。

「少し気分を落ち着けてください、兄上。辛いのは私も同じです」

その一言で、高氏の中にあった毒素のような熱が出ていった。

父を失ったのは次郎も同じなのである。自他共に厳しい次郎だから常日頃と同じように振る舞っているが、内心は高氏と同じはずだ

った。

「すまぬ。わしは今、兄として恥ずべき振る舞いをした」

「そうした素直な心が兄上の美德であると私は思っています。ただ、兵の前では毅然としてくだされ」

「分かった」

頷いて、高氏は一つ見逃していたことを思い出した。

「お前が言っているのは、親王のことか」

後醍醐天皇には子が沢山いるが、高氏が指しているのは おおとうのみや 大塔宮のことだった。

もりよしんのう 護良親王　とも呼ばれるこの皇子は、今回の動乱が始まるまでは天台座主だった。天台座主は仏教の宗派の一つ、天台宗の重要な役職である。俗世とは無縁の世界にいたわけだが、この年、父である後醍醐天皇が笠置山で挙兵すると、還俗してこれに合流した。

大塔宮は後醍醐が鎌倉に捕らえられたとき同行しておらず、いずこかに潜伏しているという。どのような人物か高氏は知らないが、討幕の気概を持った皇族を放置しておくのは、鎌倉にとって望ましいことではない。

この時代は血統が重んじられていたから、皇族の敵対者というものは厄介だった。人心を得やすいのである。もっとも、それで実際に兵が集まってくれるわけではないのだが。

「まだ世は荒れましよう。此度は鎌倉が勝ちましたが、それがいつまで続くか、私には分かりませぬ」

「進退を誤るな、ということか」

確かに、これで終わりとは思えない。

すぐに来るような気がした。

それこそ、この国全てを呑みこみかねない大きな波が。

第九章「氣運」

楠木正成再び挙兵、との報が高氏の元にも届けられた。場所は赤坂城からも近い場所にある千早城である。次いで大塔宮が各地で反鎌倉の戦いを始めたとの報も入った。

鎌倉の内部は騒然としている。楠木正成の挙兵に恐れたのではない。戦乱がまだ続くという気配に心が揺れたのである。

現状に不満を持つ者たちの期待や不安、己の進退をどうするかという思惑があちこちで飛び交い始めた。もはや鎌倉は組織ではなく、烏合の衆になりつつある。

戦乱の長期化は、人心の動揺を招く。それは鎌倉の支配者たちも例外ではなかった。

「足利殿に謀反の疑いあり」

と、まことしやかに囁く者もいる。実際、高氏はそう取られてもおかしくない態度を取っていた。

後醍醐天皇に対して鎌倉が軍を出したときも、高氏は終始不機嫌だった、と周囲には映ったのである。天皇に弓矢を向けることへのためらい、父の死に対する動揺などは、全て北条氏への不服という風に考えられた。

高氏はこうした噂に対し、何も手を打っていない。生来楽観的だった彼のことだから、そんな噂は取るに足らないと思っていたのかもしれない。あるいは、下手に言い訳をしてもかえって怪しまれるだけだ、と考えたのだろうか。

そんな噂話よりも、高氏の心は、足利氏の進退のことで占められていた。

「鎌倉の大軍は楠木正成に苦戦しているそうだ」

その日、高氏は次郎を招いて、戦の話振った。次郎は戦そのものは下手であり、広い視野で政局を見る能力も高氏には劣っていた。しかし高氏が見落としがちな細かい点にも気がつくため、こうして

相談役になっている。師直だと高氏と考えていることが似ているため、意気投合はしても相談相手にはならない。

「無駄なことをしておりますな。聞けば軍の大部分は無為に過ごしているとか」

「山にこもる相手と戦うのはさぞ骨が折れるであろうな」

鎌倉武士は城攻めを不得手としていた。そもそも本格的な籠城戦というものの自体前例がないため、このときの鎌倉武士を無能とするのは酷であろう。

しかし、次郎の言うように、無為に過ごす兵は多かった。正成の千早城は堅城であり、落とせそうな気配もない。それに、攻めれば少ないながらも犠牲が出る。しかもこの戦いで勝っても恩賞は期待出来ない。そんな状況で、自己負担の戦を続けなければならない。これでは、武士の士気が下がるのも当然だった。

「我らは鎌倉から疑いをかけられておる。ゆえに、簡単には軍勢を持たせてくれまい。だからこそ、こうしてゆつくりと出来るわけだが」

「のんきに構えている場合ではありませぬ。我らもそろそろ、決めねばなりませぬぞ。鎌倉か、朝廷か」

「それを決めるのはわしではない」

高氏は庭先に視線を移した。そこからは、澄み渡る青空が見えた。「よいか、次郎。我らにとって大切なのは足利の家を守ること。我らが味方をするのは、勝者の方よ」

「つまり、朝廷が優勢であれば朝廷につく、と」

「そうだ」

高氏は、個人としてはどちらの味方でもない。鎌倉の現状には不満を抱いているが、それに従うしかないのであれば従う。これまでの当主たちもそうしてきた。

しかし、次郎は高氏の答えに不服らしい。しばらく険しい表情を浮かべていたが、やがて凄味のある声を上げた。

「兄上、おそれながら」

「なんだ」

「兄上は、北条に代わるつもりはありませんか」

次郎の指摘に、高氏は目を丸くした。そのようなことは考えたことがない。

「どういふことだ」

「足利が武家の棟梁となるのです。かつて源頼朝公がされたように、兄上が新たな武士の世を作り上げるのです」

次郎は彼なりの言い分を語り始めた。

そもそも武家政権は源頼朝が創設したものだ、それを北条氏が乗っ取ってしまった。本来なら頼朝に次ぐ源氏の名流として、足利氏を中心となってもおかしくなかった。この一事だけでも、理由としては十分である。

今回の戦乱は朝廷と鎌倉の対立だが、実際は後醍醐天皇一派と北条氏の私的闘争の色合いが濃い。それに付き合わされる武士たちは迷惑している。おまけにどちらが勝っても、武士たちが得られる利益はない。

そこで足利氏が反北条の武士勢力を集結させれば、鎌倉を倒すことも不可能ではない。その軍事力を背景に、朝廷と渡り合うことも可能である。

そうした次郎の言い分を聞き終えて、高氏が出した答えは否、だった。

「わしはそのようなことは望まぬ。頼朝公は確かに尊敬すべき御方だが、その一族は哀れな末路を迎えた。代わって鎌倉を握った北条も今はあのざまよ。わしは、足利をそのようにしたくはない」

「しかし、決して手の届かぬ場所にあるわけではございませぬぞ」

「いや、それも分からぬぞ。わしらもそうだが、武士というのは己の土地や家名を第一とする。ゆえに、見込みのある者にしか従わぬ。この状況でわしが号令をかけても、北条を恐れて誰も従わぬであろう」

繰り返し述べるが、足利氏は鎌倉政権では北条氏に次ぐと言われ

た有力御家人である。しかし、北条氏との力の差は大きかった。多少の武士は従ってくれるかもしれないが、北条に勝てるという見込みは薄い。

「次郎、あまり高いところばかりを見るな。それよりも多くのものを見よ。そう遠くないうちに、我らが動くときは来る」

「そのときは、足利が武家の棟梁になるのですか」

「それはまた別の話だ」

高氏はそう言って目を閉じた。

足利の当主というだけでも気が重い。高氏には、それ以上を望む気持ちはなかった。

まるで、鎌倉の支配という『氷』が溶けていくかのようなだった。

楠木正成や大塔宮の奮闘は、勝利こそ生まなかったものの、反鎌倉の気運を高めるのに役立った。

そのうち元弘三年（一三三三年）になった。後醍醐天皇が笠置山で挙兵してから二年経っている。鎌倉は、まだ楠木正成を落とせずにはいた。

戦略面では大塔宮の存在が大きかった。各地の反鎌倉勢力に働きかけ、積極的に挙兵を促している。戦乱が簡単に終わらなかったのは、正成と大塔宮によるところが大きい。

さらにこの年の二月、鎌倉にとっての大問題が発生した。反鎌倉の総大将とも言えるべき後醍醐天皇が、隠岐から脱出してしまったのである。

後醍醐の脱出には伯耆国（現在の鳥取県）の豪族、名和長年が関与していたという。この人もまた、鎌倉に反発する悪党だった。正成の奮闘を見て、後醍醐に味方することを決意したのであろう。

長年の助力を得て、後醍醐天皇は伯耆国の船上山で再び挙兵した。正成、大塔宮が守ってきた火に、後醍醐天皇は油を注いだようなものだった。軍事力こそ鎌倉優位のままだったが、世論は確実に傾き始めていたと言っている。

それに焦りを感じたのだろう。足利に謀反の疑いあり、としておきながら、北条は再度高氏に軍勢を与えたのである。

「そなたは軍勢を率いて上京せよ」

高氏に命じたのは高時である。その顔は真っ青になっていた。

軍勢力はある。しかし、それだけではどうにもならないものが、鎌倉という組織を呑みこもうとしている。高氏はそのように見た。

……次郎ではないが、そろそろ決めねば、足利も吞まれかねんな。そんなことを考えていたときだった。高時の側に控えていた長崎高資が、驚くべきことを言ったのである。

「足利殿。軍勢を与えるには条件がある」

「条件でございますか」

「左様。そなたの奥方とご子息を、鎌倉に残してもらいたい」

要するに、人質だった。高氏が鎌倉に謀反を企てるようなら、登子と千寿王の命はないであろう。

……なんとなさけないことか。

このとき、高氏は苦々しい思いで高時と高資を見た。武家の棟梁として、なんと器の狭いことか。

武士は軍力で屈服させ、満足させることで支配を承服させるものである。今の北条は前者こそあれど、後者は完全に失ってしまったようだった。

高氏なら、例え相手が疑わしくとも、こういうときは気前のいいことを言って相手を送り出す。そうして相手の心を掴むことこそが、棟梁として大事なのである。それをこのように、人質を出せ、などと言ってしまえば、余計相手の心が離れるだけだった。その場は凌げても、いつかは相手に裏切られるであろう。

……統治者としての北条は、終わったか。

実際、高氏の心は朝廷方へと大きく傾いた。それでも、決断するには至らない。ただ、妻子を守るための手は打っておこうと思った。自分がどう動くかにもよるが、鎌倉の動向は逐一耳に入れておきたい。

屋敷に戻った高氏は、早速そのことを師直に告げた。

「では、信頼のおける者をお付けいたしましょう」

「ああ。竹若丸にも付けてやってくれ」

「……幸寿丸様は、どうされますか？」

「あれは構わぬ。鎌倉とて把握しておるまい」

竹若丸は庶子とは言え、鎌倉にも知られていた。幸寿丸は、家中でも知る者は少ない。

一通り師直に指示を出した後、高氏は妻子の元に顔を出した。

「登子、わしは京に向かうことになった」

そして、高氏は事情を説明すると共に、自分の率直な思いを妻子に伝えた。

「北条は統治者としての能力を失った」

そう断言する夫を前に、登子は何も言わなかった。

彼女は北条の血筋を引く人間である。現執権の赤橋守時は彼女の実兄でもあった。

「登子よ、わしはまだどうするかは決めておらぬ。ただ、万一ということもある」

さすがに高氏も、鎌倉に反旗を翻す、とは言わなかった。しかし、彼の言わんとすることは登子に十分伝わったらしい。

「殿に嫁いだときより、覚悟はしておりました」

彼女は短くそう言った。それ以上、何かを言うつもりにはなれなかったのだろう。後は高氏が何を言っても、終始黙っていた。

第十章「決心」

高氏は予定通りに鎌倉を出た。予定通り、人質として登子と千寿王、竹若丸を預けての出陣だった。

さらに、目付役もいた。名越高家という北条派の武将であり、彼もまた高氏と同規模の軍勢を任されている。表向きはそうではないが、高氏への牽制役であることは間違いない。高氏が鎌倉を裏切るならば、まず彼と戦うことになるであろう。

「さすがに、都合良くはいきませぬな」

次郎は嘆息していた。既に苛立ちは見えない。もはや北条のことを、完全に敵と見たからだろう。敵として北条を見るならば、高氏に対する警戒は徹底していて見事とも言える。

「しかし、久々の京は楽しみでございますな」

現在、高氏たちは京付近に留まっていた。鎌倉を進発した時点では、河内の楠木正成、伯耆の後醍醐天皇のどちらを攻めに行くかが明瞭ではなかった。京で新たに命令を受け、その上でどちらに向かうかを決める予定だった。

師直は以前京に来たとき、関東にはない独自の文化に惹かれたようであった。関東にも鎌倉という一大政権は出来たものの、文化の中心は京にあったのである。東侍はまだまだ田舎者であり、彼らは京に憧れを持っていた。

「太郎は京が好きか」

「そうですね。面白いものが沢山あります。特に女子がよい」

「控えよ太郎。今はそのようなことを話しているときではない」

次郎が苦々しげに注意した。生真面目な次郎と奔放な師直は、よくこうしたやり取りをしていた。間に挟まれる高氏はいつも仲裁役である。

「まあ良いではないか、次郎。あまり張り詰めていても仕方あるまい」

「今は大事なときですぞ」

「分かっている。だからそう口に出すな」

何度も言われると、高氏としても緊張してしまう。何か事を起こすなら、出来るだけ重圧を感じない状態で動きたかった。

「ところで次郎、赤松円心はどうだ」

「動きませぬ。先の戦いの傷が、まだ十分に癒えていないのでしよう」

「今は虎視眈々とこちらを窺っておるといふことか。怖いもう、西の赤松、東の佐々木」

高氏はおどけて言ったが、その言葉はどうしても取れるもので、彼の心が大きく揺れていることを表していた。赤松軍は朝廷方だが、佐々木は鎌倉方である。両方を警戒する必要は、本来ならばまったくない。

もつとも、佐々木の動きも妙なものだった。一族の宗家でもある六角の当主時信は六波羅探題に出仕している。しかし、高時の側近となったことで力をつけた道誉はと言うと、この頃はひどく消極的になっていた。高時は道誉を鎌倉に呼び戻そうとしたが、彼はそのたびにあれこれと理由をつけては、近江から離れようとしなかった。「佐々木道誉はいかがなさると思いますか」

「分からぬ。あの男の考えはわしにも読めんわ。ただ、先の頃帝が隠岐に流されたとき、警護役を務めた者の中には、あの男の名があった」

だからどうとは言わないが、後醍醐も道誉も癖の強い人間である。両者が一時期近くにいたというだけで、様々な憶測が浮かんでくる。ちょうどその頃から道誉が鎌倉と距離を置き始めたとなれば、なおさらである。

道誉はすぐ近くにいます。彼のいる近江は京のすぐ隣なのである。

琵琶湖などもあり、政略、戦略上の要所と言えた。

近江は佐々木一族の領地だったが、本家当主は六波羅に出て留守にしているため、道誉が事実上の領主となっている。彼の存在は大

きく、無視出来るものではなかった。

高氏は腹の底で北条を見限っていた。しかし人質に取られた妻子のこと、すぐ近くにいる道誉の動向などを考えると、行動に踏み切れない。

総大将として態度を明らかにしない高氏を、次郎だけでなく、師直、それに他の一族の者たちも齒がゆく思っていたであろう。しかし、他の誰よりも齒がゆかったのは、高氏自身だった。

京に入る前夜、高氏の元に客人が訪れた。

二人の坊主である。そのうちの一人は道誉だった。

不意に訪れてきたわけではない。事を起こす前に道誉と話をつけておきたいと考えて、高氏が呼び寄せたのである。もう一人の坊主も同様だった。

高氏は自室に二人を招き入れていた。次郎や師直はいない。彼らに対しては、一人の男として対峙したいと高氏が考えたからである。「よくぞ参られた、道誉殿。それに赤松殿も」

高氏がその名を口にしても、道誉はさして驚かなかった。かすかに笑って”赤松殿”を見ただけである。

「まさか足利の御大将に呼ばれるとは思いませんでした」

「わしも、本当に来てくれるとは思わなかった。赤松殿は剛胆じゃ。見習いたいものよ」

改めて言うまでもなく、高氏は赤松円心の剛胆さは知っていた。京付近の者たちなら皆知っていることである。

円心は播磨の悪党として活動していたが、その裏ではすでに朝廷との関係を作っていたようである。円心の子の一人、則祐は大塔宮の側近となっていた。後醍醐天皇の皇子である大塔宮は、父が捕らわれている間も鎌倉討伐を諦めず、各地に令旨を発しながら戦っていた。円心は息子の則祐によって届けられた大塔宮の令旨を受けて決起したとされている。

それまでは慎重だった円心だったが、一度挙兵すると凄まじい勢

いで京に迫った。鎌倉の軍勢を破ったこともあり、ついこの間は六波羅にまで攻め込んだのである。楠木正成が守りの要なら、赤松円心は攻めの要だった。

また、後醍醐天皇や名和長年が拳兵した伯耆の国は、円心の本拠地である播磨から近い。また、楠木正成や大塔宮が奮戦を続ける河内とも近かった。円心は両者の間にいたこともあり、連絡役をも担っていたようである。

鎌倉からすれば危険人物に他ならない。そして、高氏は今のところ、まだ鎌倉の人間である。よくどこまで来た、という思いが高氏の胸に湧き上がった。本当に来るとは、あまり思っていなかったのである。

「某は剛胆ではありませぬ。ただ惜しむほど価値のある命を持たぬだけでございます」

悪党と呼ばれる者たちは無頼漢のように見られることが多いが、円心は物静かな坊主のようだった。隣であぐらをかいている道誉の方がよほど悪党らしい。

「日野様と会われたそうで」

円心は静かに高氏の目を見て言った。日野と名乗る人物に会ったことはないが、それらしき山伏に会ったことはある。高氏は黙って頷いた。

「あの御方は某のところにも参られた。剛胆というのは、あのような方のことを言うのでしょうか」

「確かに、日野殿は不思議な御仁であった。己が地位への執着よりも、理想に殉じることを良しとした」

「武士からすると阿呆にしか見えませぬな」

道誉が茶化すように言った。円心はそれに反発する様子を見せず、むしろ同意の素振りを見せた。

「左様、確かに阿呆。しかしその阿呆も、命を賭して世に揺さぶりをかけてみせた。某も揺さぶられた一人にございます」

その日野——俊基の方である——は、先年鎌倉で処刑されていた。

後醍醐天皇の二度目の挙兵に、鎌倉は強硬姿勢で挑むとしたのである。既に捕えられていた俊基、資朝たちを生かしておく理由はなくなった。

高氏は結局、日野俊基としての彼に会うことはなかった。しかし、その生き様は胸のうちに残っている。

「今、わしも揺れておる。俊基殿か、帝か、楠木か、それとも赤松殿か。わしを揺さぶるものは得体が知れぬ」

「時代の流れでございましょう。某はそれに流され続けているだけです」

円心はあくまでも謙虚な姿勢を崩さない。道誉のように、時折鋭い視線を投げかけてくることもなかった。このような人物が、一度は六波羅へ肉薄した。確かに時代の流れであろう。

もつとも、その流れを作り出しているのは人間だった。多くの人々が己の理想、生存、権威を賭して動いている。それがより大きな流れを生み出しているのだ。

「わしはその流れに吞まれたくはない。かと言って、ただ流れに乗るには背負うものが重すぎる。難しいところじゃ」

「回りくどいのう、足利殿。この面子を揃えた時点で、もはや胸中は明かしたようなものではないか」

道誉が不敵な笑みを浮かべる。それを見た瞬間、高氏にもこの男の腹の内が分かった。

高氏も、ここでようやく本心を明かすことを決めた。

「道誉殿、わしは心細くてな。北条は統治者としての能力を失っている。これ以上あの者どもの支配を耐える自信はない。かと言って、足利だけで起ち上がっても敗北は必須。頼れる味方が欲しい」

「頼れる味方と言うと」

「そなただ」

高氏は笑って言った。そのように返されるとは思っていなかったのか、道誉も少し目を丸くしている。

「別に足利の傘下に入れと言うわけではない。いつ見限ろうとも構

わん。ただ、今だけでいい。わしに味方すると言って欲しいのだ」
頭は下げない。ただ、高氏はまっすぐに道誉を見続けた。

道誉はしばらく考える素振りを見せて、

「人間の口というものは、腹とは別に出来ているものでござる」と言った。まだ高氏の言葉を前端的に信用したわけではない、ということか。

しかし道誉は、暗くなりかけた高氏を見て、快活に笑い飛ばした。「行動で示しなされ。さすればこの佐々木判官も、行動で応えましょう。もし足利殿が動かぬのであれば、今宵のことはなかったことにしましょうぞ」

道誉は慎重な男だった。味方をするとは明言しない。それでも、彼の言葉からは、高氏への厚意がはっきりと感じ取れた。

「赤松殿。船上山におわす帝から令旨を受けたい」

鎌倉から離れるにしても、単独で決起するのは愚策だった。また、高氏も独立政権を打ち立てようという野望は、このときはまだ持っていなかった。帝の軍勢に加わるという形を取るのがもっとも効果的であろう。そのためには令旨が欲しい。

ところが円心が高氏の問いに答えず、懷から無造作に書簡を取り出した。それを受け取って高氏は驚愕した。

「これは、帝の……」

後醍醐から高氏に向けられた書状だった。中身は、以前あの山伏が見せたものと酷似している。

帝からの令旨だった。

「なぜこれを、赤松殿が」

「帝もそれだけ必死ということです。大塔宮様も、楠木殿も。あらゆる事態を想定し、出来る限りのことをされております」

後醍醐天皇の執念と行動力は凄まじいものがある。かつてこの国で、ここまで”必死”になった帝がいたであろうか。

「……赤松殿、帝にお伝えください。この足利高氏、必ず起ち上がると」

「承知しました」

円心は頷いた。高氏が味方になったことへの喜びはさほど見えない。まるで、こうなることが分かっていたかのようだった。

「しかし、今のままでは足利殿も起ちにくいでしょうな」

「名越か」

高氏が決起すれば、名越高家がまず立ちはだかる。率いている兵数は同規模。負ける気はしなかったが、無傷では済まないだろう。損害が大きければ、その後の行動に支障が出る。

そんな高氏の胸中を察したのか、円心は静かに言った。

「では、この赤松円心が足利殿の道を切り開きましょう」

第十一章「丹波篠村」

高氏は京に入る前、近江にある鏡の宿という場所で帝の令旨を披露した。赤松円心から手に入れたという件は伏せた。あの三者会談は今のところ密約にしておいた方が都合がいいからである。

令旨は細川和氏、上杉重能の両名が手に入れてきたということにした。細川は足利の支流であり、上杉は高氏や次郎の母清子の一族であることから、共に足利の重鎮だった。高氏の決意を最初に聞いたのは、次郎と彼らであろう。彼らに対しては、円心や道誉のことも告げておいた。

「いよいよでございますか」

待ちわびた様子で次郎が言った。意志を明らかにしない高氏にいつも振り回されていただけに、この決意を聞いた瞬間、次郎は普段の仏頂面を崩して笑みを浮かべた。

和氏や重能も同様だった。足利に属する者たちは、北条の支配を打ち破る日を待ち望んでいたのである。

高氏はまず彼ら三人に告げた後、他の一族の代表者たち、それに重臣たちを集めて決意を表明した。

「帝の令旨は我が手にあり。悪政を敷く北条を、既に天は見放した。我らが御旗を掲げるときは近いぞ」

高氏の宣言に一同は湧き上がった。

……武士どもの勇猛なことよ。

何かに耐えながら生きるより、生死を賭して敵に挑む方が性に合っているのだろう。高氏も武士であることに変わりはないが、彼らと同じような思いは抱かなかった。背負っているものが違うからだ、と自分では思っている。

しかし、このときはいつ動くかを明言しなかった。決起というのは、慎重に準備を進め、時機を選んで動かねば成功しない。後先考えずに決起しても成功しないし、慎重になり過ぎて機を逃しては話

にならない。

時機は近い。しかし、その瞬間はまだ先だった。

北条氏の支配は揺らいでいる。それでも、高氏の決起にはまだ問題点が一つ残っていた。

名越高家の存在である。

高氏と同規模の兵力を率いる高家は、北条が用意した高氏の目付役だった。これと戦えば相応の被害が出る。決起したとしても、出鼻をくじかれる形になってしまうのだ。

……さて、どうなるか。

赤松円心は、高氏の道を切り開くと言った。その言葉をどこまで信用すればいいのか、正直判断しかねるところもある。

しかし、高氏自身も後戻り出来ないところまで来ている。自棄になって動き出すよりは、円心を信じてみる方が良さそうだった。

京に入ってから、高氏は名越高家と共に船上山に向かうよう指示を受けた。となれば、京から西に向かうことになる。となれば、鎌倉軍としては、播磨の赤松軍を最初に叩く必要がある。

高氏と名越高家は共にこれに当たるべきだった。しかし高氏は密約があるため、動くことをためらった。また、名越高家はそんな高氏を相手にせず、自らの軍勢のみで赤松軍に挑んだ。

名越高家は、さほど高氏の目付役という意識がなかった。敵と戦い首級を上げることが第一とする、典型的な武人だったのだろう。高氏の行動を不審と思わず、まっすぐに敵に向かっていった。

名越軍にも勝算は十分あった。正規の鎌倉武士と悪党とでは、動員出来る兵力に差がある。赤松軍に逃げられることはあっても、それに負けることはない、と高家が見たとしても無理はない。これまでの悪党との戦いでも、鎌倉軍が完全に敗北したことはないのである。高家の目的は船上山に向かうことだから、赤松軍を無理に倒す必要もなかった。

しかし、ここで思わぬ事態が生じた。赤松軍との戦いの中で、高

家が討ち取られたのである。

その報告を聞いたとき、高氏は思わず笑みを浮かべてしまった。

……赤松坊主め、やりおるわ。

こんな形である言葉を実現するとは、さすがに予想外だった。暗殺でもするつもりかと思っていたのである。

報告を受けたとき、高氏たちは酒盛りをしていた。気を良くした高氏は、その場で舞を披露した。

名越高家が戦死した今、この地域には足利軍と赤松軍たちぐらいしかいなかった。京にはすぐにでも向かうことが出来る。

……今が、機だ。

耐えに耐えて、ようやく得た機会である。いくら慎重な高氏でも、これを逃すつもりはなかった。

鎌倉という武家政権に反旗を翻す、ということへの後ろめたさはない。今の鎌倉は北条氏の私的組織の感が強い。そんな形だけの武家政権にしがみつくつもりはなかった。他の多くの武士たちも同じ気持ちであると、高氏は確信している。

「景氣づけじゃ、今宵は飲めよ」

周囲に向かってそう言いながら、高氏は何度も杯を重ねた。

元弘三年、四月二十九日。

足利軍は丹波篠村に到着した。この辺りは足利の領地も多い。篠村もその一つで、八幡宮がある。八幡宮は源氏の氏神である八幡大菩薩が祀られた神社である。決起の前に、氏神を詣っておきたかった。

八幡大菩薩を拝むとき、高氏の脳裏にはある男の存在が浮かび上がっていた。

鎌倉幕府の初代将軍、源頼朝である。

彼は朝廷の支配に不満を抱いていた武士たちをまとめ、鎌倉という組織を作り上げた。それはまさしく武士のための組織だった。頼朝や多くの武士たちがいなければ、高氏も公家に使われるだけの存

在だったかもしれない。高氏にとって鎌倉とは、その響きだけでも安心して全てを委ねられそうなものだった。

それを打ち倒す。

今の鎌倉は高氏や多くの武士が求めた鎌倉ではない。ゆえに、これを倒すことにためらいはなかった。

……頼朝公が今のわしを見たら、何と言うであろうか。

考えてみたが、よく分からなかった。反対されそうな気もするし、喜んで賛同してくれそうな気もする。高氏にとって、頼朝は、そして彼の作り上げた鎌倉は、遠い過去のものだった。

武者震いがした。生まれてきてからずっと、何かに頭を押さえつけられているような気がした。それがなくなった。そのことで、今まで感じたことのなかった感情が溢れ出そうになっている。

八幡宮の前で、高氏は宣言した。

「今や我らを遮る者はない。この機を逃さず、我らは六波羅を攻める！」

あらかじめ高氏に話を聞かされていた者たちは気合を入れ、知らされていなかった者たちは歓声を上げた。

源氏の白旗が立てられた。このとき、高氏は完全に鎌倉から離れた。

反乱というのは怒濤の勢いでやらなければ失敗する。基本的に起す側が弱者だからだ。不意を突いて相手の体勢を崩さない限り、勝ち目はない。

かと言って、焦って単独で動いたのでは足元が危うい。今も昔も、勢力というものは多くの支持者がいればいるほど強力になる。

そこで高氏は、六波羅を目指しつつも、近隣で機を窺っているであろう者たちに決起を促した。足利だけでは鎌倉を倒せないと分かっていたのである。

呼びかけには「朝廷の軍勢に参集せよ」という形を使った。高氏は単独で動くつもりはなかった。彼がこのときやったのは、独立で

はなく、朝廷への寝返りなのである。

赤松軍と合流した足利軍の元には、各地から大小の武士たちが馳せ参じてきた。後醍醐天皇たちの呼びかけだけでは不安だった者たちも、足利軍の呼びかけなら、と動き始めたのである。

「波じゃ」

大きな波がやって来た。それを作っているのは他でもない、高氏自身だった。

「この波に乗れば、六波羅とて恐れるに足らぬわ」

六波羅探題は『中央の鎌倉』とも言える存在だった。北条一族の者が務めており、抱えている兵力も少なくない。足利軍だけだったのなら、勝機はさほどなかったであろう。

しかし今の高氏は勢いに乗っていた。合流してきた全兵力を合わせれば、六波羅探題を落とすことも不可能ではない。

軍議が開かれた。高氏が軍勢の指揮官である。その元に集った者の半ば以上は、先日まで敵対していた者たちだった。

その中に、涼しげな顔をした坊主がいた。円心である。

「赤松、見事であった」

「いえ、討ち取ったのは某ではなく佐用範家という我が手の者にございます」

「そうか。ではあとでその者を呼んでくれ。礼を言いたい」

「はっ」

高氏も円心も、先日とは態度が違う。朝廷方にとって高氏は新参者だが、その勢力は非常に大きい。参集した軍勢の指揮官として適任なのは、高氏しかいなかった。円心はその指揮下に入ったのだ。互いに立場が違う。立場が違えば態度も変わる。

軍勢はまだまだ集結する気配があった。しかし高氏は、それを待たずに進発する。ぐずぐずしては、六波羅の方も態勢を整えてしまうからだ。それではこちらの勢いが殺されてしまう。

京近くの河内には、士気が衰えているとは言え大軍がいる。今は楠木正成がこれを引きつけているが、もし正成が敗れば、その大

軍が六波羅に合流するかもしれない。そうなれば高氏に勝ち目はなかった。

足利軍と六波羅軍の激突は短期間で終わった。

六波羅が滅びたのが五月七日だというから、高氏が丹波篠村で宣言してから一週間と少ししか経っていない。

最初は兵力差もあって、六波羅が優勢だった。しかし、高氏たちは士気が違った。勢いに乗っているし、後がないから必死でもある。六波羅は北と南に分かれていたが、北方の探題北条仲時、南方の探題北条時益は共に懸命に戦った。それでも足利軍の猛攻には耐えきれず、一旦鎌倉に退くことにした。このとき、鎌倉に擁立されていた光厳天皇や上皇たちも行動を共にしていたという。

しかし、彼らは鎌倉まで逃げることは出来なかった。多くの者は討ち死にし、ようやく近江まで来れたのが極少数。その少数も、近江の野伏に行く手を阻まれてしまった。この野伏たちは道誉の手前者だった。高氏との密約を果たすため、道誉が動いたのである。

「これまでか」

北条仲時は事態に絶望し、自刃することを選んだ。このとき仲時に従って自刃した人の数、四三〇名にもなるというのだから凄まじい。

仲時と行動を共にしていた天皇や上皇は後醍醐方の武士に捕らえられ、京に送り返された。

「怖いものよ」

こうした一連の出来事を見て、高氏は心底そう思った。今の今まで強大であり続けた鎌倉の崩壊が、目に見える形で始まったのである。

第十二章「義貞拳兵」

京において、六波羅探題は大きく分けて二つの役割を持っていた。一つは、近畿地方を中心とする鎌倉政権の統治代行である。当時九州の博多にあった鎮西探題を西の鎌倉とするなら、六波羅は中央の鎌倉と言うべき機関だった。

もう一つは、朝廷の監視である。鎌倉前期に起きた承久の乱以降、鎌倉は朝廷との軍事衝突を仮定し、常にこれを監視し続けてきた。実際、後醍醐天皇の討幕計画は二度も六波羅探題によって防がれている。これを潰したということは、朝廷が鎌倉から”自由”になったということでもある。

「しかし、騒然としておるなあ」

高氏は、京に群がる人々を見て、そうぼやいた。呑気そうに見えるが、内心はそれどころではない。

「兄上、こちらにおりましたか」

「次郎か」

背後から聞こえた次郎の声に、高氏は振り返らないまま応えた。

ここは京の外れにある屋敷だった。そこから、ずっと東の方を眺め続けていたのである。

「鎌倉のことが気になりますか」

「そうだな。一刻も早く向かいたいものだ」

「それなら、早々に戦後処理を行わねばなりませんまい」

高氏は現在、六波羅との戦いに集まった武士たちの沙汰を行っていた。六波羅を滅ぼして二日経った、五月九日のことである。

沙汰とは、働きに応じてどのような処遇を与えるか、ということである。これを上手くこなせなければ不公平だと武士の支持を失うことになるから、指導者という立場の高氏からすれば、戦そのものよりも扱いが難しい。さっさと終わらせて鎌倉に行く、ということには許されない。

「しかし困ったものだ。論功行賞など後回しにして、早々に鎌倉へ攻めようという者はおらぬのかのう」

六波羅探題を討つまでは勢いに乗っていたのに、この一事でそれが削がれてしまった。敵よりも味方の方が高氏を止めることになったのは、ある種皮肉である。

高氏としては、二重の意味で東に向かいたかった。勢いに乗じねば鎌倉を討つことは難しいだろうし、なにより人質に取られている妻子の安否も気にかかる。

「まあ、仕方ありますまい。我ら足利や朝廷は打倒鎌倉こそが第一ですが、他の者どもはそうではありませぬから」

「朝廷とて勢いを失っておるではないか」

後醍醐は近々こちらに戻ってくることだろうが、まだ到着はしていない。楠木正成や大塔宮は、これを出迎える準備をしている。在京の公家たちは、既に鎌倉に勝ったつもりでいるようだった。伝え聞くだけでも微笑を洩らさずにはいられないような有様だという。

「強気になるだけの要因はありますからな」

「それも分かるが」

楠木正成や大塔宮と戦っていた鎌倉の武士たちは、高氏と同様に寝返るか、領地へ戻るかした。鎌倉側の被害はそれほど出ていないが、統一感は大分失われているようだった。鎌倉の命に応じるような武士がどれほどいることか。公家たちが浮かれるのも、無理もない。

「しかし、まだ京付近を制したに過ぎん。東国武士がどう動くか……」

「兄上は心配症ですな」

「背負うものがある。わし一人ならどうとでもなるが、他人のことを背負うとなれば話は別だ。責任ある立場とは辛いものよ」

そう冗談めかしく言って、高氏は仕事に戻ることにした。次郎もその後に続く。

しかし、このとき彼らはまだ知らなかった。東国の方で、大きな

動きが起こりつつあることを。

それは高氏が起こした波とは別の、しかし決して無関係とは言えない、大きな波であった。

高氏が育った足利荘の近くに、新田荘と呼ばれる地があった。足利荘に流れ着いた高氏らの祖先、源義国が開拓した土地である。

義国はまず先に足利荘の開拓に取り掛かり、これが一段落すると、足利氏の祖先となる次男義康に与えた。その後義国は新田荘の開拓に乗り出し、こちらは長男の義重に継がせた。この義重も、義康同様、地名から新田義重と呼ばれる。新田氏の始まりであった。

しかし、長男の血筋でありながら、新田氏は鎌倉からさほどの扱いを受けていない。鎌倉の初代将軍である頼朝が挙兵した際、足利氏は早くからこれに従っていたのに対し、新田氏は従うことを躊躇ったからである。新田氏は鎌倉から不興を買ってしまい、それが高氏たちの時代まで尾を引いているのだった。

これに輪をかけて悲惨なのは、全ての新田氏が鎌倉から冷遇されていたわけではないということである。なぜ悲惨なのかと言えば、冷遇されていたのは新田宗家であり、分家である山名氏や里見氏は早くから頼朝の元に馳せ参じていたため、それなりの扱いを受けていたのだった。これでは宗家の面目丸つぶれである。

遡れば足利氏と同じ血筋であり、長男であるだけ優遇されてもおかしくない新田宗家だったが、こちらは無位無官だったという。足利氏の高氏と言えば、若くして従五位に昇り詰めていた。

そんな苦境に立たされていた新田宗家、このときは新田義貞という男が当主であった。

「鎌倉の支配にはもう耐えられぬわ」

義貞のこうした思いは、高氏の比ではなかった。高氏のような重責は義貞にはなかったが、その日食うのにも困る切実さは、義貞の方にしかない。高氏は現状維持さえすれば良かったが、義貞は日々生き残るための苦心をせねばならなかった。

先の年、義貞は楠木正成の籠る城を攻める鎌倉軍に加わっている。しかし、鎌倉の命令を無視して途中で帰国してしまった。このときの義貞の真意についてはいくつかの説があるが、まず軍費の不足が考えられる。短期間の戦ならともかく、楠木正成は長期に渡る籠城戦を挑んできたのだ。城攻めは、攻める側の人数に限りが出てくる。そのため鎌倉軍は暇を持て余す者たちも相当いたという。

「このように無為な戦には付き合えぬ」

と義貞が思ったとしても、当然である。裕福な武士は退屈しのぎに宴会でもしていたのだろうが、義貞にはそのような余裕はない。長く戦場にいれば軍費は消耗するし、地元の農作も滞ってしまう。それに、この戦いでは恩賞などほとんど期待も出来ない。義貞が戦場を放棄する理由はいくらでもあった。他にも義貞のような武将はいたかもしれない。

この頃、つまり楠木正成討伐に向いていた頃、義貞は大塔宮と何らかの形で接触した。直接会うことも、不可能ではなかっただろう。義貞は鎌倉から、さほど重要視されていないなかった。

接触は、大塔宮からの書簡で始まった。鎌倉打倒のために、共に闘って欲しい、という内容である。大塔宮や後醍醐はこの類の運動は活発に行っており、遠い九州にまで影響を及ぼしていたから、義貞がこれを受け取ることは珍しいことではない。

ただ、義貞の中には源氏の主流としての血が流れていた。今は足利氏に主導権を奪われているが、本来は新田氏の方が多少格は上のはずである、と思っていた。

そこで、義貞は大塔宮への返書をしたためた。源氏の武士として、是非一度お目にかかりたい、と。

大塔宮はこれに快く応じた。元から絶望的な戦いをしているからか、この皇子は非常に積極的な行動家だった。

二人の会談は河内のどこかで行われたと思われる。

そこで義貞はこう言った。

「某は鎌倉討伐のために挙兵致したく思います。しかし、悔しいこ

とに、我が新田に従う者はほとんどおりませぬ」

「それで、そなたは私に如何にせよと申す」

「是非とも、鎌倉攻めの総指揮権を某にお与えくださりませ」

義貞は賭けに出たのである。鎌倉を倒して新田氏を盛り立てようとする野心もあった。しかし、それだけではない。もはや鎌倉の支配下では生きることすら難しい、という状況になりつつあったのである。

闇雲に決起したところで勝ち目はない、と考えている点では義貞も高氏と一緒だった。ただ、高氏が足利氏の保全を考えていたのに対し、義貞は新田氏の、まさに生死を賭けていたのである。

「分かった」

少し考えて、大塔宮は義貞の求めに応じた。ただし、大塔宮にも東国武士の支配権はない。だから、今後東国武士に送る書簡に、新田氏と共に闘うべし、と付け加えた程度である。

それでも効果はある、と両者は考えていた。この時代は実力も勿論必要だが、血筋もまた重要視されていたのである。新田氏はこの点、足利氏と同等もしくはそれ以上の家系だった。それに、大塔宮は朝廷軍の将軍とも言える人物である。鎌倉から朝廷に寝返ろうとする武士がいたら、大塔宮の言葉は無視出来ないであろう。

こうした一連のやり取りを終えて、義貞は新田荘に戻っていた。

「兄者、いよいよだな」

河内でのことを思い返していた義貞は、弟の義助の声で我に返った。

「うむ。ここで我ら新田氏の命運が決まる。敗れば皆で死のうぞ」

言葉は悲痛なものだったが、義貞の声に恐れは混じっていない。

武人として恥ずかしくない戦をしたいという思いだけがある。

「では行くか、義助。足利に遅れを取ることは出来ぬぞ」

このとき、五月八日。高氏が丹波篠村で反旗を翻したとの報告は、既に東国にも届いていた。これより前、高氏の妻登子とその子千寿王は鎌倉を脱出したと聞く。

しかし六波羅の壊滅は六日のことだから、まだ東国にその報は届いていなかった。義貞の決起は心細いものだったのである。

従ったのは一五〇騎だったという。対する鎌倉には、まだ数万の兵が残っていた。

第十三章「幕末」

日本史において幕府と呼べるものは三つ存在した。そのいずれもが滅びているから、いわゆる幕末というものも三度あったということになる。

幕末というと一般的には、江戸幕府の末期を指す。様々な人物の思惑が動き、尊王攘夷や開国問題などが重なるなどして、それ自体が一つの時代と呼べるような様相だった。それに比べると、室町幕府はほとんど自然消滅に近い。見方によっては応仁の乱から足利義昭追放までの戦国時代が、室町幕府の幕末と言えるかもしれない。

こうした後代の幕末に比べると、鎌倉幕府の幕末は短期間で終わりを迎えた。それも、急転直下の終結を迎えるはめになったのである。

新田義貞が鎌倉討伐の志を持って挙兵したのは五月八日、従う兵は二百にも満たない。義貞の胸中に勝算があったかどうかは分からないが、挙兵したのは蛮勇によるものではなく、新たな世を作り上げるという一念によるものであった。そうしなければ、下級武士たちは生きていけなかったのである。

大塔宮の書状が出回っていたのか、義貞の元に集まってくる武士たちは多かった。ただ、最初から続々と集まって来たわけではない。まず義貞は、挙兵した上野国の守護代長崎四郎左衛門尉なる者を打ち破ったという。この男は北条得宗家の家臣だったらしいから、内管領の長崎父子とは同族関係にあったのかもしれない。それを打ち破ったということで、義貞は打倒鎌倉の意思を行動で示したことになる。

単純な理屈だが、戦闘要員が将として認める人間の条件の一つは、第一に勝つということである。負ける将の下につきたいと思う者はそういない。

初戦で華々しい戦果をあげたことで、義貞は自らの能力をも周囲に示した。無論これだけで多くの武士の心を掴んだわけではないが、軍勢は大きくなっていったのである。

「しかし、今一つ足りぬ」

鎌倉の力は強大そのものだった。まだ数万の軍勢を支配下に置いているのである。義貞の軍勢も大分増えはしたが、まだ数千程度だった。鎌倉を恐れて、まだ日和見を決め込んでいる者も多い。そういう人々こそが有力者であることが多い。義貞としては、是が非でも彼らを味方につけておきたかった。

義貞はまっすぐに鎌倉に向かったが、猪突猛進したわけではない。上野、武蔵国などで軍勢集結を待っている。それでも、勢いを殺さぬよう少しずつ進軍はしていた。鎌倉の軍勢とも軽くぶつかりあうこともあったが、そういう場合は大抵勝った。

そんなとき、西方の事態が義貞たちの元に知らされた。

高氏が丹波で反鎌倉に起ち上がったことは聞いていた。此度もたらされたのは、その高氏が六波羅を陥落させたというものである。

「足利殿もやりおるわい」

「感心してる場合か兄者。我らも急がねば。このままでは、足利が鎌倉に来て北条を討ってしまうかもしれん」

「案ずるなよ、義助。足利殿は、おそらく六波羅での合戦の後始末でしばらくは動けまい」

今戦っているのは高氏ではなく鎌倉である。高氏を気にしても意味はない。

「いや、待て。足利か」

義貞は先日のことを思い出していた。

偶然としか言いようのないことだが、義貞の軍勢は高氏の子である千寿王と合流していたのである。千寿王自身はほんの子供に過ぎないが、その周囲は高氏の信頼厚い家臣たちで固められている。

義貞はその足で千寿王たちの元に向かい、その代理人とも言うべき家臣に提案を持ちかけた。

「これでは鎌倉打倒を実現出来ぬ。もっと兵がいる。しかし、京からの援軍を待っているのは、鎌倉も万全の状態で臨んでこよう。ゆえに、此度は足利殿の力も存分に借りたいと思うのだが、いかがか」この時代、身分や家柄というものが持つ力は、戦国時代など比べるに非常に重いものがあつた。例えば子供であろうと、足利の御曹司である千寿王が持つ影響力は、馬鹿に出来ないものがある。

無位無官の義貞の呼びかけに応じない者でも、足利の御曹司が呼びかけたとあれば駆け付けるかもしれない。足利氏も、本拠地は関東下野国にある。足利氏になら従っても良いという者も、関東には沢山いるであろう。

義貞の提案は受け入れられた。許可を得た義貞は、千寿王の名で各地に檄を飛ばす。決定的とまではいかないが、このことで新田軍は相当膨れ上がった。

「これ以上は待てぬな」

鎌倉と比べるとやや兵力では劣る。それでも、義貞は決戦に持ち込むことにした。

新田軍は常勝無敗、破竹の勢いで勝ち続けた、というわけではない。勢いづく新田軍に鎌倉も全力を出すことにしたのである。

義貞が敗北したときの鎌倉軍の大將は北条泰家。得宗家当主北条高時の実弟であり、権威を増す長崎父子に対抗したことで以前も触れた男である。

ここ一番で大將に任じられ、かつ勢いに乗る新田軍を破ったことから、泰家は武人として優れた能力を持っていたのだろう。

しかし、泰家の勝利はすぐに打ち消された。泰家に敗れた新田軍の元に三浦氏が援軍として駆けつけたのである。三浦氏は鎌倉創業以来の有力御家人である。それが鎌倉を見限って新田軍に参加したのは、大きな意味を持つ。

三浦氏が合流したのと同じ日、新田軍は鎌倉軍に奇襲を仕掛けてこれを打ち破った。

「足利殿が六波羅を落としたと聞いたのでな。今なら鎌倉を、いや、

北条を倒せると思って参った」

「心強く思う、三浦殿。しかし、鎌倉の軍勢はなお我らより強大。次の一戦こそが、時代を決する戦となろう」

泰家を打ち破った今、残るは北条氏の本拠地と化した鎌倉だけである。しかし鎌倉は京と違い、守るに適した地形にある。攻める側にとっては、楽とせる場所ではない。おまけに、兵力はなお向こうが上なのである。

「我らが勝つとしたら、波に乗るしかない」

鎌倉の方にも、六波羅探題陥落の報は届いているだろう。こちらの士気は高く、向こうは低くなっているはずだ。そこを、一気呵成に攻め立てるしかない。

「義助よ、勝てると思うか」

義貞は実弟の義助に問う。義助は、武者震いを抑えながら頷いた。「ここまで来た以上、勝つだけだ。兄者、最初は一五〇だった新田軍が、今は一万を超える数に増えている。それだけでも、俺は勝った気分になれるぞ」

「ああ、そうだな」

義貞は遠方に見える鎌倉の都市を見つめた。鎌倉初期から冷遇されてきた新田氏の義貞は、あの都市に対する思い入れはない。ただ、打ち倒す敵だと考えている。

「行くぞ。時代を変えるのは、朝廷でも足利でもない。ここにいる我らじゃ」

義貞の言葉に、一同は気合のこもった声を上げた。

この間、京の高氏はただ東を眺めていたわけではない。鎌倉討伐の檄を各地の武士に飛ばし続けている。新田軍に加わった武士の中にも、高氏の檄に応じて参戦に踏み切った者がいる。

高氏は情報収集を急がせた。京と関東では片道でも数日かかる。現在進行形で行われている、新田軍の鎌倉討伐に関する情報は、少しでも多く、出来るだけ新鮮な状態で手に入りたい。

しかし、予想以上に新田軍の勢いは凄まじかった。六波羅を落としたときの高氏以上のものを感じる。

「このままではまずいな、次郎」

「新田が鎌倉を落としたとなれば、かの者たちの力が増すのは必至。そうなれば、我らの立場が微妙なものとなりますな」

この時代は、出自と実力の両方が重んじられていた。新田氏は今のところ、実力では足利氏に大きく劣る。だが、鎌倉を陥落させたとなれば、後醍醐が始めるであろう新政権で、多大な実力——即ち恩賞を得ることになる。そうならば、出自の面がほぼ互角だけに、足利氏の立場が盤石のものではなくなってしまふ。

「同等の勢力が二つ以上あれば、そこには戦乱の気運が生じかねない。新田を我らと同等のところまで押し上げるのは、危険だな」

「しかし、今のところ新田軍には大きな欠点があります。戦後処理次第では、どうにか出来るかと」

「そうだな。だが、後になってからでは遅い。……次郎、細川の三兄弟を今から鎌倉に送ることは出来るか」

「鎌倉とは、新田の方でございますな？」

「そうだ。新田軍には千寿王がいるが、より足利の存在を知らしめておく必要がある。無用の衝突を避けつつ、主導権を握る。そういうことならば、細川らに任せるのが最上だと思うが」

高氏の言葉に、次郎は頷いた。すぐさま手配をするために退室する。

残された高氏は、溜息をついてその場に寝転がった。

「……鎌倉は、落ちるであろうな」

新田軍と鎌倉軍の戦いは五月十八日から二十二日まで続いた。その戦の激しさは、梅松論によると、

同十八日（元弘三年五月）より二十二日に至るまで、山内小袋坂・極楽寺の切通以下、鎌倉中の口々、合戦の時声、矢呼び、人馬の足音しばらくも止むときなし

という様相だったらしい。

当初新田軍は三方から鎌倉を攻めた。鎌倉軍も当然必死の抵抗を試みたが、ここでもやはり士気の影響が出た。二十一日には大勢は決し、新田軍は鎌倉の市街へと突入を果たしたという。

もはやこれまでと覚悟したのは、長崎円喜、高資親子、そして北条一族の者ほとんどだった。高時も泰家も、そして高氏にとっては義理の兄に当たる守時も。

守時は執権職にありながら、高氏との関係のせいか、鎌倉内での立場は悪化していたようである。迫りくる新田軍を相手に奮戦するも、敵わぬと見て自刃し果てた。

長崎父子や高時、そして多くの北条氏は東勝寺に向かい、そこで自害した。このとき北条氏及びそれに従って亡くなった人の数、八百を超えたという。六波羅探題のときもそうだったが、北条氏の最後というのは、なにやら壮絶な印象がある。

新田義貞が挙兵してから一月と経っていない。

鎌倉幕府の幕末は、このようにして一応終結したのである。

高氏によって派遣された細川兄弟は、まだ鎌倉に到着していなかった。

余談「北条氏」

鎌倉の北条氏と言うと、あまり良い印象がない。専制体制を強化し他の武士から恨まれたこと、多くの武士の離反によってあっさりと滅び去ったこと、時代の敗者であること明確なため太平記や梅松論で悪者にされたことなど、理由はいくつも思いつく。

北条氏の立場になって考えてみれば、彼らの言い分も理解出来る。元という海の向こうからの脅威に備えるために専制体制はそれなりに有効であったし、その場合日本の軍事的中心に立つのは北条氏が相応しいというのも頷ける。

ただ、彼らの方針は日本という国に適していなかった。歴史上の敗者というのは、方針の善悪に関わらず、多くの場合この”適さなかった者”であることが多い。歴史上の勝者とは大衆の心を掴みながら目標を達した者たちであり、北条氏には前者が決定的に欠けていたと言わざるを得ない。

日本といったが、正確には武士の世とした方がいい。後年の江戸時代の武士からは想像しにくいだが、中世の武士は独立精神旺盛であり、自らの利益の増減には敏感であった。主君となる者は配下を納得させるだけのものを与えなければならぬ。多くの場合、それは領地の保証などだった。

武士の誕生によって日本の領地は細分化が進み、一つの機関で全てを管理することが難しくなっていた。ゆえに、武士の世が終わる幕末までの間、日本は全てを統括する組織を持たずに過ごすことになる。朝廷も、歴代の幕府も、日本全土を掌握することはなかった。現実的ではなかったからである。

しかし、北条氏はそれに近いことをやろうとした。領地を拡大し、そこに一門の者を送り込んでいった。彼らがどこまでやろうとしたのかは知る由もないが、もし元弘の乱で鎌倉幕府が潰れていなかったら、また違う武士の世が作られていたかもしれない。ほとんどあ

りえない「もしも」の話ではあるが。

日本は地理的条件から、海外進出にはあまり適していなかった。海外への侵攻を考える者など、この頃の日本にはいなかったであろう。ゆえに新たな領地を獲得することもなかった。領地を獲得した者は、日本の中にいる既存の領有者から奪うしかない。武士という軍事的領主が力を持ったのはそのせいである。他者のものを奪う一番簡単な方法は、武力による略奪なのだから。

そうした武士を治める幕府の役割は、彼らの支配ではなく、管理であると言った方が適切であろう。それぞれの領地内部のことには口出しはしないが、問題が起きたら幕府が解決に乗り出す、という形である。鎌倉幕府は最初に出来た幕府ということもあってか、こうした”武士に適した統治機関”としては後の室町・江戸幕府に劣る。逆に言えば、鎌倉幕府――北条氏の失敗がなければ、後の幕府もまた違うものになっていたであろう。

北条氏の印象に暗い影を落としているのは、鎌倉政権の篡奪者という面もあるからだろう。鎌倉初期に將軍頼朝の縁戚として力を振るい、頼朝の死後は鎌倉幕府の同僚である御家人たちと争い、謀略や戦によってこれらを滅ぼし、鎌倉の実権を握った。

だが、この認識は正しいようで正しくない。鎌倉は元々頼朝とその家臣によって作られた、鉄の結束力を誇る組織、などではなかったのである。初期は関東武士の連合体制、もっと悪く言ってしまうえば利害が一致しただけの烏合の衆であり、当面の敵であった平家を倒し、当初の目的だった朝廷支配からの脱却を遂げてしまえば、仲間内で争うのは当然の結果であった。北条氏はその中で勝ち残ったに過ぎず、このことだけで彼らを非難するのは、勝者に対する妬みになりかねない。

將軍職に就いて支配者としての立場を明確にしなかったのも、元々の身分や周囲との関係上難しかったからだと考えられる。一門の

者を積極的に要職に就けたり、有力御家人（足利氏など）と縁戚関係を結ぶようになったのは、堂々と支配者を名乗れなかった北条氏なりの努力の結果なのだろう。時代が進むと、その傾向ばかりが強くなり、他の武士を蔑ろにするようなことになってしまったのだが、鎌倉幕府という組織における北条氏の功績は、烏合の衆を一つの組織としてまとめあげた点にある。元という予想外の圧力がなければ、鎌倉は案外もっと長生きをしていたのかもしれない。この辺り、黒船来航から始まる江戸の幕末と比べてみると、なかなか面白いかもしれない。思わぬ圧力に脅かされた者たちは、身近な権力に不満をぶつけるものである。それも、その権力が巨大であればあるほど、不満というのは大きくなるものなのだ。

北条氏の統一感という点で気になったのは、滅亡の際に特に顕著だったことだが、自害に関する連帯感の強さである。

足利高氏に滅ぼされた六波羅探題の北方、北条仲時に従って自害した人の数は四三〇名。新田義貞の猛攻で滅びた鎌倉の北条家に至っては、得宗家の当主高時を始めとして八〇〇名以上が自害したという。これだけの人々がほぼ同時に亡くなったという事実には、私は北条氏の排他性が見え隠れしているような気がした。

専制体制の強化によって他の武士たちの支持を失っていたことは、北条氏も理解していたと思われる。ゆえに、多くの武士たちに寝返られ、これを防げないと分かった時点で、自分たちはもう駄目だと自害した。もし他の武士たちに誼があれば、投降することで許される可能性もあったはずである。それをしなかったということは、北条氏やその家臣たちは、他の武士たちから恨まれていた、もしくは誼が薄かったということになる。北条氏も内部で争いがあって決して一枚岩ではなかったから、この集団自害は単なる結束力の表れではないであろう。

なお、このすぐ後の南北朝時代では、投降することで命や領地を保とうとする武士の姿を見かけるようになる。壮絶な集団自害をし

た北条氏とは対照的である。

実際どの程度だったかは分からないが、末期の鎌倉幕府は北条幕府とも言えるくらい専制体制が進んでいた。ゆえに鎌倉幕府の滅亡とは、実質的には北条氏の滅亡に他ならないと見ることも出来る。足利氏や結城氏など、有力な御家人だった者たちは、鎌倉滅亡後も健在だった。いわば、北条という神輿が重くなりすぎて、それを今まで担いでいた者たちが放り捨ててしまったのが、鎌倉幕府の滅亡と言えるのではないか。

神輿だけが捨てられて、担いでいた者たちは健在という状況が、これからの騒乱の要因となる。代わりの神輿が後醍醐天皇であることは誰の目にも明らかだったが、この神輿もまた、担ぎ手にとっては大変なものだったのである。また、後醍醐天皇の方も、担ぎ手たちの持つ不満と力の大きさを把握しきれていなかった。

第十四章「白紙」

高氏の元には、いくつもの情報が流れ込んで来ていた。

まず、鎌倉に残してきた家族や一族の者たちの消息である。妻である登子、嫡男である千寿王はそれぞれ無事だったという。千寿王は新田義貞と行動を共にし、鎌倉陥落に多少なりとも関わったという。他にも足利の一族や友好関係にあった人々も、その多くが鎌倉戦に参加したらしい。

一方、無事でない者もいた。妾腹の子である竹若丸である。

竹若丸は夜陰に乗じて鎌倉を脱出したものの、東海道を僧衣姿で抜けようとしたところで北条氏の者に斬られたという。

「そうか。死んだか」

高氏はこの報告を聞いた後、しばらく政務を投げ出して引きこもってしまった。

庶子ということもあって竹若丸にはあまり構ってやれなかったが、己の子であることに違いはない。たまに会ったときなどは、惜しげもなく愛情を注いだものだ。

「父上」

必死になって馬にしがみつく竹若丸の姿を思い返し、高氏は一人涙を流した。

また、興味深いのは伯耆にいる後醍醐の動向だった。

「関白殿を解任されるそうです」

朝廷の様子をうかがってきた次郎——改め直義がそう報告した。

「それだけではなく、今の帝が皇位に就かれてからの人事を、全て白紙に戻すおつもりようです」

「伯耆の帝は、今の帝に関することを全て否定なさるおつもりか」

今の帝とは、後醍醐の反鎌倉計画が露見した際、その代わりとして皇位に就いた光厳天皇のことである。当然鎌倉の意向によるもの

だから、鎌倉が滅びた今、後醍醐はその在位に関する何もかもを帳消しにするつもりなのだろう。

「強引なやり方だと思わざるを得ません」

「しかし、そうしなければならぬのだろう。あの御方の目指すところは、天皇親政なのだ」

仮に光厳天皇の在位を認めてしまえば、後醍醐は復権したところで上皇という扱いになってしまう。彼は、天皇こそが政務の頂点に立つべきであり、背後に上皇や関白といった実質的頂点がいることは認めない、とする考え方の持ち主だった。そのことは、大覚寺統の中継ぎとして皇位就任をしたにも関わらず、院政を廃止して天皇親政を推し進めたという後醍醐の経歴からも明らかである。

後醍醐自身が天皇親政の世を作るには、天皇として朝廷に復帰しなければならぬ。上皇として実質的頂点に立つことも出来るが、それは後醍醐の政治的信念に反するものだ。かと言って、今の朝廷に後醍醐の理想を理解し、それを忠実に果たしてくれる後継者はいそうにもない。そう思ったからこそ、後醍醐は自らの手で天皇親政を成し遂げようとしている。

もともと、そのために在位そのものを否定される光厳天皇にとっては、たまったものではない。

「これで朝廷はまとまるのでしょうか、兄上」

「しばらくはまとまるであろう。伯耆の帝は鎌倉討伐の総大将。その実績に逆らう者など、そうはいまい」

高氏としては、光厳に対する同情のような感情はあったが、後醍醐のやり方への反発心はなかった。皇統が一つにまとまるのであれば、その方が良いとも思っている。

「それより問題は太塔宮様だ。あれは、どうにかならんのか」

高氏が溜息をつく、直義も苦い顔つきになる。

「昨日の敵は今日の友、というわけにはいかないでしょう。帝が帰京されるまで待つしかありませんまい」

太塔宮は、後醍醐の皇子の中でも鎌倉との戦いで特に活躍した。

各地に檄を飛ばして反鎌倉の気運を高めつつ、ときには楠木正成らと連携し、ときには赤松円心らと謀り合って、鎌倉討伐に貢献した。新田義貞の活動も、大塔宮の後押しあってこそだったと噂されているくらいである。

その大塔宮だが、現在は奈良の北西にある信貴山に立てこもっている。立てこもっていると言うと物騒な響きだが、そうとしか言いようがないのである。

原因は、高氏の行動にあった。

高氏は六波羅探題を滅ぼすために、関東や九州など、幅広い地域の武士たちに反鎌倉の挙兵をするよう呼びかけた。この点は大塔宮とも似ているが、高氏の呼びかけは相当の効果があったという点が異なる。二人の能力差ではない。立場や状況、時勢が、呼びかけに対する武士たちの反応の違いになった。

そうして集まった武士たちと共に六波羅探題を滅ぼすと、高氏は探題の下にいた武士たちに帰参を呼びかけ、これを吸収した。さらに、楠木正成が籠る千早城を包囲していた鎌倉の大軍にも、六波羅陥落を伝えて、帰参させてしまったのである。

大塔宮からすれば、昨日まで戦っていた敵がそのまま高氏の配下になった形になる。さらに、そうした武士たちの論功行賞を高氏が勝手に行っているとなれば、北条が足利になっただけではないか、と思っても無理はない。

もつとも、高氏にも言い分はある。六波羅探題の下にいた者たちにして、千早城包囲に参加していた者たちにして、放置しておくことは到底出来ない。彼らを無力化させるには、代表を立ててその下でまとめさせるしかないのである。そして、北条亡き今、武士の代表たりえるのは高氏くらいのものであった。

仮に高氏がこうした措置を取らなかったら、千早城を包囲していた者たちを相手にもう一戦しなければならなかっただろう。六波羅探題の下にいた者たちに関しても、これを放置したり片っ端から斬ってしまえば、彼らの親族が黙ってはいない。

元弘以来続いている騒乱の早期解決には、高氏の行った方法は有効だった。

「一応、信貴山に使者を送れ。武士たちの沙汰に関しては、臨時の措置と心得てもらいたい。帝が帰京された場合、改めて朝廷に沙汰をお願い致す所存であると」

「大塔宮様が聞き入れるとは思いませんな」

「それでも出しておけ。しないよりはした方がいい。後で言い訳も出来る」

「分かりました」

直義が下がった後、高氏は警護の者を連れて市中に繰り出すことにした。

最近では屋敷に詰めてばかりいたから、少し外の空気を吸いたかった。それに、市中の様子を直接目にしたいという思いもある。

「以前とは比べ物になりませぬなあ」

そうぼやいたのは師直だった。高氏の少し後を、馬に乗ってついてくる。

「先年訪れた際は、もつとこう、雅やかな雰囲気もありましたが」

「うむ。酷いものよ」

これまで鎌倉と朝廷で二分されていた権力が、再び朝廷の手でまとまるのである。当然政治の中心は朝廷のある京になる。そのため、様々な人間が一気にこの都へと流れ込んできた。一番多いのは、旧鎌倉系の武士で、高氏が集めた者たちである。

それだけの人間が流れ込んでくれば、混乱が生じるのは当然のことだった。

「殿がやったようなものではありませんか。公卿どもだけでなく、貧乏町人まで家を追い出されていると聞きますぞ」

「政情が落ち着けば家主に返すであろう。あくまで借りているだけなのだからな」

「落ち着くには何年かかることか。それまで、追い出された家主た

ちはどこで暮らすのでしょうか」

皮肉まじりの師直の言葉に辟易して、高氏は少し馬を急がせた。分かつてはいるが、放置しておけばもっと酷いことになっていただろう。高氏の集めた武士が一番迷惑をかけているのは事実だが、どのみちここに人が流れ込んでくるのは避けようがなかった。

「わしがいなければどうなっていたか、もっと考えよ太郎。そう責められてばかりでは嫌になるぞ」

「人の上に立つということは、人に責められるということでもある、ということではないですか」

「ああ言えばこう言う奴め。まるで次郎になったようだぞ」

「某が御舎弟のようになったのではありませぬよ。殿の立場が変わられたのです」

「分かっている」

わずらわしそうに高氏は頭を振った。

しばらく進んだ先では、武士と思われる集団の対立が起きているようだった。敵意をむき出しにした男たちが言い争いをしている。鎧を着けている者もいれば、半脱ぎになった者もいる。

「あれは、どうしたのだ」

高氏は道端でぼんやりとしている男に尋ねた。

「なんでも、先の戦いのことで揉めているようで。功を横取りされたとか、そうでないとか」

こうした争いが頻発していることは直義から聞かされていたが、実際目にするのは初めてだった。男にも確認してみたが、こういうことは何度も目にしているらしい。

「太郎」

「はっ」

師直は高氏の意を察したのか、言い争っている武士たちの間に入っていく。

「我は足利の執事、高太郎である。この言い争いは何事であるか」
しかし、武士たちは足利の名を聞いても引っ込まなかった。

「足利？　それがなんだ」

「お前などに用はない、引っ込んでいろ！」

そう言われては、師直とて引き下がるわけにはいかない。ここで大人しく身を引けば、彼だけでなく足利の面目に関わる。

「貴様らこそ足利を知らんのか。今、京の武士たちを束ねているのは我が主、足利の当主前治部大輔であるぞ」

師直は声が大きく、体格も良い。凄まれた武士たちは、ようやく相手が何者であるかの自覚が出来たらしい。

「話があるなら後々足利の陣まで参れ。そこでなら相手をしてやる」
相手が気圧されたと見るや、師直はすかさず踵を返した。騒ぎ立てていた武士たちも、静かに退散していく。

「足利の名は、北条ほどには恐れられていないようだ」
やり取りを見ていた高氏は苦笑した。

「当然でござろう。足利は朝廷方の一員として戦っただけ。武士の棟梁とは、まだまだ言えませぬ」

「しかし、それに一番近いのは我らだな」

「左様。ゆえに、これからが難しゅうございますぞ」

師直の言葉に、高氏はため息を返した。先のことを考えると、気が重くなるばかりである。

それから間もなく、高氏の元に吉報がもたらされた。

細川の三兄弟が新田義貞と交渉を行い、鎌倉の地を掌握することに成功したというのである。

「そうか。よくやった。後で細川の兄弟には褒美をやらねばならぬな」

決定打となったのは、千寿王の存在だったらしい。新田義貞が鎌倉を攻め落とすことが出来たのは、千寿王の名に応じて東国の武士が集まったからだ、と細川和氏、頼春、師氏は主張したらしい。

義貞は当然これに反論したが、両者が交渉している間に、鎌倉攻めに参加した武士たちがこぞって足利の陣営に入ってしまったので、

やむなく引き下がることにしたのだという。

以下余談。

細川氏は足利の庶流であり、その中では家格も低い方であった。しかしこの和氏、頼春らの代で活躍し、室町期に入ると幕府の重鎮となって大いに発展する。その後、紆余曲折を経ながらも戦国時代には細川幽斎、忠興ら著名人を出して近世大名となった。幕末を経てもその家名は残り、現代に至るまで続いている。

ともあれ、これで足利は京と鎌倉の双方を掌握したことになる。無論、後醍醐が沙汰を下すまでの一時的なものではあるが、このことで足利氏の力は世に広く知れ渡っただろう。

「これで足利も、武士の棟梁にまた一步近づいたことになりますな」直義は満足そうだった。北条ではなく足利こそが武士の代表であるべきだ、と前々から言っていたのだ。喜ぶのも無理はない。

しかし、高氏にはまだ安心出来なかった。

「はたして、帝はどこまで武士の力を認めるおつもりなのか」

天皇親政——つまり、天皇への権力集中こそが後醍醐の政治の信念である。そんな信念を持つ者が、武士の棟梁や幕府といった、鎌倉以来の武士の在り方を認めるであろうか。

それに、鎌倉を掌握し損ねた新田義貞も、当然こちらに来るであろう。足利に対して義貞がどのような感情を抱いているかは、容易に想像がつく。対立は避けられまい。

これからが難しい、という師直の言葉が蘇る。

「次郎、今のうちに朝廷へ顔を出しておけ。あちらの雰囲気慣れることだ」

今後は朝廷でどのように立ち回るのが重要になる。そう思って高氏は言ったのだが、

「私はしておりますぞ。兄上こそ、向こうの雰囲気慣れてはいかがですか」

直義は呆れた様子で言い返してきた。確かに、高氏はまだ朝廷の方にあまり顔を出していない。何か狙いがあるわけではない。単に

わずらわしいのである。

「そちらはお前に任せる。わしは少し疲れた、休みたいのだ」
高氏は、冗談めかしてそう言った。

第十五章「帰京」

伯耆の船上山にいた後醍醐が、京に向かって移動を始めた。

その報告がもたらされた直後、師直がいつになく表情をこわばらせて駆け込んできた。

「楠木と申す者が訪ねて参りました」

今やその名は、近畿はおろか奥州や九州にまで知れ渡っている。

今回の対鎌倉戦における立役者、楠木正成。何万もの鎌倉軍を相手に、たった数百人で籠城戦を挑んだ男だ。鎌倉が陥落するまで持ちこたえた武勇は、高氏の耳にも入っている。

「河内の悪党か」

会ってみることにした。悪党というものに興味があるからだ。播磨の悪党赤松円心もただならぬ男だったが、楠木正成はそれとはまた違う類の悪党のような気もする。

「縁側に連れてまいれ。上下の区別なく話をしたい」

「御舎弟に見つかれば、また説教ですな」

「あやつはそれどころではあるまい。わしの分まで働いているからな」

「某、時折御舎弟が気の毒に思えて仕方ありませんぬよ」

笑いながら師直は下がった。それと入れ替わるような形で、一人の男がやって来た。

背丈はそう高い方ではない。高氏よりも少し低めだった。ただ、小さいという印象は受けない。がっしりとした体格の持ち主であり、数か月の籠城戦に耐えうるだけの気骨を感じさせる男だった。

「河内の楠木兵衛尉にござる」

……ほう、これは。

正成の声に、高氏は背筋を改めて伸ばした。そうさせるだけの迫力がある。

「わしは足利前治部大輔。そなたの武勇は聞いている」

「ありがたいことにございます」

頭を下げつつも、正成の物言いは不機嫌なものだった。怒っている。

……はて、何かまずいことをしたか。

首をかしげてみたが、心当たりはない。

「ときに某、此度は足利殿に一言申したきことがあってまかり越した次第にございます」

「ほう、それは？」

「足利殿は、第二の北条になるつもりではござらぬか」

見る者が皆気圧されるような眼だった。高氏は思わず息を呑み、言葉を失う。

……怖い奴よ。

まるで獣である。何十倍もの大軍を相手に孤軍奮闘していたのだから無理もない。人間、ある極致に達するとこんな顔つきになるのかもしれない。

「そのようなつもりはない」

高氏は息を落ち着かせながら、ゆっくりと言った。自分が六波羅や鎌倉の武士たちを吸収したのは、混乱を防ぎ、戦を迅速に終わらせるためである。北条の後を継いだり、帝に刃向うつもりは毛頭ない。

「足利は大きな勢力ゆえ、今の武士を代表するような立場にはある。しかし得宗の真似事をするつもりはない。足利が進むのは足利の道だ」

それは本心だった。今北条の真似事をしたところで、誰が支持をしてくれるのだろうか。世を敵に回すだけではないか。

「そうでございますか」

正成はしばらくの間、じっと高氏の目を見ていた。やがて大きく息を吐き出すと、表情を和らげる。

「失礼致しました。某、足利殿のことを誤解していたようにございます」

「無理もない。しかし、それも帝が帰京されれば解けるであろう」

「帝が戻られたら、いかがなさるおつもりで？」

「これまでわしが預かっておいた武士たちの論功行賞を、改めて朝廷に願ひ出る。それからわしらも恩賞をいただく。今はそれしか考えておらぬな」

「武士の代表として、將軍になるつもりはないのですか？」

正成はちよつと意外そうだった。緊張が解けたせいか、表情がころろと変わる。元来素直な性格なのかもしれない。

「ない。今それを望めば、まさに第二の北条現る、と皆から袋叩きにされてしまうわ」

高氏にとっては、栄達よりも保身の方が大事だった。武士の棟梁になりたいという野心はあるが、慌ててそれを狙う必要はないと考えている。北条が滅びた今、足利氏は武士の最大勢力である。待っているだけでも、相応のものは転がり込んでくるであろう。

「そなたから見ても、わしは油断ならぬ男であろう。大塔宮様やそなたが命がけで戦っていたのを、横からおいしいところだけ取っていったようなものだ」

「いえ、そのようなことは。むしろ、救われるような思いでした」

高氏の寝返りが鎌倉滅亡のきっかけとなったのは事実である。もし高氏があのまま船上山の後醍醐を攻めていたら、正成たちも敗れ去る他なかったであろう。

高氏は縁側から遠方を眺めた。その方角には、大塔宮が立てこもる信貴山がある。

「大塔宮様のことをお考えですか」

「ああ。あの御方とも、このように話してみたい。誤解されたままというのは、嫌なものだ」

「それは無理でございましょう」

正成は覇気なく言った。

「大塔宮様は誤解はされておりませぬ。ただ、足利殿個人を見ていないだけなのです」

「では、あの御方は何を見ておられる？」

「武士。特に旧鎌倉の勢力でございましょう。足利殿にその野心がなくとも、あなたの下にいる者たちは第二の鎌倉を求めるかもしれない。大塔宮様が恐れているのはそこなのです」

確かに、それが問題ではあった。

武士には、朝廷の支配を嫌う者が多い。それが高じて独立の気運が生じ、鎌倉という武士による武士のための政治機関が出来た。長い間その下で生活していた武士たちが、再び大人しく朝廷の支配に従うようになるのだろうか。

「多くの武士は、帝の理想に呼応して鎌倉と戦ったわけではないはずです。鎌倉の統治が破綻したから、それを見放しただけのこと。彼らが望むのは、決して帝の世ではない。そんな気が致します」

「それでも、これから始まるのは帝の世だ。それを不服として逆らうような者が出れば、世はますます混沌としたものになるう」

高氏に出来ることは、せいぜい上手く立ち回って武士と帝の間を取り持つことぐらいだろう。そうして堅実に勢力を伸ばしながら、朝廷の下で武士の棟梁となればいい。

「それよりも、千早城でのことや河内のことなどを知りたい。時間があれば聞かせてくれ」

後醍醐天皇が帰京したのは六月五日だった。伯耆からは名和長年が護衛につき、その後途中で赤松円心や楠木正成も出迎えた。他にも世の情勢が変わったと見た武士たちが加わり、帝の行列は豪華なものになったという。

動かなかったのは、高氏と大塔宮である。

「行かなくてよろしかったのですか、兄上？」

「構わぬ。帝が戻られるまで京の留守を預かるのがわしの役目だ」それに、源氏の主流としての誇りもある。比較的身分の高い者、特に東国の武士たちは帝の元に向かわず、それぞれどっしりと構えている。軽々しく振舞うものではない、という名門意識である。

ただ、高氏にとって予想外だったのは、後醍醐が帰京したその日に自分を呼び出したことであつた。

「せっかちな御方のようだ」

慌てて身支度を整えて、御所に向かったのは正午過ぎのことだつた。馬を駆って急ぐ高氏を、何事かと京の市民が眺めていた。

御所にやって来た高氏を最初に出迎えたのは正成だつた。

「足利殿。急いで参られたようですね」

この間会ったときよりも、だいぶ人間臭い顔つきになっていた。その分、どこか迫力が衰えたような気もする。

「楠木殿、帝はどのようなおつもりでわしを呼ばれたのかな」

「某には分かりませぬな。ただ、悪い話ではないと思います。此度の戦、足利殿の力なくして勝利はなかったのですから」

「そうか。そうだといいが。わしは正直、怖い」

「恐れる必要などないと思いますが」

「己の処遇についてはそうだ。しかし、わしは帝というものに拝謁するのはこれが初めてになる」

それが恐ろしい。普段はさほど感じたこともない帝の気配というものが、濃厚に感じ取れる。物心ついた頃から関東で暮らしていた高氏にとって、帝というのは遠い星のようなものだった。

今から向き合わねばならないのは、そういう相手である。

正成と別れて、高氏は一人後醍醐天皇の元に向かった。

薄暗い部屋だつた。奥にそれらしき人物がいたが、直視することは出来なかつた。それから、左右にずらりと公卿たちが並んで座っている。

……こいつはたまらぬ。鎌倉などとは大違いだ。

鎌倉では將軍はほとんど相手にされず、執権に対しても簡略的な礼儀しか用いなかつた。諸將がそれぞれ席を共にしているだけの場であり、そこには莊嚴なものがかつた。

ここは違う。鎌倉ではありえなかつた重苦しい雰囲気がある。

……これが帝の、あるいは朝廷の権威というものか。

天皇と朝廷は長い歴史を誇り、その中で犯されがたい権威を育ててきた。承久の乱で一時的に衰えたものの、その威は健在であるらしい。

「源高氏か」

「はっ」

低く鋭い声だった。想像していた帝の声とはまるで異なる。戦場を駆け回る猛将の姿が思い浮かんだ。

「此度の働き、まことに大義じゃ。本日よりそなたを鎮守府将軍に任ずる」

鎮守府将軍。武門の栄職だった。実質的な権力はない名誉職ではあるが、破格の待遇であることに変わりはない。今日では征夷大將軍と比べるとさほど名は知られていないが、当時は東国武士たちの憧れの的だったらしい。これを与えられたということは、足利は他の武士とは違う、と帝に保障されたようなものだった。

高氏は歓喜に震えた。鎮守府将軍など、北条の世では望むべくもないものだったからだ。

ただ、謁見が終わって屋敷に戻る頃になると、少しずつ頭が冷えてきた。

……浮かれることは出来ぬな。

鎮守府将軍は確かに非常な名誉職ではある。しかし、名だけで実がない。実のない恩賞だけで満足するほど、足利は小さくはなかった。

その後、高氏と直義はそれぞれ朝廷の官位を得た。

高氏は従五位上から一気に従四位下に昇進し、左兵衛督となった。間には正五位下と上があったから、位を二段飛ばしての昇進である。直義は左馬頭に任じられた。高氏や直義の兄、高義も左馬頭だった。しかしそうした優遇も、素直に喜ぶことは出来なかった。

それから程なくして、大塔宮が征夷大將軍に任じられたからである。

第十六章「緊張」

高氏は動かない。ただ、情報を集めている。

鎌倉との戦における恩賞問題は、朝廷が行っている。高氏の元に集まっていた恩賞問題は、そのまま朝廷に流れたということだ。元々高氏自身にその権限はないから、さして気にはならない。現在、地域によっては北条の残党が動いていることもあり、沙汰はまだとなっている。

後醍醐天皇の新政は記録所と恩賞方という二つの機関が中心となっていた。しかし、これらの機関は後醍醐方の公家たちで占められており、高氏やその党類は入っていなかった。ただ、一部例外として、楠木正成や名和長年といった悪党上りの者が構成員に含まれている。

「帝の鼻肩によるものよ」

師直をはじめ、多くの武士たちはこの人事を笑い飛ばしていた。武士は所領こそ大事であり、朝廷の一部となって働くことに魅力は感じていない。噂の種にはなるが、それが直接不満になるわけではなかった。

ただ、高氏や直義らが無視されたような格好になっていることは、噂になっていた。

「まあ、別に入りたいとも思わぬがな」

後醍醐は、帝が発する臨時は万能であると定めた。その意図するところは天皇専制であり、すべての最終決定権は天皇が持つということでもある。恩賞方や記録所の仕事と言えば、その決定のための材料集めに過ぎない。その機関が公家たちで構成されているのは当然だろう。帝の手足としては、幕府方の武士よりも信頼がある。

「しかし、大塔宮様は困ったものです」

「何がだ？」

「足利は第二の北条になる恐れあり。そのように触れまわっておら

れるようです」

大塔宮は、後醍醐から征夷大將軍に任命された後、ようやく京に戻ってきた。名誉職を与えて慰撫したというところだろう。ある意味では、高氏と似たような扱いを受けている。

「我らに対抗するつもりか」

「征夷大將軍も大塔宮様が望まれたと聞いております。帝はそれに乗り気ではなかった、とも」

後醍醐の政治は、鎌倉政権の否定にあった。鎌倉が行ってきた所領に関する沙汰を誤りであるとし、次々とそれを正そうとしているという。名目上、その鎌倉の頂点とされてきた征夷大將軍という官職は、後醍醐にとって苦々しい響きであろう。

大塔宮も武家政権否定派である以上、征夷大將軍というものは警戒していたはずだった。それを自ら所望したのは、父である帝が高氏にこれを授けるのではないか、という疑念があったからだろう。

「どうも、帝と大塔宮様の仲はうまくいっておらぬようだな」

「そのようなことを気にかけている場合ではありません。新田勢のこともありますし、これ以上軽んじられていては足利の名に傷がつきますぞ」

確かにそうであろう。鎌倉戦で大きな役割を果たしておきながら軽視され、それに抵抗せねば源氏の主流としての誇りが廃る。

「分かった。わしも御所へ出向いて、掛け合ってみることにしよう」

相変わらず、重苦しい雰囲気だった。それでも、大分慣れてきた。

高氏が恩賞の持ち出すと、廷臣たちの視線が卑しい者を見るようなものになった。それにも慣れた。

「足利殿は帝のなされように不満でもあるのか？」

「滅相もございませぬ。ただ、武士とは命を懸けて土地を得る者にございます。命懸けの戦が終わり、それでも恩賞が出ぬとあらば、不満を持つ者も多く出ましよう」

後醍醐と直接問答をするわけではない。相手は、後醍醐の側近で

ある。最初の一度以来、尊氏は帝の声を聞いていない。

帝は、ただそこにいるだけである。

「もうよいであろう、下がりなされ」

公家の言葉に高氏はちよつと頭を下げた。

御所を歩きながら、高氏はわずかに見えた後醍醐の顔を思い出していた。何かを訴えかけてくるような目をしていた。表情は、必要以上に強張っていた。

「足利殿」

ちょうど内裏から出ようとしたところで、後ろから呼び止められた。振り返ると、そこには意外な顔があった。

「貴方は、いつぞや我が屋敷に参られた……」

そこに立っていたのは、かつて足利荘を訪れた、名も知れぬ男だった。長らく忘れていたが、顔を見てすぐに思い出した。

男の表情からは、何も窺うことは出来なかった。こちらを軽んじているわけでもなく、心を開いているわけでもない。

「あのときは名乗りもせず無礼をした。私は北畠の宗玄というものだ」

宗玄とは出家してから号したもので、名は親房という。後醍醐天皇の信頼厚く、吉田定房、万里小路宣房と共に「後の三房」と称された公家である。

相手の意外な正体に驚いて頭を下げる高氏を、親房は「よい」と制した。

「いろいろと話したいこともあるが、今日は別の用事があって来た」

「用事でございますか？」

「うむ。明後日、もう一度御所に来てもらいたいのだ」

「明後日。はて、何かあるのでしょうか」

「帝がお主と語りたいと仰せでな。余計な廷臣は同席せぬ」

親房の物言いから、高氏はうっすらと帝の内心を知り得た気がした。

「では、誰が同席されるのでございましょう」

「私と大塔宮様だけよ。そちらも、よければ左馬頭殿を連れて来られるとよい」

京の情勢を握る要人が一堂に会する、と言っても過言ではない面子だった。

ちなみにこの時期、新田義貞はまだ鎌倉から上京してきていない。また、いかに戦功を立てたとは言え、楠木正成や赤松円心は出自が低い。そのため彼らは政局の中心にはいなかった。

「大塔宮様もお越しになられるのですか」

「不服か」

「いえ、ただ私は嫌われているようなので」

不服ではないが、気は滅入る。それが顔に出ていたのか、親房は大きく溜息をついた。

「その心中を明かされたわけではないが、帝はおぬしらの不和を憂慮しておられる。此度我らを呼んだのも、おそらくはそのためであろう」

「承知しております」

「それに、おぬしのしたことにも原因はある」

親房からは、以前会ったときよりも冷たい印象を受けた。彼が変わったのか、それとも自分が変わったのか、あるいは両方なのか。

「宗玄様、私は間違ったことをしたとは思っておりませぬ」

「そうであろう、私もそう思う。だが、大塔宮様とて間違っているわけではない。ともかく明後日だ。承知したな、足利殿」

親房はそう言い残すと、急ぎ足で去ってしまった。何かに苛立っているようだった。

この件は、他の公家たちには知らされていないようだった。秘密裏の会合ということらしい。

庭先から日の光が差し込んでくる一方、室内には濃厚な影があった。その中に、一人の青年が座っている。

高氏らがやって来たとき、青年はこちらを一瞥して、目を閉じた。

それ以降、動きを見せない。おそらく、この青年が大塔宮なのだろう。がっしりした体格の持ち主で、一騎打ちでもすれば高氏は負けてしまいそうだった。

隣の直義も、この場には緊張しているようだった。いつもに増して表情が硬い。

どれほど時間が経っただろう。誰かが近づいてくる音がしたかと思ふと、親房に連れられた帝が姿を見せた。

一同が平伏する。その中を悠々と歩き、帝は上座に腰をおろした。皆、表を上げよ。伏せたままでは声がよう聞こえぬわ」

威厳はあるが、重々しくはなかった。やはり、どこか武将のような印象がある声だ。

「此度そちたちを集めたのは、他でもない、そちたちの不和のことだ」

高氏は後醍醐の言葉に頭を下げた。帝から直に指摘されては、萎縮するしかない。

「そちたちの不和によって、市中からは不安の声が出ていると聞く。それを放置することは出来ぬ」

「おそれながら」

大塔宮が鋭い声を発した。後醍醐はかすかに眉を動かし、我が子に視線を向けた。

「私は鎌倉を打ち倒すための戦いを続けてきました。北条は倒れましたが、未だその戦いは終わっておりませぬ」

大塔宮の険しい視線が高氏へと向けられる。

「各地では、まだ北条の生き残りが抵抗を続けております。また、鎌倉の残党は足利殿の下で健在。戦が終わったと安心するのは早計」
「鎌倉は倒れました」

大塔宮の言葉を断ち切るように声を上げたのは、直義ではなく、高氏である。

「大塔宮様は私が鎌倉の兵を匿っていると思われるご様子」
「……違うと言うのか？」

「断じて違います。武士には、勝ち目がないと見れば相手に降参することが認められております。彼らはそうして降参しただけのこと。もはや鎌倉ではありませんぬ」

高氏と大塔宮の視線がぶつかり合う。別に口論するつもりはなかった。ただ、感情が揺れ動いている。

「しかし、なぜ足利殿がそれを認める。降参人どもはなぜ足利殿の下に集まる。帝の下に帰参するのが筋ではないか」

鎌倉との戦の総大将は後醍醐天皇である。降参するのであれば天皇の下に行き、認められなければならない。大塔宮の主張は、確かに間違いではない。彼からすれば、帝の立場を高氏が横から奪ったように映るのだろう。

「鎌倉成立以降、武士は武士、宮方は宮方とされてきました。彼らが私の下に帰参したのは、足利の勢力ゆえです」

「その勢力が問題なのだ」

大塔宮はかすかに迷ったが、結局口を開いた。

「率直に問う。足利殿、そなたは相模入道（北条高時）の後を継ぐつもりではないか」

その言葉に直義が身を乗り出し、高氏は慌ててそれを制止した。

親房は厳めしい顔のまま後醍醐を見ており、帝の視線はまっすぐ高氏へと向けられていた。

「……北条の後を継ぐことは、ありえませぬ」

高氏は全員に言い聞かせるように、力を込めて言った。

「私が鎌倉の敗残兵を帰参させたのは太平の世を作るためでございます。降参を認めなければ彼らは抵抗せざるを得なくなり、彼らとの戦が続けば世は大いに乱れましょう」

「その点については私も同感でございます」

後醍醐に向けて、親房が言う。

「今、仮に足利殿が北条の後を継ごうとしても、帝に逆らってまでこれに従おうとする者はおりますまい」

親房の後を継ぐように、高氏が言葉を続けた。

「また、現在諸国の武士が京に集まってきましたが、彼らは私の配下になったわけではありません。彼らの目的は恩賞を得ること。恩賞をお与えになるのは御上でございます」

「恩賞を与える者に武士は従う、か」

「然り。逆に恩賞を与えなければ、武士——否、全ての人々は不満を抱くものなのです」

「うむ」

後醍醐は一同を見渡して、ゆっくりと頷いた。

「高氏よ、またこのような機会を設けたいものだ。朕は武士というものに、そちという男に興味が湧いたわ」

「御上、それは……」

「護良よ、そちの心も分かっておる」

後醍醐は姿勢を正す。一同も、自然と背筋を伸ばした。

「今は天下泰平こそ第一である。抵抗を続ける者は打ち払うべきだが、そのつもりがない者の降参は認める。また、全てを決するのは朕である。朕の認めぬ無用な争いは、決してしてはならぬぞ」

その言葉に全員が平伏する。その日はそれで解散となった。

大塔宮の表情は、終始険しいままであった。

第十七章「恩賞」

朝廷は、小さい。

高氏が鎌倉戦の際に呼びかけた全国の武士たちが、日に日に上京してきている。その中には、鎌倉を攻め落とした新田義貞も含まれている。

当然、挨拶に来た。

「執権（守時）殿は立派な最期であったそうな」

義貞は高氏よりも、身体つきがたくましい。自身も野作業に励んでいたからだろう。肌も焼けていて、いかにも坂東武者といった趣がある。

楠木正成も風貌は似ているが、義貞は終始表情が硬かった。

「悪いことをした」
とは言わない。

義貞から鎌倉を奪ったのは、足利氏全体の立場を考えてのことである。ここで尊氏個人が謝罪したところで意味はなく、相手もそれを望んでいるわけではない。

「今、京は各地の武士で包まれておる。帝もさぞ苦心なされておられるであろう」

「いかにも。ただ、勇猛果敢な御方ゆえ、己を貫き通すおつものようだ」

直に後醍醐とやり取りをしたときのことを思い出す。高氏は帝といるものを、どこか公家のようなものとして考えていた。しかし、あの帝は違った。武士のように粗暴でもなく、公家のように狡猾でもない。あの得体の知れぬ自信。

……あれが帝か。

思い出すたびに、こうして感心していた。

義貞が退室した後、高氏は師直を呼び出した。遠乗りに繰り出すためである。

「武士が増えるのは頼もしく思えますな」

郊外に出た頃、師直がそんなことを言った。

「京は良いですな。女子も美しく、見栄えの良いものが多くある。しかし、あの空気だけは落ち着きませぬ」

「公家の空気か」

「そう言ってよいものかどうか。ともかく、武士たちで溢れ返って、ようやく落ち着いた心地が致します」

「わしも同じだ。心を空にして、ようやく生きていることが実感出来る」

近頃、分からなくなることがある。それを高氏は口にした。

「太郎。京は公家のものか」

「武士には馴染み難き地でございましょう」

「この辺りは誰の土地かのう」

「はて。わざわざ確認はしておりませぬゆえ、分かりませぬ」

「分からなくとも良いか」

「殿は何を仰りたいのでしょうか」

高氏の言葉から何事かを察したのだろう。師直は怪訝そうに尋ね返してきた。

「この天地は誰のものか。そんな、つまらぬことを考えるようになった」

高氏の悩みは、後醍醐から発している。あるいは大塔宮かもしれない。

日本の天地は、飛鳥時代に律令制が確立されて以降、名目上天皇のものとなった。律令制とはそういうものである。

しかし、日本の律令制は長続きしなかった。王が土地と人民を支配するというこの制度は、私有土地である荘園の存在を認めたことで淡いものとなった。ただし、死滅したわけではない。

荘園制度に朝廷は不可欠だった。天皇の支配力と入れ替わるようにして、多くの荘園を有する公家たちが朝廷で力を持ち始めたからである。律令制は衰えたが、朝廷という組織の影響力は上がった。

土地は、王のものから公家のものになった。

しかし公家たちは京に滞在することが多く、所有土地の管理は彼らの下にいた農場主に任されていた。農場主は税を納める他、土地を奪おうとする者たちから命懸けでこれを守った。闘争の中で彼らは武装し、土地への愛着心を育んだ。やがて彼らは大きな連合体を作り、土地権利を巡って公家に対抗するようになった。武士のことである。

ただ、武士の連合体& a m p; # 8 2 1 2 ; & a m p; # 8 2 1 2 ; 鎌倉幕府が出来ても、土地の所有者が公家から武士に移ったわけではない。武士の台頭は著しかったが、公家たちが所有する土地もまだ多くあった。

そして今、鎌倉幕府が倒れた。

後醍醐は、自分を絶対君主にしようとしている。その目指すところは、律令制の復活なのだろう。おそらく公家たちは、それに反発しつつも天皇に接近しようとするはずだ。武士は、その下につくころになるのだろうか。

「帝は、天地をすべて己がものにしたいらしい。大塔宮も、それを目指している。わしは、そのことが気に入らぬ」

口にしてみて、初めて自分の正直な気持ちがあった。大塔宮に對して抱いた苛立ちの正体はそこにある。私有が失われることが、高氏には腹立たしい。

別に北条の後を継ぐとは思っていない。ただ、自分たちの土地を持つ権利ぐらいいは認めて欲しかった。

しかし、不思議と帝に對して苛立ちは感じなかった。武士への理解を示そうとしたからか、それとも相手が帝だからか。

「わしは、帝からの恩賞を待っている。考えてみれば馬鹿な話かもしれないな」

「帝が武士に土地を与えるのは、鎌倉との戦における総大将だったからに過ぎませぬ。武家の法と同じことでございましょう」

「此度はそうであろう。しかし、その総大将が帝であることが恐ろ

しいのだ」

帝のことを言いつつも、心中思い描いていたのは大塔宮の顔だった。

後醍醐の下につくことに抵抗はない。ただ、その統治に私有権がないのであれば、高氏だけではなく多くの人間が不満を持つであろう。

大塔宮は、武士の私有権を否定しようとしている。完全に朝廷の下につくことを求めようとしている。だから、腹立たしい。

自分自身にそう言い聞かせながら、高氏は馬に鞭を打った。

市中に大勢の武士がひしめき合うようになった七月、後醍醐政権に変化が訪れた。

これまでは物事の決定権を後醍醐のみが握っていたのだが、それを改めたのである。後醍醐一人では、鎌倉以降勢力を増した武士たちに対応しきれなかったのである。武士の所領問題は、各国の担当官に任されることになった。

ただし、担当官の決定を覆す権力を持っていることを、後醍醐は主張し続けた。政権の最上に天皇がいる、ということは譲れないらしい。

「近頃は休む間もありませぬ」

恩賞方に勤める正成は、覇気のない表情を浮かべていた。出会った頃から、少しずつ力がなくなっているように見える。

今、二人は京の中を歩いている。高氏が内裏から出たところで、恩賞方から戻る正成を見つけたのである。

「千早城での籠城戦よりも辛い。あのときも武士というものの多さには辟易しましたが、恩賞方ではそれをより実感させられます」

それはそうだろう。相手は全国各地にいる武士なのだ。

「武士は本当に多い。そのくせ、武士同士でいがみあってばかりいる。困ったものですな、彼らが一致団結すれば世は平和になると思うのですが」

「一致団結していれば、帝や楠木殿はどうなっていたかな」

「負けていたでしょうなあ」

正成は素直に認めた。力はないが、曇りのない笑みを浮かべている。

「そういえば、大塔宮様とお話になられたとか」

「耳が早いですな」

「恩賞方でも、足利殿と大塔宮様のことは噂になることが多いのです。……それで、どのような印象を持ちましたか」

「あまり好きにはなれぬ御方ですな」

普通に考えれば、正成は帝や大塔宮寄りの人間だ。彼に対しこのようなことを言うのは不用心なのだろう。しかし、正成を前にするところからも素直になってしまいうらしい。

「某は嫌いではありません」

正成は、高氏を非難するわけでもなく、穏やかに言った。

「しかし、理想家であり過ぎるところが難点でしょう。また、若さゆえの危うさもある」

直情型の人間だということは、高氏にも分かる。高氏への態度だけでなく、鎌倉相手に勇猛果敢な戦ぶりをしたことから、大塔宮の気性は察することが出来る。親王であると同時に、武士のような人間でもある。そういうところは、父の後醍醐と似ていた。

「悪い人間でないことは分かります。ただ、武士である以上、あの御方と肩は並べられそうにもない」

「でしような」

正成の声には、かすかに無念の色が見え隠れしていた。

ようやく言うべきか、八月五日、高氏に恩賞が与えられることになった。これまでの交渉が実を結んだのか、悪いものではない。

高氏は元々足利氏の所領だった上総の守護職を引き続き認められ、他、武蔵国の守護職と二十数カ所以上の地頭職を得た。それとは別に、直義にも十数カ所の地頭職が与えられた。

また、それだけではなく、新たな名も与えられた。

「高氏の『高』は相模入道から拝領したものであるそうだな。……
それでは聞こえが悪かろう」

そう言っ、後醍醐は自らの名を持ち出した。尊治の『尊』である。

「これをそなたに授けよう。今後は尊氏と名乗るが良い」

後醍醐にそう言われて、尊氏は平伏した。胸の奥から、何か熱いものがこみ上げてくる。

実益がないということは分かっている。それでも、帝から一字拝領されたことに、尊氏は心を打ち震わせていた。

しかし、その感動も内裏を離れば薄れてしまう。帝、もしくは内裏という場所には、人間を変えさせる何事かがあるのかもしれない。

「武蔵国を得られたことは大きいですな」

館に戻った尊氏を出迎えた直義は、珍しく声を弾ませていた。気持ちは尊氏とて同じである。

武蔵を手に入れたということは、正式に鎌倉の支配権を得たも同然だった。第二の北条と疑われる恐れはあったが、それでも鎌倉を得られたことは嬉しかった。武士にとっては、京と同じくらい特別な地なのである。

だが、安心は出来ない。この武蔵守護は後醍醐によって与えられたものであつて、状況次第では召し上げられる危険性もある。私有地であつて私有地でない、そういう微妙さがどの土地にもあつた。

「鎌倉にいる細川に伝令を出すのだ。よく統治せよと。それから、千寿王はそのまま鎌倉に待機させておく」

「こちらには呼ばれませぬのか？」

「顔は見たいが、千寿王にはわしの代理として鎌倉の統治者になつてもらわねばならぬ。わしはここを離れられぬからな」

中央の情勢は絶え間なく変化していく。鎌倉にいては、その流れを追い切れない。だから、尊氏はここに留まる必要があつた。

「今は力を蓄えることだ。そうしなければ、いずれは負ける」
「負ける？」

「大塔宮様だ。あの御方とは、いずれどこかでぶつかるとであろう。そのときに吞まれぬよう、我らは力を持つておく必要がある」

第十八章「陸奥守」

政治とは人を見ることだ、と言っていたのは父だった。近頃、多くの人間と接することで、尊氏はその言葉を思い出すようになっていた。

知っていた顔もあれば、知らなかった顔もある。特に顔を合わせるの、知らない顔の方が多かった。

「それは当然であろう」

道誉がもつともらしく頷いた。

今、尊氏は道誉の招きを受けて京極の屋敷にやって来ていた。世間話がてら、近頃の情勢を語り合っていたところである。しかし、道誉はあまり興味が無いのか、さほど乗ってこない。

「今の帝は分かりやすい御方よ。なるほど、足利殿らにも武蔵をくださるなど一見気前よさそうではある。だが京に近い丹波や若狹を側近ですっかり固めている」

「播磨も赤松円心には与えられなかったな。大塔宮からの信頼も厚く、此度の戦における働きは軽くない。わしはてつきり、彼かその一族に播磨が与えられると思ったのだが」

「赤松殿は出自が軽い」

「しかし、似たような境遇の名和殿は伯耆を与えられている」

「好き嫌いの問題だろう。名和殿は帝を直接支えただけに、結びつきが強い。赤松何某の働きなど、帝はさして気にかけてもおられない」

わざとらしく言って、道誉は腰を上げた。政治の話はこれで終わりということらしい。確かに、世間話と言って政治の動向ばかり語っていたのでは面白くない。

「それより、ちょっとした趣向がある。足利殿を招くにあたって、わしが手を尽くして用意した」

「ほう、それはありがたい。しかし何を？」

道誉はそこで含み笑いを浮かべ、がらりと障子を開けた。その先、庭先には、七、八名の男女が控えていた。楽器がちらほらと見える。

「田楽か？」

「いや、猿楽というものよ」

「猿楽。聞いたことはあるが」

「目にしたことはないか。ま、田楽に比べるとさほど知られてはおらんからな」

田楽は一般的に、高い身分の者たちの娯楽として浸透していた。鎌倉の北条高時も田楽にのめり込んでいた者の一人である。

一方、猿楽は田楽ほど浸透していたわけではない。田楽も猿楽も民衆の間から生じた芸能であると推察されるが、平安時代に朝廷の庇護を受けた田楽と、切り離されたままだった猿楽とは、扱いに差が出てくる。

尊氏もまた、田楽は目にしたことがあっても、猿楽を目にしたことはなかった。

道誉の合図で、頭を下げていた者たちが太鼓を叩き始めた。陽気な音だ。大きいものもあれば小さいものもある。様々な音が尊氏の耳に入り込んできた。

それに合わせて舞が始まる。田楽の舞と比べて、動きがより激しい。見ている側にまで、踊り手の活力が流れ込んでくるようだった。しかし、どこかしらに違和感があった。

それは、底抜けの明るさを感じさせるこの舞と、今の京都情勢との間にあるものなのだろう。

「政のことが頭から離れぬと見える」

道誉が呆れた顔を向けてきた。彼は思考の切り替えが出来る性質らしく、こういうときは余計なことを一切考えず興に乗る。

尊氏は違う。常にいくつものことを頭の中で考えてしまう。しかも、思い浮かぶのは灰色を感じさせる薄暗いものばかりだ。

「足利殿は矛盾を抱えておるようじゃ」

「矛盾？」

「左様」

道誉はこちらを見ていない。一座の者たちに笑顔向け、時折手を叩いたりしながら、尊氏と話している。

「帝に従順であろうとしつつも不満を抱き、その不満を別の誰かに向けようとしている。それは結果として悪くないかもしれないが、自覚はあるかな」

「ある」

尊氏は苦い顔つきで答えた。道誉が言ったのは大塔宮のことだろう。

「なれば良し。この話はこれで終わりにいたそう。そら、ここからが盛り上がるころよ」

道誉は夢中の顔つきで猿楽を楽しんでいた。自分もそんな風に出ればいい、と尊氏はため息をついた。

尊氏がその若者と出会ったのは、蟬の鳴き声がよく聞こえるようになった、陽射しの強い夏の日のことだった。道誉の屋敷に行ってから、三、四日ほど後のことである。

足利の支流にあたる斯波氏が留まっている屋敷から戻ると、家臣が客人の来訪を伝えてきた。

一人は法体で、それなりの風格を漂わせている公家風の男だという。おそらくは宗玄（北畠親房）であろう。そしてもう一人、まだ年若い青年が一緒だという。

……さては噂に聞く御息かな。

宗玄に才気あふれる子がいるという噂を、尊氏は以前から何度か耳にしていた。そしてその青年が、尊氏の武蔵守就任と同時期、陸奥守に任じられたことも聞いている。

尊氏は緊張しながら客間へと向かった。そう多く顔を合わせたわけではないが、宗玄の人間性はなんとなく掴めている。単なる世間話をしに来るような男ではない。

客間の近くまで来ると、少しずつ足音を小さくしていく。そうし

て厳かな雰囲気を作って部屋に入る。

中にいたのは、案の定宗玄だった。

「おお、宗玄様でしたか。お待たせして申し訳ない」

「突然伺ったのはこちらの方。貴殿が詫びることはない」

「そう仰っていただけと助かります。して、此度はいかなる御用向きで」

言いながら、尊氏は宗玄の後ろに控えている青年に視線を向けた。宗玄もそれを察したのか、すぐにその青年が、自分の子である北畠陸奥守顕家だ、と口にした。

「此度は、そなたと陸奥守を引き合わせておこうと思つてな」

「はあ」

それは方便だ、と尊氏は思っていた。なるほど、陸奥守ともなれば、武蔵、上総の守護職を得た尊氏とは領地も近い。互いに顔を合わせておいた方が有益かもしれない。しかし、それは微々たるものだ。それにどのみち、顔ぐらいはどこかで合わせることになっていただろう。

「六波羅攻めにおける足利殿の武勇は聞き及んでおります」

それまで涼やかな表情で沈黙していた顕家が、父の目配せに応じて凜とした声を上げた。

……なるほど、利発そうな若者だ。

世辞であることに違いはないが、多くの公家が持つ嫌な感じがしない。大抵の公家は戦における武名にさしたる価値を見出しておらず、それを称えるにしても、どこか物語の人物を褒めているようなところがある。しかし顕家にはそういったことがない。

「陸奥守殿は帝に近侍しておられたとか。先の戦にも？」

「軽い小競り合いを体験したに過ぎませぬ。あとは大塔宮様や楠木などから多少の話を聞いただけ」

「いや、それでも……」

どこか武士みたいだ、と言いかけて尊氏は口をつぐんだ。顕家は朝廷に仕える公家であって武士ではない。武士のようだと評しても、

相手は不快に思う可能性がある。

それに& a m p; # 8 2 1 2; & a m p; # 8 2 1 2; 大塔宮のことを思い出した。

あのはち切れんばかりの情熱を持った宮とこの青年が、どこか重なっ て見えた気がした。それで、口が止まった。

「& a m p; # 8 2 1 2; & a m p; # 8 2 1 2; わしと陸奥守は、義良親王を奉じて秋には陸奥に向かう」

宗玄は、不意にそんなことを言い出した。

「陸奥、ですか？」

一瞬尊氏にはその意味が分からなかった。だが、数秒もしないうちに背筋がぞくりと震えた。

「……親王を奉じて現地を統治されると？」

「そうだ。そうすることによって、帝の御威光も広く知れることになるう」

「しかしそれは& a m p; # 8 2 1 2; & a m p; # 8 2 1 2; まるで鎌倉のようすな」

鎌倉幕府も、創成期は別として、親王を頂点とする統治組織だった。相模守を任じられた北条氏が代々親王を奉じて武士を統括する。宗玄たちがこれから行うのは、それと同じことではないか。

「統治する者が違う。北条は朝廷を軽んじた賊徒。親王を蔑ろにし、形だけの象徴にしていまいおった」

「我らにそのようなつもりはありません。あくまで親王陛下に仕える者として、務めを果たすのみ」

「しかし、そのような構想をよくぞ帝が御承知なされましたな」

宗玄の構想は現実的なものだと思うが、天皇個人が権力の頂点に立つべきと考える後醍醐からすれば、あまり喜ばしいものではないだろう。陸奥に関する権限は息子の義良親王に任せることになるし、考え方によっては鎌倉政権に似た制度を認めることになる。

「さる御方の協力があったことで、どうにか聞き入れられた」

「さる御方……？」

宗玄が協力を頼むとなれば、彼よりも帝に近い人物であろう。となれば、思いつくのは大塔宮あたりか。

「しかし、なぜそのようなことを私に？」

「特別な理由があつてのことではない。ただ、今の天下を鎮めるにはこうした方法がもっとも良いと考える者が、宮中にもいるということだ」

「……」

宗玄の構想とは何か、ということを考えてとき、尊氏の脳裏に浮かんだのは、今の塔宮を取り巻く状況だった。

塔宮は後醍醐の天皇独裁制に難色を示しつつも、鎌倉政権のよなものが復活することを危険視している。しかし、塔宮自身、紀伊などの武士を大量に抱え込んで現地を統括する立場にある。言うなれば、親王自身が権力を得た小さな幕府のようなものだ。

つまり、塔宮は鎌倉のような制度は認めているものの、それを統治する人間が北条氏のような者であつてはならない、と考えているのだろう。ゆえに、信頼出来る北畠父子を”北条役”に据えた今度の計画に協力したのだろう。それどころか、この案が塔宮の頭から出たものという可能性もある。

塔宮や宗玄が理想とする世とは、各地にこうした小幕府と言ふべきものを作り、それを親王を通して朝廷の支配下に置く、というもののだろう。

……わしにもそうせよ、と暗に勧めているのか？

尊氏は宗玄の目を見た。しかしそこからは、何事も読み取ることが出来なかった。

第十九章「暗闘」

九月初頭、尊氏は足利氏の主だった者たちを集めて合議を開いた。今後、足利氏がどう動いていくのか。それを決める重要な場であるため、重鎮ばかりが集まっている。

議題はあらかじめ知らせてある。要するに、足利も北畠に倣い、親王を奉じて鎌倉に向かうべきかどうか、という問題である。

「私は反対にございます」

口火を切ったのは斯波高経だった。斯波氏は吉良氏と並び、足利氏の支流の中では格式が高い。いつ頃までか正確なところは不明だが、鎌倉時代には「足利」を公称することが許されていた。それだけに、こういう一族同士での合議のときも遠慮がない。

「今、我らは大塔宮に睨まれていると専らの評判。そのようなときに鎌倉政権の真似事をすれば、大塔宮、ひいてはその背後にある朝廷への印象も悪くなります」

「では、どのようにすべきか」

「私が伺ったところによれば、我らを敵視しているのは大塔宮だけであって、帝はまた別の考えをお持ちとか。なれば、まずは大塔宮を孤立させるべきでしょう」

「私も斯波殿と同意見です」

次に口を開いたのは畠山国清だった。

「そもそも、此度の北畠親子の陸奥下向は大塔宮が発案したと聞いております。だとすれば、これは我らを貶めるための罠。我らがこれに乗じれば『足利に野心あり』として、責められる恐れがあります」

「確かに、此度の件は大塔宮様の発案と聞いている。間違いないか、左馬頭」

尊氏も、こういう場では直義のことを幼名で呼んだりはしない。直義は頷いて、「相違ありません」と言った。内裏のことは直義

の方が何かと詳しい。宗玄との会見の後、尊氏は直義に頼んでそれとなく今回の件の裏を探ってもらっていたのである。

「一つ、伺ってもよろしいでしょうか」

控え目に口を開いたのは細川顕氏だった。現在鎌倉で千寿王の補佐をし、実質的に現地をまとめている細川三兄弟の従兄弟にあたる。

「構わぬ。申せ」

「近頃、大塔宮様は疎んじられていると耳にしました」

「……大塔宮様が朝廷で孤立している、という話か」

その話なら尊氏も聞いている。大塔宮と後醍醐の間にある政治方針の相違が、問題を複雑にしている。初めの頃は尊氏も、二人が異なる政治目的を持っているとは思っていなかった。近頃になって、それが浮き彫りになってきた感がある。

どちらも朝廷を中心とした世の中を作ろうとしている。ただ、後醍醐は天皇による独裁体制を、大塔宮は第二の鎌倉政権が誕生しないようにすることを目標としている。

おそらく大塔宮は、鎌倉政権との戦いで多くの人物を見、天皇独裁制が到底実現しえないものだと思いついたに違いない。それを推し進めることで民衆が不満を抱き、そのことで第二の鎌倉が出現すれば、今度こそ朝廷の威信は地に落ちるであろう。大塔宮がまことに危惧しているのはその点にある。

後醍醐にはそういった息子の心中が分からない。あるいは、分かったとしても見て見ぬふりをしている。私欲を得たいがために独裁制を推し進めているのであれば後醍醐の心も揺れるだろうが、こちらはこちらで、そうすることが国のためになると信じている。だからこそ、二人はどちらも譲歩できない。

そして後醍醐の周囲には、独裁制が実現した際に自分の立場を良くしたいと考えている者たちが多い。そういう者たちはこぞって後醍醐に取り入ろうとし、邪魔な大塔宮を貶めようとする。

「この話が本当であれば、大塔宮様のことを念頭に置く必要はないかと。……むしろ親王を奉じるのであれば、早くに実行した方がよ

ろしいかと」

顕氏は慎重に言葉を重ねていった。つまり、大塔宮は既に朝廷で孤立しているから気にする必要などない、ということだ。

「大塔宮が既に朝廷内での発言力を失っているのであれば、私も異論はない。しかし、親王と言ってもどなたを奉じて下向すれば良い」
斯波高経が顕氏に問う。しかし、その答えまでは考えていなかったのか、顕氏は汗を拭きながら曖昧に頭を振った。

「阿野廉子」

と、そこで尊氏の側に控えていた師直が口を開いた。一同の不審げな目が師直に注がれる。尊氏の側近である彼に対し、支流の家柄の者たちはあまり良い感情を持っていない。

「良い女子だそうですね」

「いきなり何を言い出す」

高経は不快そうな表情を隠さなかった。一族の合議に執事風情が口を挟むのは、立場上慎むべきことであろう。

「阿野廉子と言えば、帝の寵愛を一身に受けていると評判。北畠殿が陸奥にお連れする義良親王も、彼女の子だ」

直義が補足すると、高経をはじめとする一同も、師直が何を言うおとうとしているか察したらしい。

「廉子には他に皇子はいるのか？」

「恒良親王、成良親王、そして義良親王です。義良親王は北畠殿と共に陸奥へ下向され、恒良親王は近々皇太子に指名されるとの噂があります」

尊氏の問いに直義が答える。

「となれば、成良親王か。帝は良しとされるかな」

「大丈夫だとは思いますが、阿野廉子を通して頼み込めば確実かと」
師直の言葉の裏には、廉子が今の京でどれほどの力を持っているか、という背景がある。彼女は後醍醐が鎌倉と戦っていたときも側にあり、帰京してからは皇后の如き扱いを受けているという。公卿たちの中にも、彼女に取り入ろうとする者たちは大勢いた。

大塔宮が後醍醐から煙たがられるようになったのも、廉子の存在が関わっていると見ていい。彼女は自分の子らの立場を良くしたい。皇子であり鎌倉戦において武功があった大塔宮は、邪魔者以外の何者でもなかった。

「そういう、裏であれこれとやるような真似は好かん」

師直の提案に苦言を呈したのは、支流の一角、桃井氏の直常だった。剛直な武人で、謀略などは好まない。

「好む好まぬで決められることはありませんまい」

「しかし、そこまでして廉子に取り入らねばならぬのか」

「あくまで当座のこと。帝への口利き役として見れば良いだけでござろう」

先々のことまでは分からない。ただ、今利用できるものがあれば利用すべきだと、師直はそう言いたいのだろう。

直常は承服しかねるといった表情を浮かべていた。それを見て尊氏は大きく咳払いをする。

「皆の意見は分かった」

尊氏は鷹揚に頷いて言った。

「最後に左馬頭の意見を聞きたい」

「このまま事態を座視しては、いずれ帝により潰されるのは明白。ことに、陸奥に北畠様が向かわれるとなれば、関東を拠点とする我らは背後を脅かされるということに他なりません」

「……帝が我らを潰す？」

直義の言葉に尊氏は引っかけかりを抱いた。確かに立場上、良好な関係とは言い難い。しかし、そこまでされる覚えはない。

「統治する者にとっても厄介なのは、己よりも高い声望を有する功臣です。漢の高祖が韓信を滅ぼしたように、帝が兄上を滅ぼす可能性は高い。もっと危機感を持って動かねばなりません」

「ふむ」

狡兎死して良狗煮らる、という故事がある。漢の高祖・劉邦が天下を平定するにあたり、軍事面で多大な功績を見せた功臣が韓信で

ある。しかし天下が定まった後、軍事能力が高いうえに声望高い韓信は劉邦にとって脅威以外の何者でもなくなっていた。結局韓信は漢によって滅ぼされてしまう。この劉邦と韓信の関係は、そのまま後醍醐と尊氏に当てはめることができる。

「……まあ危機感を持って動かねばならぬことは分かった。して、具体的には？」

「成良親王を奉じて鎌倉に下向する。それに関しては皆々様の意見の通りでよろしいかと。一つ付け加えるならば、私も親王とともに鎌倉へ向かうべきでしょう」

「お前がか？」

胸中に心細さがよぎる。実弟のまさかの申し出に、尊氏は表情を曇らせた。

「鎌倉は戦略・政略上の要地。親王を奉じてそこに向かうのであれば、私か兄上でなければなりません」

「ならば、わしが。いや、共に行けばいいのではないか？ 宗玄様

の御子息を連れて陸奥に向かうと仰られていたが」

「兄上と北畠殿では立場が違います。我ら兄弟が揃って、あるいは兄上が単身で鎌倉へ向かえば、京で『足利謀反』の噂を広められる恐れがあります」

「お前を向かわせれば角は立たない？」

「左様。& a m p; # 8 2 1 2 ; & a m p; # 8 2 1 2 ; そして鎌倉に向かった後は、そこで鎌倉政権を復興させます」

直義の言葉に一同は色めき立った。その言葉は、取りようによっては朝廷への反逆とも受け取れる。

「……次郎。わしにそのようなつもりは& a m p; # 8 2 1 2 ; & a m p; # 8 2 1 2 ; 」

「第二の北条になる、ということではありませぬ。ただ鎌倉の如き体制の組織を作ることです」

「しかし、そこまですると大塔宮様のことを抜きにしても、朝廷の我らに対する印象悪化を招きませぬか？」

斯波高経が怪訝そうに言った。他の者たちも同様の表情を浮かべている。

「いや、兄上が京におられる限り言い逃れはどうでも出来ましよう。それに、関東は朝廷の理屈よりも武士の理屈で動く地。どのみち鎌倉政権の如き方針を採らねば、満足に統治など出来ますまい」

「それを、京に残るわしが帝に訴え続けなければならぬのか」

悪い言い方をしてしまえば、尊氏は大将自ら人質として残り、足利氏の忠実であることを周囲に訴えていかねばならない立場になる、ということだ。確かに良い案ではあるが、当事者として考えると気が重い。

「しばしの辛抱です。やがては帝も、今のやり方では世を治められぬと理解されるでしょう。いかにして世を統治するか、その手本を我らが示すと考えれば良いのです」

強気な直義の発言に、一同の中から感嘆の声が上がった。こうなると、この案を棄却することなど出来そうにもない。

「……分かった。左馬頭の案を入れよう。皆もそれで良いな？」

一同は一も二もなく頭を下げた。自分の立場にやや滑稽なものを感じながらも、尊氏はその場を後にした。

妙な胸騒ぎがして、尊氏は馬を止めた。

「どうなされましたか？」

側に控えていた師直が、尊氏の様子に気づいて尋ねてきた。尊氏はそれに答えず、細かく周囲に目を走らせた。

「杞憂かもしれん。しかし、誰かにつけられている気がする」

それはもしかすると、うしろめたさから来る錯覚なのかもしれない。尊氏は師直を連れて、阿野廉子の元に出向いていたのである。公式の面談ではなく、秘密裏に行われたものだ。その会談の中で廉子は、尊氏が提示したいくつかの条件を呑んだ。まず密約は成功したと見ていい。それゆえ、後ろ髪を引かれる思いがする。

どうも背筋が寒い。

そう思ったとき、尊氏らの前に覆面を身につけた五、六人の男たちが現れた。誰もがみすばらしい風体をしている。おそらく浮浪人の類だろう。近頃は京にもこういう手合いが出ると聞いている。

「殿！」

師直が後ろを指し示した。そちらにも同じような者たちが現れ、こちらの逃げ道を塞いでいる。

「貴様ら、我らが何者であるか知っているのか」

師直得意の怒声にも男たちは動じなかった。得物を手に、じりじりとこちらににじり寄ってくる。

「よせ太郎。奴ら、わしの首を取りに来たと見える」

「なれば殿、某が道を開きます。その後に続いてください」

師直はそう言うのと、迷うことなく敵の真っ只中に突っ込んでいった。尊氏も後に続く形で馬を走らせる。

既に周囲は暗闇が覆っている。相手もどちらが尊氏か判断しかねたらしい。ばらばらになって斬り込んできた。

「おおおっ！」

異様なまでの大声を上げながら、師直は敵の槍を弾いた。さらに師直に斬りかかろうとする敵を見て、尊氏はそちらに馬を突っ込ませた。逃げる間もなく、敵は馬の下敷きになる。

「野盗じゃあっ！ 野盗が出たぞおっ！」

師直の叫びが市中に響き渡る。それを聞きつけて、正規の武装集団と思われる者たちが集まって来た。その頃には、尊氏と師直は逃げきって闇の中に紛れ込んでいる。

「怪我はないか、太郎」

「御心配には及びませぬ。殿こそ、大丈夫ですか」

「わしも無事だ。……しかし、あの者たちは何者だったのか」

政治的な意味合いで自分が並々ならぬ状況にいるということは理解していた。しかし、このような形で狙われるなど、想像すらしていなかった。

「これだから殿は甘い。御舎弟からも散々注意されているではありません

ませぬか」

そう言われては反論出来ない。

「とにかく屋敷へ戻る」

「今後は殿の警備を厳重にせねばなりません」

師直の言葉に適当に頷きながら、尊氏は馬を走らせた。

……裏にいたのは大塔宮様か。

屋敷に着くまで、尊氏の脳裏からその考えが消えることはなかった。

第二十章「建武」

あれから、尊氏は再三襲われた。その都度警備の人数を増やしたが、刺客は隙をついて迫って来た。警備の一人が刃を手に躍りかかって来たこともある。

眠れぬ日が続く尊氏の元に、事の真相を探っていた高師直が顔を見せた。

「おそらく大塔宮が黒幕でありましょうな」

部屋に入るなり、どしりと腰を据えて師直は切り出した。

「宮自身は強く否定されておられるようですが、周囲の人間は皆信じておりませぬ。まあ、無関係ということはないでしょうな」

「だろうな。帝は新政の建て直しにかかりきり、それ以外の都人がこのような強硬策に出るとも考えにくい。かと言って、北条の残党がここまで入り込んでいるということもありえない」

「左様にございます。要するに、大塔宮以外、殿をこのように襲う理由を持った人間がいけないということです」

「証拠は出たのか？」

さして期待はしていないが、尊氏は一応尋ねてみた。が、師直は頭を振る。

「あったとしても、宮に同情的な何者かが消しておりましょう。捕えられた者どもも口を割る様子はないと言います」

「宮は好かれておるな」

「それ以上に殿が好かれておるのです。ゆえに嫉妬しておられるのですよ」

若干皮肉げな表情を浮かべて、師直は鼻を鳴らした。

「要するに宮は殿に集まっている武士の人気を自分の方に寄せたいのです。それが叶いそうにもなく、むしろ朝廷内での人気すら落ちる始末。焦って強硬策に出るのも無理からぬことでしょうなあ」

「師直、適当な人間を内裏にやって、此度の件を訴えておけ」

尊氏は短く言い捨てた。師直は一瞬きよとした表情を浮かべたが、すぐに得心して出て行った。

近頃は神経質になっていいのか、何かあると苛々する。大塔宮の窮状を面白そうに語る師直に、尊氏の眉は震えていた。
どうかしている、と自分でも思う。

大塔宮は尊氏にとって政敵だ。その窮状は歓迎こそすれ、怒りに震える必要などない。

そのはずなのだが、

「哀れなものだ」

呟いてから、尊氏は自分の頭をぴしゃりと叩いた。

残暑が厳しい季節だ。手のひらには、べったりと汗がついていた。
「本当に、どうかしている」

それから日々が過ぎて行った。

直義は京に残る尊氏を案じつつも、親王を連れて鎌倉に下向した。同じように親王を連れて陸奥へ向かった宗玄こと北畠親房、顕家ら親子よりも四ヶ月程度後になっての出立である。

「兄上、大塔宮にはお氣をつけください」

出立の前日、直義は憂い漂う表情で何度もそう注意した。

既に大塔宮は窮鼠同然となっている。尊氏が師直に不機嫌な面を見せたあの初秋の日から程なく、大塔宮は「武家からの信薄し」として征夷大將軍を解任させられていたのである。

そうになると、朝廷内の事情に疎い下級武士たちも、大塔宮の立場が悪化していることを察し始める。先行き危うい大将になどついていけぬと、大塔宮の元から離れる者も増え始めていた。

「この状況で大塔宮がおとなしくなればよいのですが、あの御方にそれは期待できないでしょう。用心に用心を重ね、相手が隙を見せた瞬間に反撃していかねばなりませんまい」

どんなに追い詰められていても、大塔宮は今をときめく後醍醐天皇の皇子だ。先の乱での功績もある。無理に攻め立てては、こちら

が足をすくわれかねない。

「嫌なものじゃな、次郎。わしは釣りは得意ではない。狩りの方が向いておる」

「そこを辛抱していただかねばなりませぬ」

「分かっている。わしの行動はわし一人のものとは取られぬ。足利全体の総意になってしまふ。慎重に動かねばならぬことは百も承知よ」

それでも、こうして弟と向き合っているときぐらひは愚痴を言わせて欲しかった。近頃は神経質になっているし、いつも一緒に行動していた直義が遠い鎌倉へ行ってしまうとなれば、相応の心細さも生じる。

そんな尊氏を、直義は危ぶむような目でじっと見ていた。が、翌日には予定通り出発した。

鎌倉に行ってから、兄弟の間では手紙のやり取りが絶えなかった。それによれば、直義は北条政権と似たような方式で彼の地を治めているらしい。まさしく、以前直義が言っていた”小さな鎌倉政権”だ。

鎌倉から北、陸奥にいる北畠親子も似たようなものだった。表向きは頭家が責任者として統治を行っているが、そこには宗玄の意向が絡んでいるに違いない。彼らは国司と名乗り、庶務の発給文書を国宣とし、自らが朝廷の役人であることを明確にしていた。一方の直義は、かつての北条高時や赤橋守時と同様執権と呼ばれ、発給文書も鎌倉式の御教書を用いた。これは完全な”幕府方式”であり、この一事だけでも大塔宮、そして後醍醐は顔をしかめたはずである。が、両者の違いは形式的なものでしかない。どちらも朝廷の臣として統治を行っているが、やり方は北条政権の方式を採用している。……このままこれが全国に広がればよいのではないか。

鎌倉や陸奥の動向を耳にするにつれて、尊氏はそんなことを考えるようになっていた。

全ての中心には天皇がいる。その下に幾人かの有力者が集まり、

各地を好きなやり方で統治するのだ。統治者同士で問題が起きたときは朝廷が裁定役を買って出ればいい。そうすれば朝廷の威信も保たれるし、朝廷の干渉を嫌う各地の武士も満足だろう。

京にいる天皇がこの国すべてを治めるのは難しいし、天皇権力を否定すれば、武士を抑える者が消えて皆が好き勝手に争うようになるだろう。戦国乱世の到来である。

……もしかしたら、宗玄様はそのような世の中にせぬようにと、懸命に動いておられるのではないか。

後醍醐に媚びへつらうばかりの廷臣とは違い、宗玄からは、何か確固たる意志が見て取れる。それはぎらついていて時に恐ろしくも映るが、決して醜いだけのものではなかった。

それは後醍醐や大塔宮も同じだ。皆、己の理想を持ち、そのためならどのようなことでもする、という強さを持ち合わせている。

ただ、今はそれが噛み合っていない。どのような世を目指すのか、という構想が皆ばらばらなのだ。

……やはり乱は避けられぬかな。

今のところ、宗玄は後醍醐のやり方に難色を示しつつも、大塔宮と連携して独自の道を歩んでいる。大塔宮はそうした陸奥からの支援で、どうにか首を繋いでいる状態だ。

後醍醐もそうした動きは承知している。今は好きにやらせているが、己の力がより増した暁には、どう出るか分からない。

彼らに共通しているのは、尊氏への警戒心だ。せっかく起こした新政権、また元通り武士の世にはしたくないと思うのは当然だ。

尊氏にそのつもりがあろうとなかろうと、この新政権に不服を唱える武士たちは、棟梁である彼に期待をする。その期待こそが、乱の原因となる。

「わしがおとなしく朝廷に従うと言っても、向こうはそれを信じず、武士たちからは失望される。板挟みじゃ。そうなれば武士の棟梁は新田の小太郎にでもなるのかな。意気盛んな新田軍と戦えば、我らは滅亡する他ないか」

「でしよな」

師直はにべもなく言つた。

「そもそも、殿はまだ朝廷に未練がおりなのですか？」

「ある、ような気もする。わしは武士だが、無用の戦をしようとは思わぬ。乱世が来ないに越したことはない」

「殿が朝廷に属していれば乱は起きぬ、と仰るのなら、それは違うと申させていただきましょう」

「分かっておるわ。どのみち、いつかは武士どもの不満が爆発する。この新政権は武士の力なくしては出来なかった。なのに、朝廷はこれを天意としている。武士の力などいらなかった、とでも言いたげよ。自らの働きを無視されては、武士として黙ってはおられまい」

「そのとき、**殿はどちらを取ります**」

武士か朝廷か。

尊氏は熟考した。いい加減な答えで済ませてはいけない気がした。やがて、ためらいがちに答えを口にした。

「& amp; #8212; & amp; #8212; & amp; #8212; & amp; #8212; & amp; #8212;
212; & amp; #8212; 武士、だな」

それしか足利が生き残る道はなさそうだった。今の状況を省みても、足利が朝廷に歓迎されていないことは明らかだった。態度に出すだけならともかく、今は実際に命を狙われているのである。それは大塔宮の意志であつて朝廷の総意ではない。ただ、尊氏を助けようという者がほとんどいないことも確かだった。

朝廷は力を持ち過ぎた武士を嫌う。その筆頭が足利なのだ。おとなしく臣従すると言う獅子を側においても、普通の人間には安心できまい。隙を見て殺さねば安心出来ない。それと同じことだ。

ならば、獅子は多くの獅子を従えて己の道を行けばいい。

「もつとも、それは内々のことだ。動く機会を見誤れば我らは破滅ぞ」

「承知しております」

分別顔で師直が頷く。ただ、その顔はわずかに紅潮していた。尊

氏が朝廷ではなく武士を選んだことが嬉しかったらしい。

ただ、次の一言でその喜びは霧散した。

「朝廷は北条のようなものと思えばよい。時が来るまでは上手く溶け込んでおいた方がよい。ただ、帝は別だ」

「別、ですか」

「北条も帝と戦をしたことはあるが、殺しはせず流罪に処しただけで終わった。なるほど、朝廷を離れ武士の世を作るとしても、この国に帝は必要だ。もっとも、政務は我々に任せていただきたいところだが」

「今の帝で、それは難しいでしょう」

天皇による独裁体制を渴望し、幾度もの陰謀の果てに北条氏を滅ぼした人だ。お飾りになることなど許容しないだろう。

それが尊氏にとって悩みの種でもあった。個人的には、あの帝は嫌いではない。時には醜くも映る強さに、憧れを感じるときもある。英雄とはあのような人のことだ、とさえ思う。

「どうせ飾りものにするなら、木像でも彫っておけばよろしいではないですか。仏と同じように」

「帝は人ぞ」

「また隠岐にでも行ってもらえばよいと思いますがね」

帝に対し尻込みする尊氏が、師直には齒痒くてならないらしい。

「御免」と不貞腐れたように頭を下げると、足早に出て行ってしまった。

尊氏も、帝に対しては情が残っていたが、命まで狙われた以上、大塔宮に対しては強気に出るようになった。公家衆は相手にしていない。面倒なだけで、意味がなかった。

まずは都の警察機構とも言える検非違使を自派に取り込もうとした。大塔宮が尊氏を暗殺しようとしているのは周知の事実だが、証拠がない。証拠がなければ動けぬという帝の言葉を受けて、尊氏は何が何でも尻尾を掴んでやるという気になっていた。

また、阿野廉子の元にも頻繁に使者を送った。大塔宮を邪魔だと考えている廉子は、この件に関してだけは利用できる。向こうも同じような腹積もりでこちらと手を組み、目に見えぬ形で大塔宮を包囲しつつあった。

年が明けて元弘四年（一三三四年）になると、廉子の産んだ親王である恒良親王が皇太子に選ばれた。彼は北畠親王と共に陸奥へ向かった義良親王、直義と共に鎌倉へ向かった成良親王の兄である。新政後の廉子の立場からすれば、恒良親王が皇太子に選ばれることは、当然のことといえる。

これで康子の子は、陸奥、関東、そして京において重要な役職を占めるに至った。後醍醐にとっても、東日本の要所に自らの皇子を配置することは、権力増加に繋がる。新政を安定化させるための第一歩と言えた。もつとも、親王たちがいずれも飾りものでしかないということ、多くの人間は察していた。

また、それからほどなく元号が改められた。建武という。王権の篡奪者である王莽を打ち倒し、後漢を建国した光武帝が最初に用いた元号である。

第二十一章「夢の人」

建武元年の時は、緩やかに流れていた。

激動の觀があつた前年に比べると、尊氏の周囲も落ち着きつつある。しかし、見えない形で大塔宮の包囲は完成しつつあつた。宮にとつて、この年は地獄になるだろう、と尊氏は憂鬱な息を吐いた。

直義からの手紙は、月に二度か三度ほど送られてくる。鎌倉の統治はあまり上手くいっていないようだった。直義の能力を考えれば、上手くはすなうだ。

落ち着きつつあるのは、朝廷や自分のような、人の上に立つ者たちの周囲だけなのかもしれない。時折遠乗りに出かけて民の姿を目にすることがある。戦がない分窮迫はしていないようだが、何か落ち着いていないように見えた。

「欲が噴き出してきたかな」

尊氏はぼつりと呟いた。隣にるのは正成である。

「欲、とは？」

「これまでは、すべて北条が独占していた。今、その北条はなく、ただその土地や利権だけが宙に浮いている。そして、皆がそれを欲している。武士や公家だけではなく、民の間でもそのような兆しが見えた」

「それは、勝者である朝廷のものでしょうか」

「朝廷にもいろいろある。例えば私は、北条との戦においては朝廷に属していた。しかし利権に関しては、明らかに朝廷と違う立場にある」

「帝は、すべてが己のものだと考えておられます。私権を主張する者ばかりの世上において、その意志は決して受け入れられないだろう、と思います」

「それでも、楠木殿は帝に忠節を尽くすつもりなのだろう」

「このような世上だからこそ、帝の意志は貴重なのです。すべてが

帝のもの、ということになれば、戦も起きたりしなくなるでしょう」
それがこの男の本質だ、と尊氏は最近になって分かって来た。田畑を耕し、妻子や一族郎党と共に、穏やかに暮らす。それを望んでいるからこそ、正成はやつれてきているのだろう。公家や武家だけならまだしも、庶民の間にも争いの風潮が波及している。それをこの男は実感し、誰よりも憂いているはずだ。

尊王の心はあるし、帝の意志も尊重している。忠誠心も篤い。しかし、それは盲目的なものではない。帝の理想が実現されるとき、自分の望むものを得られる。争いのない世。皆が皆、己の欲望のために争うのであれば、そこに帝という楔を打ち込む。それで、騒乱を鎮める。そういう考えがあるからこそ、忠誠心なのだろう。

もし尊氏が後醍醐天皇と本格的に争うことになれば、彼は決してこちらの味方にはなってくれないだろう。尊氏はあくまで武士だ。帝という楔を打ち込まれてはたまらない。残念なことだが、自分と正成の道は決して重なることはないのだ。

それでも、尊氏はこうして度々正成を招くようになった。近頃は、彼も朝廷に出仕することがあまりなくなっている。理由は分からない。ただ、尊氏の招きを拒んだことは一度もない。

「今の状態は、あと一年か二年続けば良い、というところでしょうか」

「今の状態とは？」

「大塔宮のことです」

正成の口調は穏やかそのものだった。これが宗玄や道誉なら、尊氏の心もざわついただろう。だが、今の尊氏は動揺などしていない。

「宿業としか、言い様がない。宮を除かなければ、わしに先はない」

「おそらく、宮も同じように思っておられるのでしょう。確かに、宿業ですな」

「わしは、一人の男としてならば、あの宮のことが嫌いではない。そのことに気づいたのは、ここしばらくのことだ」

誰に言っても、信じてはもらえないだろう。多くの人々にとって、

自分も、大塔宮も個人ではなく、ある種の象徴なのだ。

だが、正成ならば分かってくれる。自分と大塔宮の両方を、一人の人間として見てくれているのは、正成だけなのではないか。

「ずっと、この言葉を誰かに伝えようと思っていた。楠木殿ならば理解してくれる。近頃何度も呼びつけてしまったのは、そのためなのかもしれない」

「足利殿の言葉は、預からせて頂きます」

「預かるだけか」

「私に向けられたものではありませんので。必ず、聴くべき御方の元に届けます」

正成に話したのは正解だった。気づいたとき、尊氏は正成に頭を下げていた。身分の上下や立場の違いからすると、ありえないことだ。しかし、そうするべきだと思った。

「私は、正直なところ、足利殿の陣営に加わる誘いでもあるのかと思っております」

「誘いをかけたところで、楠木殿は頷かれないであろう」

「確かに。足利殿の進む道は、私のような小さき者には生きづらいものでしょうから」

「わしは足利の棟梁。引いては武士の棟梁だ。それ以外の生き方は出来ぬ」

「帝が足利の勢力を除こうとされるのであれば、抗うしかない。それは分かります。対抗するためには多くの武士を糾合せねばならない、ということも」

それでも、自分は帝を選ぶ。言外に、正成はそう言っていた。

「近いうちに、私は一度河内に帰ろうと思っています」

「そうか。楠木殿はそうした方が良く、わしも漠然と思っていた」「次に会うのは、いつになるか分かりません」

「そうか」

互いに、それ以上は何も言わなかった。

最後まで、正成の眼は澄んだままだった。彼の眼に、自分はどの

ように映っていたのだろうか。そんなことを考えた。

朝廷には際限なく訴訟問題が持ち込まれた。

所領問題は悪化の一途をたどっている。裁決が覆されることは日常茶飯事となり、納得せぬ者、あるいはこの混乱の中での横領を目標む者などが、記録所や雑訴決断所に毎日、雪崩のように駆け込んでいるという。

……欲望が収まらぬ。

という尊氏の呟きの原因は、これだった。

さすがに朝廷もこの事態を重く見たのか、様々な打開策を講じている。しかし一向に効き目はない。土地というものに対する認識の差のせいだ、と尊氏は思っている。

武士や庶民にとって、土地とは自分や一族郎党が生きていく上で不可欠なものだ。命と同等、あるいはそれ以上に大切なものなのである。

その土地の所有権を、今の新政権はいたずらに二転三転させている。特に鎌倉時代以降に土地を得た一族は不安であった。新政権は、鎌倉政権が認めた土地の所有権を否定するからである。そういう不安を抱えている者たちの数は決して少なくなかった。尊氏の元には、そういう者たちが直接尋ねに來たり、書状を送ってきたりする。

「費用が足りぬから土地を守れなかった、とあるな。馬鹿な話だと思わぬか、太郎」

「左様。仮に公家衆に賄賂を渡して土地を守れたとしても、いつまた失うか分かりませぬからな。そうになると、ずっと賄賂を渡し続けなくてはいけなくなる」

「逆に考えれば、賄賂や公家衆との誼さえあれば、いくらでも土地を得られる機会、というわけだ。そういう輩も、また非常に多い」

「名和や菊池などが良い例でしょうな」

「名和殿や菊池殿は、元弘の折に朝廷軍として戦っている。恩賞を賜るのは当然だろう。わしが気に入らんのは、そのとき何もしてい

なかった輩が、今こそそと他人の土地を掠め取ろうとしていること、それを容認している公家衆たちの態度だ」

そういう風潮を生み出したのは、間違いなく新政権だ。雑訴決断所や記録所といった機関がしっかりしていれば。土地の所有権が誰にあるのかはつきりさせていけば。そう思ったところで、どうにもならない。

自分がそういう現状に不満を抱いている。今は、内外にそれを分かせておけばいい。

「ところで、大塔宮の件だが」

「証拠はなかなか掴めませぬな。それどころか、近頃は殿を狙っているようにも見えませぬ。さすがに諦めたのかもしれないませぬ」

「近頃は、どうなさっているのだ？」

「都の郊外におられることが多いようです。無頼の徒を引き連れておりますが、それは元弘の折に宮と共に戦った連中ではありませんせぬな」

元弘の戦のとき、大塔宮は畿内周辺の中小規模の土豪たちを引き連れていた。征夷大將軍に就任したときも、そうした者たちが側にいた。だが、今はもういない。大塔宮の先行きが暗いことを悟り、離れていったのだろう。

將軍でなくなり、信賴していた者たちも去り、今の塔宮はただの親王となった。そして、親王として考えた場合、彼はあまり良い立場にあるとは言えない。朝廷内にも、阿野廉子という政敵がいるのだ。孤立無援、とも言える。

「北畠卿と時折手紙のやり取りをしていたようでもあります、それもここ二三月程は途絶えております」

「北畠か。陸奥は大分落ち着いたと聞くが」

陸奥には北条の所領も多く、その残党がまだ力を持っていた。しかし宗玄と顕家の親子は、見事な手腕でそれらを掃討し、陸奥地方をまとめつつあるという。

「確かに放っておけば、鎌倉にいる御舎弟や千寿王様にとって、厄

介な相手となりましような。ただ、大塔宮様の件に関していえば問題は無いでしょう。陸奥は遠すぎます」

「他に大塔宮を助けそうな者はおらぬのか」

「いるとすれば、赤松円心でしょう」

円心。あの、仏像のような坊主か、と尊氏はその顔を思い出していた。そういえば、元弘の折から会っていない。聞いた話では、播磨守護職を解かれるなど、新政権では不遇の扱いを受けているという。戦功の大きさからすると、信じられない話だ。正成も似たような扱いを受けているが、円心の方が帝からの信任が薄い。

場合によっては、こちら側に引き込められるかもしれない。

「太郎。赤松殿に書状を出せ。内密にだ」

「はい」

尊氏の意を察したのだろう。師直は手短に頷き、足早に出て行った。

円心は変わっていないかった。一目見てそれが分かり、尊氏はどこかで安堵した。

「変わりましたな、足利殿」

開口一番、円心はそう言った。相変わらず淡々とした口調である。「状況が変わり、立場も変わる。そしてわしは、常に自分の立場を考え続けなければならぬのだ、円心殿」

「でしような。大塔宮も変わられた。正成殿や私は変わっていない。そういうことなのでしょう」

「その、大塔宮のことなのだが」

「分かります。そろそろ、落とすつもりなのでしょう」

ある程度京の政情を見ている者なら、皆分かっていることだ。

「円心殿は大塔宮と親しかったと聞く。そのせいで、不遇な扱いを受けていると」

「親しかったわけではありません。倅はそうでもないようですが。ただ、一人の男として羨ましいと思ったことはあります。ただ、あ

の御方は夢を見過ぎている。いつか潰れるのは、目に見えていました」

「夢か。円心殿は、夢をお持ちかな？」

「持っている、と言いたところですが、それは夢と言えるような者ではありません。一族郎党の繁栄。人並みに、それを考えているだけです。だからこそ、大塔宮や楠木殿のような夢を持つ人間が、羨ましいのです」

似ている。赤松円心は、その無表情という仮面の下に、自分と似た思いを隠しているのではないか。

「円心殿は、帝についてどう思われますか？」

「私はお目にかかったことがあります。ゆえに、どうと問われても答えかねますな」

「円心殿は、伯耆から戻られる帝を迎えに行かれたのでは？」

「周囲は公家衆で固められておりました。楠木殿だけは例外として拝謁を許されておられたようですが」

円心の表情は変わらない。それ以上、そこから何かを読み取るのは無理だろう。

「足利殿、一つお願いしたきことがあるのですが」

「はて、願いですか」

「倅の一人、貞範を預けたいのです」

「ほう」

それは、足利方に与するという意志表示とも取れる。貞範は確か円心の次男だったはずだ。大塔宮に近侍していたのは三男の則祐だったが、これは今、円心の元に戻っているという。

「こちらとしては、異存はない。だが、よろしいのか？」

「足利殿はいずれ動き、やがて飛躍する。私は、そう見ております。貞範がそのお役に立てば、と思います」

「そうか」

話はそれで終わった。円心は用件が済んだと見るや、ゆらりと立ちあがって辞去した。その背中からは、やはり何も読み取れなかつ

た。

第二十二話「大塔宮」

赤松円心がこちらに与したことで、大塔宮は焦りを見せ始めた。ここのところ大人しかったが、やはり打倒足利を諦めたわけではなかったらしい。

そんな折、尊氏は後醍醐帝に呼び出された。

公式の要件ではない。個人的に話がしたいのだという。

阿野廉子と組んで大塔宮を除こうとしている。その後ろめたさもあつたが、尊氏はやむなく内裏へと向かった。

いつ来ても内裏は落ち着かない。

しかも、後醍醐と二人で会うのだ。このような機会は滅多にあるまい。

時折尊氏は後醍醐に拝謁していた。しかし、そういうときは大抵廷臣が間に入る。尊氏は直答すら許されない有様だった。

「尊氏よ、良く来た。他の者はおらぬ、そう構えるな」

出会い頭、後醍醐は浴びせかけるような口調で声をかけてきた。

そのまま勢いよくどしりと腰を下ろす。何度か目にして来てはいたが、後醍醐の仕草は帝らしくないところがある。

「朕がそちを呼び出したのは他でもない」

ぎよろりと、後醍醐の大きな目がこちらに向けられる。それだけで、尊氏は身体を固くしてしまう。

「近頃、世上は酷く乱れておる。朕としては出来る限りのことをしているつもりだが、どうやら手足が言うことを聞かぬらしい」

「は」

その手足とは、自分や大塔宮のことか。

答える尊氏の声は震えた。

「……尊氏、そちの私見を聞かせてみよ。誰じゃ？」

「は？」

後醍醐の問いかけの意味が分からず、尊氏は間の抜けた顔を浮か

べてしまった。

「誰、とは？」

「そちは阿呆か。それとも朕を阿呆と見なしておるのか。話の流れで分かるであろう。私腹を肥やし、いたずらに綸旨を悪用し、武士どもの不安を煽っている輩がおるはずじゃ。それは、そちの目から見て、誰じゃ、と聞いておる」

言われて、尊氏は滝のような汗を流した。

緊張のせいだけではない。

帝に対する、ある種の感動だった。

……わしの言葉を覚えておられた！

武士は恩賞のために働く。働きに見合った恩賞がなければ不満を抱く。それが世上を乱れさせる。

後醍醐は、そのことを理解している。

傍から見ている分には、後醍醐自身も豪華な暮らしに溺れているように見える。無論、立場上暮らしぶりは豪華になるのは当然だが、後醍醐はそれで墮落するような気骨の持ち主ではなかった。

誰が見ても勝ち目などなかった鎌倉との戦。それを起こし、最後まで諦めず旗印になり続けたのである。

ただ豪華な暮らしをしたければ、鎌倉に追従しながら一生を過ごしていれば良かったのだ。危険を顧みず鎌倉打倒を志した後醍醐には、何としてもやりたいことがあったに違いない。

ただ、周囲に人がいない。

政務からは離れたところにいる尊氏にまで声をかけてきたのは、後醍醐自身それを痛感しているからではないか。

「私めは、政務とは縁遠き身。あまり良き意見は申せませぬが」

「むしろ、そうした者の言葉を聞きたいのじゃ。物事は中から見ただけで分かるものではなからう。不満を抱いておるのは武士や庶人ども。その代表は、そちであろうが」

「は。しかし……」

「安心せい。そちの言葉は朕の胸の内にだけ秘めておくわ。この場

には朕とそちしかおらぬことだし、遠慮のう申せ」

そこまで言われては、引き下がれない。

尊氏は度胸を据えて、後醍醐と向き合った。

「では、畏れながら申し上げます。世上の乱れの原因は、大塔宮様にござります」

「ほう、護良がな」

後醍醐はさして驚きも見せずに頷いた。近頃の大塔宮について、阿野廉子からあれこれと聞かされているのかもしれない。あるいは、廷臣からかもしれない。

今の後醍醐の反応が、大塔宮の立場を如実に表しているような気がした。

「大塔宮様は、鎌倉との戦の折、獅子奮迅の働きをなされました。天台座主の身で弓を取る道を選び、楠木正成殿、赤松円心殿らと共に前線で戦い続け……おそらくは、その余韻が未だに抜けておられぬのでしょうか」

「以前、護良が言っていたな。そちが第二の鎌倉となる、と」

「杞憂でございます。吾ら武士は働きに見合う恩賞が得られればそれで良し、と考えております。鎌倉政権が生まれたのも、元はその不満があつたからこそ。不満もなくして、なにゆえ帝から離れましょうや」

「そこを、護良がいたずらに突き、世の武士どもを騒がせておる、というわけか」

「大塔宮様は、吾らの思いを理解なされぬ。例え吾ら武士を今潰したところで、やり方を変えねば結局同じこと。武士がいなくとも、庶人も不満を抱けば武器を持ちまする」

言ってから、尊氏は心配になってきた。ここまで言う必要はなかったのではないか。

だが、後醍醐は不快な色も見せず、鷹揚に頷いて見せただけだった。

「そちの言い分はもつともじゃ。王朝の下、皆が安らかに暮らせる

世を作らねばならぬ。そのようなとき、いたずらに世上を騒がせる護良は言語道断じゃのう」

「は」

「あやつは、さしずめヤマトタケルといったところか。勇猛果敢で戦の折には役に立つ。じゃが、敵となる者がおらねば己を持て余す性質のようじゃ。そちを執拗に敵視するのはそのせいかのう」

「……」

「平時には無用の男であったようじゃ。少なくとも、京に置いておくには危険過ぎる」

そのとき、後醍醐の表情が少しだけ曇った。

言葉とは裏腹に、それはどこか、我が子を氣遣っているようにも見えた。

「恐れながら申し上げます」

「なんじゃ」

「これはあくまで武士の身としての意見にございます。しかし、一方の言葉だけ聞くようでは正しき聖断も出来ぬものかと……。ここは、大塔宮様の御言葉も」

「来ぬ」

その一言で、尊氏の言葉は打ち消された。

「再三呼び寄せたが来ぬ。廷臣の中には、それを以て護良に叛意ありと抜かす者もおるが……」

呟く後醍醐の姿が、とても物憂げに見えた。

大塔宮が捕えられたとの報告が尊氏の元に届いた。

建武元年（一三三四年）、十月のことである。

捕えたのは、後醍醐の側近となっていた名和長年、それに結城親光である。

「結城の倅がな」

この日が来ることを予感していた尊氏は、大塔宮が捕えられたこともそうだが、結城氏のことを想い浮かべていた。

結城親光は、尊氏同様幕府の御家人だった結城宗広の子息である。宗広は武士の中でも朝廷の信頼が厚く、後醍醐、北畠親子らと昵懇だと聞いている。現に、宗広は子息を朝廷に残しつつ、自身は北畠親子と共に陸奥へ下向していた。

結城親光が大塔宮を捕えたということは、大塔宮が完全に孤立していたことを示している。無頼漢たちも、命をかけてまで大塔宮を救うつもりはないのか、件の知らせを受けて散り散りになってしまった。

京の治安は、僅かながら回復した、とも言える。

足利氏当主の立場としては、待ちに待った展開のはずだった。大塔宮を政局から排除したことで、今後はじっくりと腰を据えて公家衆の相手が出来ようになる。そして遠くないうちに主導権を握り、武家社会の取りまとめに乗り出す。

だが、尊氏自身はその未来絵図を、どこか他人事のように眺めている。

大塔宮が捕えられたことで内心浮かれたした家来衆を、どこか冷めた目で見ていた。

「殿」

穏やかな声で我に変える。

目の前には、細川頼春が座っていた。

「いかがでございます？ 京の味も良いのでしょうか、やはり私は鎌倉の方が好みに合います。殿もそうであろうと思ったのですが」

頼春は尊氏の一つ上だった。細川氏は足利氏の庶流で立場も低い。だからかどうかは知らないが、頼春は足利一族が持つ名門意識をひけらかさない。本人の性格もあるのだろうが、尊氏としては親しみやすい一族の一人だった。

彼は、鎌倉で千寿王や直義の政務を助けている。尊氏の面子を気にしてか、彼も蔵人に任官されているが、頓着している様子はまったく見られない。

頼春は、手土産として甘味の菓子を持参してきていた。

「うむ。まあ、そうだな。わしも、やはり坂東の味の方が馴染み深くて良い」

「そうでございましょう。なにせその菓子、登子様が殿にと用意されたものですから」

「登子がか。それは危なかった。もし今一などと答えていたら、源九郎、お前告げ口するつもりであつたろう」

「さて。ただ、私は奥方様に嘘を申すような真似は出来ませぬが……」

「言いよるわ。こやつ」

源九郎とは、こういう他愛もない話をするが多かった。

師直は信頼出来るが、どうしても足利家に関わる雑事が話題に上り、煩わしく思うことが多い。特に近頃は、足利氏を取り巻く状況が状況なだけに、面白くもない話ばかりが続いている。

直義は鎌倉だし、登子や千寿王もそうだ。それに登子や千寿王の前では家長として、直義の前では兄として振舞ってしまう。どこか素の自分に成り切れなかった。

鎌倉も決して安穩ではないことは、尊氏にも分かっている。東日本は鎌倉政権の、つまり北条氏の根拠地が数多くあつたのだ。残党の決起も少なくない。

今年の三月には北条譜代の臣である渋谷氏・本間氏が北条高時の一族を旗印にして決起した。これは直義の命を受けた足利氏の一族・渋川義季が撃退している。

また、八月にも葛西氏・江戸氏といった鎌倉政権譜代の者たちが決起し、直義を悩ませている。

「義季は頑張っておるようだが、どうにも北条の残党の抵抗は厳しいようだな」

「はあ、御舎弟ともども頭を抱えている日々でございます。せっかく奥方を迎えられたのに、夫婦でのんびりとする暇もないようで」
鎌倉府に移ってから、尊氏は渋川義季の姉を直義に娶せている。

血気盛んな若武者である義季のことを気に入っていたこと、そんな

義季と直義の結びつきを強くしようとしたこと、直義にまだ正室がいなかったことを憂慮したことなど、理由はいくつもある。

「登子と千寿王はどうしている？」

「ほぼすべてを御舎弟に任せておられます」

「それで良い」

直義は昔から、強烈な反北条の感情を持っている。そのため北条氏出身の登子に対しては、どこか必要以上に距離を置いている。尊氏の正妻・嫡子と、その弟との間で意見が揉めるようなことがあれば、鎌倉府が分裂しかねない。

「殿。御舎弟の力により鎌倉府も落ち着きを見せつつあります。奥方様と千寿王様をこちらに呼ばれてはいかがでしょう」

「源九郎、余計な気を回すな。わしも会いたい……あまりあやつらに、ここに来て欲しくはない」

はて、と首をかしげる頼春に、尊氏はうんざりした様子で言った。
「ここに長居すると、毒される」

それから幾日も経たないうちに、頼春は鎌倉へ戻ることになった。供の者たちと、思わぬ客人を連れての帰還となる。

行列の中ほどに籠が見えた。中にいるのは、大塔宮である。

尊氏は、離れたところで一人それを見送っていた。供の者たちは師直に命じて控えさせている。師直自身は残ろうとしたが、尊氏は下がるように言った。

籠の中の大塔宮は、今どのような心境だろう。

大塔宮が捕えられて間もなく、尊氏の元に朝廷から正式な使者が来た。大塔宮は先の戦乱での功に驕り、帝を除こうとしていた。そのために挙兵の準備すらしていた。だから捕まえたのだ、という。

そんなはずはない、と尊氏は頭を振った。

大塔宮が敵視していたのはあくまで尊氏だ。後醍醐をどうこうするという発想など持っていなかったに違いない。挙兵するにしても、おそらく今の塔宮には挙兵するだけの声望もない。大方、阿野廉

子辺りが作り上げた虚構の名目であろう。

……わしにとっては、初めての対等な『敵』だったな。

武士だからだろうか。こんな形ではなく、もっと別の決着をつけたかった。

広々とした青野原。坂東から駆け上ってきた自分の脇には、直義や師直、頼春たちがいる。対する大軍勢を率いるのは大塔宮。その側には、楠木正成や赤松円心がいる。

尊氏が軍配を振るう。大塔宮が刀を抜き、先頭になって駆け出す。そんな風に、正面から競い合ってみたかった。

こんな願いも、勝者の傲慢でしかないのだろう。それでも尊氏は、そう思わずにはいらなかった。

籠は遠くなっていく。

それが見えなくなるまで、尊氏はその場に立ち続けていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7743c/>

荒波の将軍

2010年10月8日23時28分発行